

グッドスピード！！

夢落ち ポカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

個性社会で世界が混乱している中、アメリカ合衆国は自国を守る為「シビュラシステム」を運用して社会秩序を守っていた。

最年少ヒーローグッドスピードと呼ばれている加減アクトはシビュラシステムからある任務を受ける。

長期派遣任務——任地は日本。

これは、異端のヒーローが織りなすヒーローストーリーである。

注意

なるべく原作沿いにはいますが、一部オリジナルも含めています。

作者の名前にピーンときた方、たぶん当たり。

それでもよろしい方は、どうぞ。

目次

プロローグ	1
第01話 加減アクト	7
第02話 圧倒的にして	12
第03話 早速テスト	19
第04話 戦闘訓練《上》	32
第05話 戦闘訓練《下》	41
第06話 狼男退治	54
第07話 異端なるヒーロー	64
第08話 開戦の時来たれり	83
第09話 蠢く者 蹂躪する者	93
第010話 死柄木弔	102
第011話 VS脳無	111
第012話 事件終結そして闇が動き出す	124
第013話 体育祭に向けて…	137
第014話 雄英体育祭開催 上	147
第015話 雄英体育祭開催 下	155
第016話 予選	164
第017話 悲惨散々第2種目	177
閑話 それぞれの敗北	190
第018話 再会、本選	197

プロローグ

アメリカ——カリフォルニア州サンフランシスコ

100万ドルの夜景と謳われる魔都をバックに、ある捕り物が行われていた。

ヴィラン
敵——個性社会においてヒーローと対となる個性を使った犯罪者たちを指す存在。

夜の高層ビルを滑空する鳥男——ヴィラン名『ナイトホーク』は背後から迫りくる脅威——猟犬から全力で逃げていた。

アメリカ—ヒーロー界では現在、とある『システム』が運用されている。

このシステムによって、個性社会となり治安の悪化したアメリカにおいて、ヴィラン、そして『潜在犯』と呼ばれるヴィラン予備軍を徹底的に隔離、排除、取り締まることで平和と秩序を齎した。

システムの名は——『シビュラシステム』。

個性社会の台頭と同時期に生まれ、サイマティックスキャンによって計測した生体力場から市民の精神状態を科学的に分析し、そこから得られるデータをサイコパス——人間の精神状態を科学的に分析して数値化したデータを指す——として数値化したあと、導かれた深層心理から職業適性や欲求実現のための手段

段などを提供する、包括的生涯福祉支援システムである。

アメリカ国民はこのシビュラシステムにより常に見守られて生活をしており、その見守りの中、サイマティックスキャンから犯罪係数——犯罪者になる危険性を表した数値を指す——が分析され、数値が一定の基準を超えて回復しない者は犯罪を犯す以前に『潜在犯』と呼ばれる犯罪者として扱われ、社会から実質的に排除・隔離される。未だこの更生施設から出てこられた潜在犯は『特例』を除き現れたことはない。

ナイトホークは街頭の簡易スキャンに引っかかっただけで潜在犯にされ職を追われ、更生施設へと移動中強引な脱走を試み成功した経歴を持つ潜在犯だ。

その後は軽犯罪を繰り返し、裏社会に潜んできた。

そしてその潜在犯たちを取り締まるのが厚生省ヴィラン対策課——通称猟犬課である。

ヒーロー資格と得た後、厚生省の試験を合格した者が所属することを許される、いわゆるエリート職だ。

だが、アメリカにいるヴィランたちは絶対に彼らをヒーロー等とは呼ばない。

ヴィランを見つければ殺意を以て狩りに来る輩を、間違っても英雄などと呼びたくなかった。

「——くそつ、くそつ!!」

よりにもよってマッドスピードが出張ってくるなんて…ヤバい、ヤバ過ぎる!!」

ナイトホークの焦りは次第に逃走の精彩を欠いていき、ナイトホークが口にした『マッドスピード』と呼ばれた人物の哄笑が夜闇に響いた。

「クハハハハッ!!」

どうしたヴィランよ、ヒーローたる俺の職質に対し踵を返すとは意気地のない!!

貴様の速さでは俺から逃げ切る事など不可能、早々に観念し投降するがいい!!

抵抗は無意味と知れ!!」

まだ変声期も終わっていない子供の声が聞こえてくる。

ナイトホークは逃走している最中にちらりと後方を見る。

そこには全身を黒尽くめのヒーロースーツで着込んだ小柄な少年がナイトホークのような空を飛ぶ羽もないのに重力を無視して追走し、後方10メートルまで迫ってきていた。

最年少ヒーローにして、下半期ヴィラン処分回数NO.1ヒーロー。

アメリカヒーロー界における彼の名はノンストップヒーロー、グッドスピード。

アメリカ西部に大規模な勢力を持っていたヴェイジランテ、スピック

を殲滅。

その後カリフォルニア州を中心にアメリカ西部にいるヴィランを捕縛、処分するまで止まらない過激派ヒーローとして僅か半年でアメリカ全土どころか、世界中にその名を知られる新進気鋭のヒーロー。アメリカヴィラン界における彼の名は虐殺系ヒーロー、マッドスピード。

ヴィランと聞けば容赦なく襲い掛かってくる狂気の死神。

軽犯罪だろうが重犯罪であろうと老若男女問わず、サイコパスを濁さず殲滅仕切る、狂気と畏怖の象徴だ。

ナイトホークよりもはるかに凶悪なヴィランを屠ってきた彼にとって、ナイトホークを狩るなど容易いことだと——ナイトホーク自身はそう判断して決して反撃もせず、逃げに徹したのだ。

これまで数多のヒーローたちから逃げ切ってきた個性を使って。だが、そのちっぽけな自負もこれまでなのか、10メートルの距離は段々と詰められていき、遂に背後まで近付かれてしまう。

「——さあ、懺悔の時間だ。」

墜落するまで、己の罪を数えるがいい!!」

瞬間、ナイトホークの背中に名状しがたい苦痛が彼に襲い掛かり、それがマッドスピードによって齎されたと理解するのは当然の帰結であつた。

墜落するまで約10秒、己の羽があれば墜落は免れないが体勢を整れば致命傷は避けられる。

激痛を頭の隅に何とか押しやり、背中に力を入れようとして気付いた。

「——半分、ない?」

ナイトホークは再度背中に力を籠める。

これまで25年間共にいた相棒に、己の一部に激励した。さあ起きろ俺の翼、その力強い羽ばたきで俺を守ってくれ。だが、ナイトホークの激励に個性は答えなかった。

——否、応えられなかった。

「あ、ああ。」

あああああああああああああつ!?

ない、ない、ないいつ!?

おれの、俺の羽がああつ!?

ナイトホークのサイコパス係数はマッドスピードに追われていたことで危険域に迫ってきていたが、ここにきて己の個性に起こった惨劇に遂に精神状態が決壊を起こした。

「——オーバー300、残念だが、これまでのようだな」

ヴィラン対策課に所属した職員^{ヒーロー}だけが持っているドミネーターと呼ばれる特殊拳銃はシビュラシステムと直結し、照準を合わせた相手の犯罪係数を瞬時に測定する。

これはアメリカ社会において一般でも知られていることで、犯罪係数が300を超えると執行対象に対して排除^{エリミネート}の宣告が下される。

端的に言って、ナイトホークはこの世にいない人間とマッドスピードに——シビュラシステムに宣告されたのである。

「ヴィラン名ナイトホーク、本名ヴィル・ミーガン。

エリミネート、執行する」

漆黒の拳銃がナイトホーク——ヴィルに向けられ、引き金が引かれる。

閃光はヴィルの胸に吸い込まれ、同時に、彼の体は奇形に膨らみ破裂した。

地面にナイトホークだった残骸がまき散らされるが、すぐにヴィラン対策課が保有している対策チームによって、周囲の住民へのサイコパスを徒^{いたずら}に上昇させるようなことはない。

こうして、サンフランシスコの夜の捕り物は容疑者死亡で幕を下ろしたのだった。

仕事を終えたマッドヒーロー、もといグッドスピード、本名加減阿久戸^{カゲケンアクト}（以下アクト）は自宅へと帰ってきていた。

シャワーを浴びると手早く自動機械に軽い夕食を作るよう指示し、

己は髪を乾かしながらテレビを見ている。

手首には所属している厚生省ヴィラン対策課から貸与されている通信端末もあり、いつでも対応可能な状態で待機している。

アクトは未成年だが公務員だ。

実力主義であるアメリカにおいて、年齢制限などなく緊急出動もあるからの行動であった。

夜食が出来上がるとすぐにレンジからトレイを取り出す。

食事を終わると最低でも日が変わるまで起きておくことを決めているアクトはテレビをサウンド代わりに黙々と本を読んでいる。

するとそこへ、通信端末がアラートを鳴らす。

緊急出動かと手首を見やったアクトだが、怪訝な顔をして端末に触れた。

指向性スピーカーから、アクトも聞き慣れた、だが決して心を許していない相手からの通信だった。

『ヒーローグッズスピード、夜分遅くに失礼致します。』

こちらはシビュラシステム、今周囲に誰もいないことを確認して通信を行っています』

プライバシーもへったくれもない言葉を聞いたアクトだが、本人は気にしない。

高度な人工知能を持っているようと所詮はシステム——機械仕掛けに自室を覗かれようと、やましいものなどないからだ。

「用件は何だ、俺は緊急出動がなければもう寝る時間だ」

『承知しております。』

ですが、緊急の連絡を要すると判断し、こうして貴方と話をしている次第です』

これまでの経験から、シビュラシステムから個人的な連絡が入るなど聞いたことのなかったアクトは手早く済ませようと話を進める。

「…ロクでもない用のようだな。

用件を言え」

『——貴方に、長期派遣任務の命令を下します』

それはアクトにとって願ってもなかった機会であり、シビュラシス

テムにとって利益のある、いわゆるWin-Winな任務であった。

第01話 加減アクト

雄英高校の正門前に、黒塗りの高級車が止まった。

折しもその日は雄英高校の入学試験の日、運転手——雷銅瞬太が主人のために先に車から降りてきて、扉を開ける。

受験生の少年少女たちはそれをみて『ああ、どっかの金持ちが記念受験に来たんだな』と思った。

ヒーロー業界では屈指の名門校である雄英高校ヒーロー科の倍率は驚愕の300倍。

特にヒーロー科に入学できるのは合計しても50名にも満たない極少数。

合格しないにしても、記念に受験したという思い出の欲しい学生はそれこそ五万といた。

もちろん、本気で入学する気にいる学生もいるが、300倍の合格率に届くのはその中でも僅かだ。

「アクトさん、雄英高校に着きましたよ。」

13時に迎えに参りますので、それではこれで失礼しますね」

車から降りてきた少年——アクトは瞬太から迎えの時間を聞くと頷いた。

15歳にしては平均を下回る小柄な体格をしているが、それ以上の威圧感のある覇気、そして端正な容姿に右半分を覆う黒い眼帯は見る者の第一印象を釘付けにするには十分なほどだった。

「それでは雷銅、行ってくる。」

予定が変わるようなことがあればまた連絡する」

中性的だが確りとした声が聞こえる、まだ変声期前なのだろうが、これもまた覇気に満ちている。

「ご武運を」

「クハハ、期待に応えよう」

一言、そう声かけた瞬太の声音もどこか優しいものを感じさせ、お互いの関係が良好なことが伺える一幕だった。

アクトは少し離れた場所で転びかけている縮れ毛の少年の受験生に印象を浮かばせる個性を持っているのか——同じく受験生の少女が助ける場面を視界に映すが、構わずアクトは行動へと向かっていくのだった。

『今日は俺のライブへようこそー!!』

エヴィバディセイハイ!!』

マイクヒーロー、プレゼント・マイク。

アクトは最近まで海外で暮らしていたので知らないが、雄英高校以外でもラジオのパーソナリティを務めているほど人気のあるヒーローだと、隣の少年——緑谷出久（以下デク）は小声だが若干興奮気味に語っていた。

ヒーローオタクなのか、彼は視界に映る教師側のヒーローたちを見ては興奮して、周りから白い目で見られていた。

『こいつぁシヴィー!!』

受験生のリスナー!

実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!

ア—ユーレディー!?!』

ハイテンションなプレゼント・マイクの声掛けに対し、会場は冷め切っていた。

アクトも冷めた目でプレゼント・マイクを眺めており、ハイテンションな彼のプレゼンを聞いていた。

学力試験後、動きやすい体操服に着替えたのち実技試験が待っている。

模擬市街地演習、持ち込みは自由、プレゼン後は各自指定された演習会場へ向かっていくこととなる。

試験時間はたった10分、その間4種の仮想敵ライアンを模した機械人形を倒していく仕様で、0点の巨大敵は試験最大の難敵だろう。

1点、2点、3点の仮想ライアンはそれぞれ特徴があるものの、ア

クトの個性を以てすれば容易い相手だが、全力を出す気はない。

この試験では情報収集、機動力、判断力、対応能力、戦闘能力、そしてヒーローとしての姿勢が評価されるものだろうと大よその当たりを付けたアクトは、試験中はそれに見合った対処をして見せれば合格は容易いだろうし、何より自らの個性をひけらかして対策されようものならたまったものではないからだ。

『——物見遊山のつもりなら即刻雄英こへいから去りたまえ!!』

いかにもエリート青年から指摘を受けた出久は髪の毛同様縮こまってしまいが、アクトはそつと声をかける。

「気にしなくてもいいぞ出久よ、君以外にもぎわっている受験生はたくさんいる。」

この程度の雑音で集中力を乱されるようなら、端からそんな受験生は合格出来んさ」

アクトとしてもエリート青年の言は一理あると思ったが、記念受験だろうと本気の受験だろうと『結果』がすべてだ。

不真面目に見えようと凶暴であろうと根暗だろうと、試験次第で倍率300倍は皆平等である。

ただ、個性と本人の才気によって不平等なだけだ。

「あ、ありがとう、加減くん」

「礼はいらない、では出久、俺とは違う試験場所のようだから、これで。」

また雄英高校のヒーロー科で会えることを祈っておこう」

「うっ、うん、またねっ!!」

おどおどしていた態度が一変、その瞳に強い覚悟を見たアクトは出久の個性を知らないが彼がこの試験に合格し、雄英高校の正門をくぐり抜けることを幻視した。

「俺からは以上だ、最後にリスナーへ我が校の『校訓』をプレゼントしよう！

かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った！

真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者と！」

——PlusUlt^更ra^向!!

「それでは皆、良い受験を！」

プレゼント・マイクのプレゼンが終わると受験生達は、それぞれの会場に向かった。

試験会場Aでは、それぞれの高校の体操着を着た受験生たちが犇ひしめいている中、アクトの周りは一定の距離ができていた。

試験会場は高層ビルが乱立したりと臨場感に溢れている。

彼は海外で通っていたジュニアハイスクールでは体操着というものが無い。

その為彼は入学式で着ていた落ち着いた服装ではなく、適当に持ってきていた無地のシャツと

黒の短パンという格好でいたが、それでも近寄り難さがあるのか、アクトに声をかける者はいない。

アクトはこうした試験ではお互いがライバルではあるが、協力体制を築いて合格率を上げようとする受験生がいてもおかしくないと思っていたのだが、お互いをライバル視していて緊張した表情をした受験生ばかりで少し失望していた。

アクトは周囲を見回して、見所のありそうな受験生を探していく。別段強力な個性持ちではなく、補助にも応用可能な万能個性持ちが望ましいと眺めていると、一人の少女と目が合った。

クールな印象のする、耳たぶにイヤホンのようなコードなりという形をした少女の名は耳郎響香じろうきょうかと名乗った。

「では響香、俺と協力体制を取らないか？」

「…え、なに言ってるの？」

「…うか、協力なんて…」

当初、信じられないといった表情をする耳郎だが、アクトの評価はそれに反して現在進行形でうなぎのぼり中だった。

「君を見て確信した、戦闘能力はあまり高くは見えないが、その冷静さの伺える印象はこの試験でも強い武器だ。」

協力体制をしてはいけない、なんてルールはプレゼン中にはなかつ

た。

同校同士で協力はさせていないようだが、実際の現場では他事務所での急場のペアなんていくらでもあるだろうから、この程度の協力何ら問題はないだろうさ。

それに俺との会話中、俺がどういう思惑で自分に話しかけてきているのか、メリットデメリットを測り続けている。

及第点だ、たとえ俺の助力があるうとなかろうと、君はこの試験に合格するだろうと予言しておこう」

アクトは耳郎との会話中、アクトの思惑が一体何なのか、この状況を眺めている受験生たちとを見比べ、アクトと手を組むのが最良なのかを天秤にかけて続いていた。

アクトの言葉を聞いて、慌てて協力体制を組もうとする受験生たちもいたが、お互いの足を引っ張ろうと表情に出ているのか、組めた者は殆どいないし、組めたとしても油断ならない相手が身近に出来たというデメリットにしかならないお粗末なものだ。

「…上から目線なのがちよつとムカつくけど、いいよ。

アンタと組んで、この試験クリアする」

「グッド、それでこそ俺が見込んだ同級生候補だ。

では響香、簡単な個性の紹介をして計画を立てるとしよう。

なに、俺と響香なら余裕だ」

「…何だかウチ、変な奴に目をつけられたのかも」

自信に満ちたアクトに、やや呆れと諦観の表情を浮かべた耳郎は実技試験開始まで、大雑把ではあるが作戦会議に入るのであった。

第02話 圧倒的にして

『はいスタート』

プレゼンに続いて、実技試験の中継はプレゼント・マイクが行うようだった。

開始の宣言は唐突に行われた。

プレゼント・マイク曰く、実践ではカウントはしないから。

既に賽は投げられている以上、駆け抜けるしかない。

受験生たちが走り出す、その中で一際早かったのはアクトだった。

その小柄な体格に見合わない圧倒的速さは、個性からくるものだろうと察した受験生たちだがどうすることもできない。

アンチヒーロー的な行為、妨害などはルール上禁止されていた。

「クハハハハハッ!!」

先頭集団をあつという間に引き離し、目についた仮想ヴィランを片っ端から哄笑と共に殴りつけていく。

殴ったと同時に、仮想ヴィランはまるで重力を無視したかのように宙を舞っていくのを先頭集団はそれを見て驚愕した。

開始10秒と経たず、アクトは仮想ヴィランを10体以上破壊する。

先頭集団の視界からポイントとなる仮想ヴィランが消えたことで、受験生たちは周囲に散開していった。

アクトたちの近くにいれば、片端から先手を打たれて最悪ポイントになってしまう可能性があるからだ。

切り替えの早い受験生たちはすぐさま方向転換して、アクトたちから離れていく。

「は、はやっ!!」

アクトの奴、ホントにやっちゃったよ」

「クハハハハッ!!」

さあ響香、俺の手を取れ、試験会場の奥へと突っ込むぞ!!」

耳郎は作戦会議中、アクトが『開始直後に仮想ヴィランを10体以上ぶつ飛ばす』という宣言を実行して見せたことを聞いてはいても実際に目にして驚いていたのだったが、すぐさま戻ってきたアクトに手をつかまれる。

計画の第二段階がやってきたのだ、試験時間はたった10分、時間は有限である以上お互いの個性を使つてポイントを稼ぎ続けるしかない。

「あ、ちよつ、いきなり掴むなつてえええええつ!!」

体格に見合わない怪力に耳郎は引つ張られながらも悲鳴を上げるが、意に介さずアクトは突き進んだ。

辿り着いたのは周囲に受験生のいない絶好の穴場。

『テキハツケン、テキハツケン』

『ハイジョ、ハイジョ』

『リアジユウブツコロシテヤルー!!』

1体おかしな発言をした仮想ヴィランがいたのだが、『リアジユウ』なる言葉を知らない帰国子女のアクトには通じなかつたのだった。

「響香、この場は君に譲ろう。」

危ない場面じゃない限り俺は手を貸さないから、あの仮想ヴィランをガラクタに転生させてやれ」

「ありがとアクト、仮想ヴィランがここから東側に集まってきてるよ。」

お勧めはそこかな」

高ポイントの仮想ヴィランがやってきて、アクトは耳郎にこの場を譲った。

アクトはその間何もせず突っ立っている訳ではない、少し離れた場で更なるポイント稼ぎだ。

あまり協力しているようには見えず、耳郎がアクトにおんぶにだつこ状態と見られなくもないが、これも協力体制の一つである。

耳郎の個性『イヤホンジャック』。

彼女の耳たぶから伸びたイヤホンを対象、例えば地面に刺すことで反響定位エコーロケーションのような索敵を可能にしていた。

伸縮可能なイヤホンを仮想ヴィランに突き刺し、自らの心音を大音

量の衝撃波として放ち仮想ヴィランを破壊していくのを遠目から見たアクトはやはり自分の目に狂いはなかったと思うのだった。

相手が人でない以上、一切の容赦なく仮想ヴィランを破壊していくアクトはさながら破壊神さながらの活躍をして受験生たちとのポイント差を引き離していく。

途中からアクトの破壊ぶりを見て試験途中で諦めて後退していく受験生がちらほら出始めていたが、アクトからしてみれば『記念受験お疲れ様』程度の感情しか湧かなかつた。

そして終了3分前になった頃、全長約30mはあるだろう巨大凶悪な機械人形が受験生たちに迫ってきていた。

圧倒的脅威、巨体ということもあって高速ではないものの、高層ビルにぶつかりながらも物ともせず強引に瓦礫を撒き散らしながら突っ込んでいることから、頑強という点においてはこれまでの仮想ヴィランとは一線を画している。

自らの個性では倒せないとすぐに判断してか、後退していく受験生たちがいる中で、アクトとだけ耳郎は違った。

「クハハハハッ!!」

来たぞ響香、壊し甲斐のある仮想ヴィランだ!!」

「アクトー!!」

楽しそうなのはいいけど優先順位!!」

「わかっているともっ!!」

さあ響香、一番近い逃げ遅れた受験生の場所はどこだ?」

破砕音で聞き取り難くなっている為、大声で声を交わしている2人は確実に逃げ遅れた受験生たちを確保して誘導していく。

ヒーローとしての姿勢を見せる為、アクトたちは戦闘不能となった受験生たちを探しては動ける受験生たちに押し付けて後退させていった。

「クハハハハッ!!」

さあ、後は俺たちだけだな響香!!

時間はあと1分を切っている。

俺はここで巨大仮想ヴィランを頂くから離れているがいい!!」

「ちよ、ちよつとアクト!?!」

アクトを止めようとした耳郎だったが、話も聞かず巨大仮想ヴィランへ突撃してしまってしまった事から、その声は届かなかった。

アクトはこの巨大仮想ヴィランを圧倒的脅威とは認識していない。自らの個性に自信を持ち、10年近く個性の研究、研鑽を重ねてきたアクトにとって、対象の生物・非生物の体格差による対処法などとうに確立していた。

巨大な右腕を振り上げ打ち下ろす巨大仮想ヴィランの一撃をアクトは難なく避け、轟音と共に右腕が地面にめり込んだ所をアクトはすかさず腕に乗り移ると、一気に頭頂部まで駆けていく。

心臓部を破壊すれば機能停止する、アクトがこれまでの仮想ヴィランを破壊して感じた感想だった。

あとはやる事は簡単だ。

「さあ、チリアクト塵芥になるがいいっ!!」

アクトの拳が巨大仮想ヴィランの頭頂部、そのメインカメラ周辺を殴りつけた。

演習場に響き渡る轟音がして、巨大仮想ヴィランの頭頂部が吹き飛んだ。

人間でいえば、殴りつけたら首が千切れ飛んだ、という大惨事だ。仰向けに倒れるように、巨大仮想ヴィランは倒れ、そして二度と動くことはなかった。

そして――、

『終~~~~了~~~~!!』

プレゼント・マイクの試験終了の宣言が演習場に響き渡る。

アクトは怪我をすることなく地上へ降り立ち、耳郎のいた場所にまで戻っていく。

「どうだ響香、あの巨大仮想ヴィランを破壊して見せたぞ!!」

「:0ポイントなのに張り切って壊しちゃって。

お疲れ、凄かったよ」

耳郎はアクトが仮想ヴィランを殴りつけた拳に目をやるが、傷一つしていないことに驚きつつ、呆れと労いの言葉をかけて、耳郎はアクト

トに苦笑していた。

こうして、アクトの雄英高校の受験は終わりを迎えたのだった。

実技試験終了後、雄英高校では試験の集計結果を試験官、教師たちが眺めていた。

レスキューポイント
救助 P 0 の爆豪勝己と敵 P 0 の緑谷出久という両極端が話題に上がる中、ある1人の受験生もまた話題に上がった。

カゲンアクト
「…加減阿久戸か。」

アメリカからの帰国子女で半年間だがプロヒーローの相棒経験者をもつ異色の存在か」

敵ポイント135点、救助ポイント105点という2位の爆豪の3倍以上の240点という圧倒的1位。

雄英高校史上始まって以来の最高得点を叩き出したアクトに、教師たちはわいわいとざわめいていた。

普通科、経営科、サポート科、ヒーロー科と4つの学科がある雄英高校は日本屈指のヒーロー養成学校。

次代の金の卵の選別をしている彼らにとって、これほどの『極上級』のヒーロー候補がやってきたとなれば、一緒に見ていた一般事務職の彼らも興奮が冷めないのか、アクトの実技試験の映像を反芻していた。

仮想ヴィランを高速で破壊しながら周囲の警戒、耳郎響香という急場で相棒を作るという機転、そして連携しながらの他受験者を巨大仮想ヴィランから逃がす手際の良さ。

極めつけはその巨大仮想ヴィランを一撃で倒してしまう圧倒的戦闘力。

強大な個性というのは大味で大雑把な制御がよく見られるが、アクトの見事な制御は既にプロヒーローに匹敵、いやそれ以上だ。

「確か加減って元プロヒーロー『アクセルマイン』と『ダウンオーバー』の一人息子だったろ？」

「アクセルマインって…ああ、あのスピードヒーロー!!」

「エンデヴァーの事件解決数N 0. 1に匹敵する事件解決スピードN 0. 1ヒーロー。」

一時期は個性婚でエンデヴァー以上に叩かれたけど…」

「…海外でのヒーロー名は…ノンストップヒーロー、グッドスピードか」

「アメリカ西部…いや、アメリカどこるか世界でもトップクラスに知っている過激派ヒーローだったな」

「シビュラの申し子…と呼ばれていたはずだ。」

通常なら犯罪係数が跳ね上がるような惨劇をどれだけ見ても起こしても変動しないという特異な精神構造を持つ…我々からしたらそれこそ異常者と呼ばれているような人種だぞ」

アクトの複雑な家庭の事情、留学先での活動を知っている一部の者たちは難しい表情をしている。

家庭事情はともかく、留学先での相棒時代は僅か半年だったにも拘らず、血生臭い話がここ日本にまで伝わってきていたのだ。

——曰く、グッドスピードの通った跡にはヴィランの死体しか残らない。

アメリカヒーロー界ではシビュラシステムが一部のヒーローへ殺人許可を認可している。
ライセンス

無論、厳正なサイコパス診断を通過している者が必須であり、この殺人許可を持っているヒーローは現在15まで減った州に5人もいないほど僅かだ。

アクトはアメリカヒーロー界史上最年少でこの殺人許可を取得していた。

彼が関わった事件はアクトの父アクセルマインのように被害が拡大することなく早期解決を見せていたが、その結果ヴィランはアクトの容赦ない個性によって排除、
エリミネート または精神崩壊という強引な解決手段を取っていた。

一時は国家権力による殺人とこの許可が認可された際にメディア槍玉に挙げていたが、それに比例して治安が安定し、ヴィラン発生率

が着々と低下していった実績もある。

つまりは、シビュラシステムの正しさの証明となったのだ。

日本のオールマイトとは違った方法で、彼らはシビュラシステムで国を守っていた。

アクトが活動していたアメリカと違い、日本では殺人許可は認可されていない。

そんな彼がどうして日本へやってきたのか疑問に感じた者は多くいて、日本のヒーロー界では彼の流儀とは合わないと一時は合格取り消しの話も上がるが、待ったをかけたのは雄英高校根津校長だった。「アメリカ政府からの推薦もある、突っぱねる事は出来ない。

だけど、郷に入っては郷に従え、アメリカとは違う、日本のヒーローというものを知ってもらい、素晴らしいヒーローに導けばいいのさ！その為にも、みんなの協力が必要だ、よろしく頼むよ！」

根津校長の鶴の一声で、他の教師たちの懸念も解消されてく。

とはいえ、未だにアクトを危険視する教師がいない訳ではない。

一悶着はあったが、加減アクトの雄英高校受験は、こうして合格という形で終了する。

新入生たちは決まっていき、アクトに合格通知が届いたのはその一週間後のことだった。

第03話 早速テスト

アクトが車の送迎で雄英高校へ向かっている途中、知った後姿を見ると運転手の瞬太に車を止めるように命じた。

「おはよう響香、乗っていくか?」

「アクト…あんだ、金持ちだったんだ?」

徒歩で通行中だった耳郎は高級車から見える運転手とアクトを見て驚いていたが、アクトとしては面白くない返しだったのか、表情を若干だが曇らせた。

「金持ちだの貧乏だの今はどうでもいいことだ。

どうする?」

「…………乗る、乗るよ。」

席詰めて」

耳郎はアクトの誘いに乗った。

アクトと話したこともあつて登校の時間も短縮され、一石二鳥なので断る理由もなかったからだ。

耳郎を乗せると、車はすぐに発進し雄英高校へと向かっていく。

「それでは改めて、試験合格、並びに入学おめでどう響香。

これから3年間、よろしく」

「…よろしくアクト。」

そういえばさ、試験の結果どうだった?」

「当然、1位だ。」

わざわざこの日本の平和の象徴、オールマイトが通知の映像で教えてくれた。

「どうやら今年度から雄英の教師になるらしいな」

アクトは合格通知が届いた時の事を思い返す。

『おめでどう加減少年!!』

「君は雄英史上最高得点を出して合格した!!』

年齢不詳、個性不明、ヒーロー界に颯爽と現れその実力で不動の人氣を得たかれの登場以降、深刻だったヴィラン発生率は年々と低下

し、存在そのものが”抑止力”とされ名実共に”平和の象徴”となった男。

国民栄誉章も断った彼が今年度から雄英高校の講師になると知れば、マスメディアが騒がない筈がない。

騒々しい高校生活1年目を迎えることは間違いないだろう。

守秘義務ではなく『お願い』をされたアクトや他の入学者たちは、当然口を噤み、NO。1ヒーローの授業を楽しみにしている者が殆どだろう。

「驚いたよね、あのオールマイトが教師になるなんてさ。

…って、アクトってちよつと前まで海外にいたんだっけ？

海外のオールマイトの評価ってどうなの？」

「素晴らしい人物と高い評価を受けている。

彼がいるだけでヴィラン発生率が低下したという一種の社会現象は他国でも何とか模倣出来ないかとよく研究されていたな」

アクトとしては留学先で相棒アメリカサイドキックをしていた頃に度々聞かれていたのでうんざりするほど話していたのでその手の話は食中り気味だった。

アクトとしては次代の平和の象徴がオールマイトの背負っていた重圧を乗り越え、評価を更に高める事が出来れば今後のヒーロー社会の秩序は更に磐石になるだろうと考えてはいるが、そう都合よく行かないのが世の中というものだという事をアクトは嫌というほど知っている。

アメリカは個人よりもシステムによって管理することで平和を——シビュラシステムを生み出した。

アクトは耳郎と話を咲かせながら、雄英高校へと向かっていくのだった。

アクトと耳郎の所属クラスは1年A組、異様に高さのある扉を開くと、そこには既に殆どの生徒、これから苦楽を共にする同級生たちが揃っていた。

「…ふん、響香とはすぐ側の席か、よくよく縁があるみたいだな」

「ウチ、何か悪いことしたかな…?」

「ほう、どういう意味だ響香?」

「いやなんでも?」

「ようよう、何だよ一緒に登校とか、仲良しか!」

あ、俺は上鳴電気ってんだ、よろしくな!!」

お調子者の気の匂う生徒がアクトたちに声を掛けてきた。

席順としてはアクトの後ろの席だ、耳郎は『こいつバカそう』といった表情を隠さずに見ていたが、アクトとしてはこういつた明るい人間が嫌いではなかった。

髪形や飾っているベルトを見る限り、流行にも目敏い視野を持っていると見て取ったアクトは、好意的なあいさつを交わした。

「クハハ、俺は加減アクトという。」

よろしく電気、こちらは耳郎響香だ」

「……よろしく」

「——あつ、加減君!!」

やっぱり君も受かってたんだね!!」

上鳴と挨拶をし終えたところで、新たなクラスメイトが入ってきた。

——緑谷出久、アクトが実技試験演習のプレゼンを聞いていた時、そばに座っていた縮毛とそばかすが特徴的な少年だ。

隣りにいる明るい髪の少女は、麗日お茶子と名乗った。

「クハハハハッ!!」

無論だ、これからよろしく出久、それにお茶子。

俺は加減アクトという、最近まで海外にいたからあまり日本のヒーロー事情にあまり詳しくない。

色々教えてくれると助かる」

「よ、よろしくね加減君!!」

「——お友達ごっこしたいなら他所よそにいけ」

アクトたちが和やかに挨拶を交わしていると、背後から声をかけられた。

声のした方向へ視線を向けると、そこには寝袋を着た男が横たわっている。

芋虫が直立したかのようにふらふらと起き上がった男は無造作に伸ばした髪と無精ひげとくたびれた容姿をした痩身の男だ。

「ハイ、静かになるまで8秒かかりました。」

時間は有限、君たちは合理性に欠くね」

「そういう貴様は社会性に欠けているな、本当にヒーローか？」

挑発するような発言をしたアクトだったがそれを無視したくたびれた男——1年A組担任、相澤消太あいざわしょうたと名乗ると、先ほどまで入っていた寝袋から体操着を取り出した。

「……早速だが、体操コを着てグラウンドに出ろ」

——個性把握テスト、入学式をすつ飛ばし、早速授業を開始する担任に驚愕するクラスメイトたちはだったが、自由な校風が売り文句の雄英において、講師側もまた自由とのたまう相澤に閉口したのだった。

日本では未だ、個性を禁止した体力テストを行っていた。

個性を使わず、画一的な記録をとって平均を作り続けるのは現在の社会構造からして合理的でない。

相澤からすれば、文部科学省の怠慢だと切り捨てた。

体操着に着替えた1年A組全員はグラウンドに出ると相澤から全8種のテストに対して、

個性を使うことで自分の最大限を知ることが最初の授業だと伝える。

それが、ヒーローの素地を形成する合理的手段なのだ。

わかりやすい一例として、爆豪と呼ばれた少年がソフトボール投げを実演する事となり、その一投をクラスメイトたちが遠目から眺めている。

爆豪の中学時代のソフトボール投げの記録は67メートル。

もちろんこれは個性を使用せず記録だ。

相澤は爆豪に個性を使って投げよう伝えたと、爆豪は軽くストレッチをしながら円の中に入った。

ストレッチを終え、爆豪が振りかぶると、タイミングよく、球威に爆風を乗せた一投を放つ。

「——死ねえ!!」

『『………死ね?』』

爆豪の掛け声に内心で疑問符を浮かべたクラスメイトたちが多くいたが、そんな内心をよそに爆風を乗せた一投はボールを天高く飛んでいき、相澤の持つ計器に記録した結果が伝わってくる。

計器には『705.2m』と記載されており、個性を使用しての体力テストに胸を弾ませた何人かは興奮した。

個性を禁止されていた体力テストよりも、はるかに楽しそうだと感じたのだ。

「なんだこれ!!」

すげー面白そう!」

「705メートルってマジかよ」

「個性思いつきり使えるんだ、さすがヒーロー科!!」

「クハハ、中々の記録だな」

「……面白そう…か。」

ヒーローになる為の3年間、そんな腹積もりで過ごす気なのかい?」

——よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し、除籍処分としよう。

『『はあああ!?!』』

相澤のこの発言によって、クラスメイトたちは今日何度目かの驚愕の声を上げる。

アクトは冷ややかな目で相澤を見ているが、別段反感を抱いた訳ではない。

見込みがないのなら、早々に退場した方が将来の為だと常々思っていることだからだ。

ヒーロー向きな個性であろうと、本人がヒーロー希望であろうと、それがいざ仕事になってヒーロー活動に活かせるかは本人の能力次第。

「生徒の如何は先生の自由。」

———ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」

入学初日、アクト達に最初の試練が立ち塞がる。

入学初日にして最下位除籍、理不尽すぎる担任相澤の言葉にクラスメイト達は声を荒げた。

「自然災害…大事故…身勝手なヴィランたち…いつどこから来るか分からない厄災。」

日本は理不尽にまみれている、そういう理^{ピンチ}不尽を覆していくのがヒーロー」

厳しい言葉を投げかける相澤に、声を荒げたクラスメイトたちは段々と鳴りを潜めていく。

アクトも相澤の言葉に耳を傾けていた。

アクトにとつては今更な言葉ではあるが、生徒たちは相澤の厳しいに戸惑いながらも耳を傾けてる。

「放課後マックで談笑したかったらお生憎様、これから3年間雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける」

———“Plus^更Ult^向tra^{こうへ}さ、全力で乗り越えて来い”

相澤の挑発と激励の言葉に、一人、また一人と闘志を燃やしていく。そして、第1種目が始まった。

第1種目、50メートル走にて。

アクトは上鳴とペアだった。

既に足にトルクを付けた第一印象が真面目と見られるだろう眼鏡の少年は3秒04という記録を出している。

速度に重きを置いた個性なのだろうとアクトは推察し、個性を使い準備を始める。

「上鳴、ベストを尽くせよ?」

「おおっ、もちろん頑張るぜ!!」

お互い声掛けをして、トラックで構えているところで、号砲が鳴る。

そして、鳴つたと同時にアクトは駆け出す。

上鳴をあつという間に後ろに置き去りにし、ゴールラインへ到達したと同時に、記録用の機械がタイムを打ち出す。

——0.54秒。

先程の眼鏡の少年の3秒よりも速いタイムだとクラスメイト達は理解していた。

何しろ瞬きした瞬間にはアクトはゴールラインへ到達していたのだから。

「はやあつ!?!」

「え、あれっ、もうゴール着いてる!?!」

「飯田より早い!?!」

「韋駄天の化身か?」

「…む、0.1秒遅くなっているな。

柔軟が足りなかったか」

「眼帯少年、少しいいかい!?!」

口々に驚きの言葉を口にしていくクラスメイトたちをよそに、アクトはタイムを見て嘆息していると、眼鏡の少年がやってきた。

「ぼ…俺より早いクラスメイトがいるとはね…飯田いいだてんや天哉だ。

君は強化系の個性なのかい?」

「クハハ、そんなところだ。

こと速さにおいて、俺の個性は世界トップクラスと自信を持てるほどに速いぞ?」

…それと、俺の名は加減アクトという、よろしく天哉」

アクトは軽い自己紹介すると、飯田はいきなり自分の名前を呼んだ理由が海外暮らしに起因しているのだと理解した。

「せ、世界か…それは凄いな、俺ももつと努力しないと。

…フォームを調整すれば更に速くなるだろうな」

飯田はアクトが走っていた時の瞬間は見えていなかったようだが、タイムが伸びなかった理由の1つを指摘してきた。

「そうか、引越してバタバタしててな、あまり個性の鍛錬時間が取れなかったんだ、指摘に感謝を。」

それと天哉のフォームは良かったぞ、理想的なフォームで殆ど無駄がなかった。

それじゃあ天哉、また後でな」

「君もな加減くん!!」

お互い全力を尽くそう!!」

手をカクカクと動かしているのは癖なのか、アクトからすれば不思議な踊りをしている飯田を背後に残して、次の種目の場へと向かっていく。

その後もアクトの快進撃は続いていく。

握力テストは個性を瞬間的に使って『198kg』、ソフトボール投げは爆豪よりも上の『2258.6m』と4桁台を叩きだす。

他のテストもトップクラスかそのテストの相性の良い個性を持ったクラスメイトに後塵を拝すことになったがそれでもトップクラス。

必然、その記録を眺めていたクラスメイトたちからはアクトが汎用性の高い、特に速さに特化した個性なのだど理解していく。

そしてある程度終えて一休みしていると、思い詰めた顔をしていた出久がソフトボール投げのテストを受ける為円の中に入っていく。

それを見ていた爆豪がアクトを険しい目で睨んでいたが、アクトはあえて放置した。

アメリカでも似た経験をしてきていたアクトは、爆豪に苦々しさと嫉妬と対抗心を煮詰めた感情を向けられるのはシビュラシステムが擁するアカデミーにおいて日常茶飯事だったからだ。

右目は警告音を鳴らしているが、ここはアメリカではないと切り捨てる。

「緑谷くんはこのままだとマズイぞ…?」

「つたりめーだ、無個性のザコだぞー!」

「無個性!」

彼が入試時に何をしたか知らんのか!」

「は?」

飯田と爆豪の会話が聞こえてきて、アクトは興味をそそられ会話の中に入っていった。

「興味深い話をして入るな2人とも？」

出久が無個性だと？」

この雄英高校は偏差値の高さもあるだろうが、クラスメイト各々の個性も全体的に質の良いものばかりだ。

磨けば光る原石たち、これが彼らに今最も相応しい呼び方といえる。

そんな中、出久が出している記録はどれも個性を使っているようには見えないものばかりで、アクトとしても不思議には思っていたのだ。

この程度の記録で入試を突破出来たのかと。

「てめえは眼帯野郎か…。」

あいつの父親は火を吹く個性で、母親は物を引き寄せる個性だ、ありえねえ!!」

「ほう、確かに出久がそのどちらの個性を使用していないところを見ると無個性と疑うのかもしれないが…あの入試を無個性が突破出来るとは思えんな」

「だが、緑谷くんは入試時にあの巨大仮想ヴィランを破壊するほどの強力な個性を持っている、個性を持っているのは違くないぞ？」

飯田は出久が入試時同じ試験演習場にいた麗日を助けるために巨大仮想ヴィランに立ち向かっていき、右腕を負傷するものの破壊していたことを説明した。

「クハハ、俺以外にあのデカブツをガラクタに出来た奴が出久とはな、俄然興味が湧いてきた」

両親の個性のどちらかを引き継ぐ、もしくは両親の個性を併せ持った個性が発現するならともかく、そのどちらでもない、強化系の個性となると隔世遺伝、それとも突然変異なのか。

アクトの出久への興味は尽きない、右目を使つて解析したいと思うくらいに、アクトは出久に興味を持った。

出久がソフトボールを持って第一投目を始めようとするのを、アクトはじつと眺めていた。

すると、出久の右腕が段々赤みを持つていくのが見え、アクトは出

久が個性を発動したこと、

出久は確かに個性を持っているのを右目で確認した。

だが、個性を発動したはずの出久の記録は僅か『46m』という冴えない結果だった。

「…個性の強制キャンセルか、珍しい個性を持っているなああの担任は」
アクトはすぐにその原因^{相澤}を見つめていた。

アクトのいた海外でもそうした個性を持ったヒーローは少なからずいて、制限時間はあるものの発動型の個性と相性の良いこの個性はアクトにとつても天敵だった。

異形型の個性持ちであれば相澤もただの無個性と変わらないだろうが、そのあたりは首に巻いた布で対策済みだろう、アクトはそう分析する。

「…まあ、2年前ならともかく、今なら既に無効化対策も出来ている、問題はなにか」

遠くでは相澤が出久に何か伝えている、おそらくは出久への助言か除籍勧告か、そのどちらかだろう。

相澤のことを『抹消ヒーローレイザー・ヘッド』の話で盛り上がっていたが、ふとアクトはある視線に気付く。

ちらりと視線を感じた方向に目をやると、そこには画風の違う、アルカイツクスマイルを浮かべたNo.1ヒーロー、オールマイトがアクトたちの個性把握テストを隠れて覗いていた。

「…何をしているのだあのNo.1ヒーローは？」

隠れる気があるのか隠行のなっていない、ただ壁の影に隠れているだけのオールマイトにアクトは呆れたが、出久の二投目が始まるうとしていたので捨て置いた。

表情は冴えず、考え込みながらブツブツと呟いている出久が何をするのかじつと見つめていたアクトは出久の荒業に思わず笑ってしまった

「クハハハハ!!」

最小限の負傷で最大限の結^{パフォーマンス}果か、面白いな出久は!!」

アクトは見た、出久が個性を発動したのは腕ではなく『指』である

ということ。

ソフトボールは距離を伸ばしていき、爆豪と同等の『705m』と言う記録を叩き出した。

代償に人差し指が赤黒く変色し、涙を浮かべた出久がぎゅつと怪我のした右拳を握り、相澤に向き直った。

「まだ……動けません」

「やっとヒーローらしい記録出したよー」

「指が腫れ上がっているぞ、入試の件といい……おかしな個性だ……」

「スマートじゃないね」

「面白いが……まるで生まれたての子供のようなちぐはぐさのある個性だな」

発動型の個性持ちは個性が発現する4歳児からその個性を使いこなす為に感覚的にコントロールしていくことが多い。

出久と同じく発動型の個性持ちであるアクトも個性が発現してから個性のコントロールと研究を欠かさず行い、今では繊細な制御も可能としていた。

出久の個性はアクトの言ったとおりまるで生まれたての子供同様、個性に振り回された結果のように見えた。

とはいえ、じっくりと考察する時間はない。

その後もアクトたちのテストは続いていく。

最後の持久走はポニーテールの少女、八百万やおよろずも百との一騎打ちとなった。

彼女の個性『創造』という特殊な個性を持った彼女は自転車を創り出してアクトと対抗するが、一向にバテないアクトに時間も差し迫ってきていたのか、お互い100周で終わった。

出久は持久走開始前に爆豪に迫られたり、ソフトボール投げの際に負傷した痛みが起因してかその他の記録を伸ばせずに終了していた。

トータル最下位が除籍という相澤の言葉に怯えているのか、震えている出久にアクトが声を掛ける。

「心配するな出久、心配する必要はない」

「……え、加減くん？」

「まあ見ているがいい」

そして、最初の試練を全てのクラスメイトが終え、結果はすぐに相澤の持った機械で表示される。

1位は僅差でアクト、2位が八百万、そして最下位は出久。

この瞬間、出久の除籍は決まったと思われた瞬間、相澤は口を開いた。

「——ちなみに、除籍はウソな」

『『『『?!:』』』』』

「——君らの最大限を引き出す、合理的虚偽」

『『『』は———?!:』』』』』

相澤の鼻につく言い方が気に入らなかったアクトだが、差し迫ってアクトに害意のない事なので放っておいた。

相澤は最初の授業を終了すると、出久に保健室利用書を渡して去っていく。

「あんなのウソに決まっているじゃない……ちよつと考えればわかりますわ」

八百万が声を上げていたクラスメイトたちに呆れていたが、アクトはそれでもないと口を挟んだ。

「最下位を除籍するのがウソとは言ったが、それ以外を退学にするとは言っていないからな。」

出久が除籍にならなかったのは、相澤の目に留まったからに過ぎん」

相澤は嘘はついていない、ただ言っていない事があっただけだとアクトは感じ取っていた。

見込みのない生徒は早い内から切り捨てておく。

それが本人の為にもなるし、無謀な夢を見ないで済む。

相澤の隠れた意図を好意的に読めばこの辺りなのだろうが、合理不合理を基準とする彼を思い出して、アクトは深読みをしすぎたと思者を切り捨てた。

「ケロケロ……加減ちゃんはいろいろ考えているのね」

「……蛙吹か」

「梅雨ちゃんと呼んで？」

大きな瞳をした、堂の入った落ち着きを見せた少女は蛙吹梅雨あすいっつゆという。

個性『蛙』、”蛙っぽい”ことは大体可能という異形系に寄った個性を持つ少女だ。

今回のテストでは順位を14位と中間より下の位置に座してはいるが、アクトとしてはその年に見合わない落ち着いた態度の彼女に一目置いていた。

「即時即断即決が求められる現場だろうが、ここでは熟慮する時間が多くある、やはり日本は平和だな…」

「加減ちゃんのいたアメリカは治安が悪かったのかしら？」

現在では半鎖国状態であるアメリカの内情はほとんど入ってきていないからか、彼女の好奇心かアクトに尋ねた。

「そうだな、治安はいい方だが日本と比べると悪い。」

凶悪犯罪を起こすヴィランの数は日本と比べるとアメリカは多いからな。

あす：梅雨ちゃんもアメリカに行く時は気を付けろ、俺は旅行先にはお勧めしないな。

「そもそも入国できんだろうが」

「行く気はないわ、興味があっただけよ」

こうして、益体のない話をしながら、アクトは着替えに向かうため巧者へと向かっていく。

下校の途中、何故か耳郎が当たり前のように送迎の車に乗ってきたのが不思議だったが、アクトの入学1日目が終わった。

第04話 戦闘訓練《上》

入学2日目、午前中は必須科目の英語等の普通の授業を行っていた。

教えるのはもちろんヒーローだが、基礎科目を受け持っているヒーローは大学で教師の資格を取っているので問題はない。

至って普通の授業だ。

アクトとしては試験の説明をしていたプレゼント・マイクの授業が普通の枠に収まっていたので暇つぶしに滑舌が特徴的で、本場に行っても通用しないと指摘し弄っていた。

午前の授業を終えると昼食、在学生が大勢いることもあって食堂はかなりの広さを持っている。

食堂の主はアメリカのヒーロー界ではお目に掛かれなかったヒーロー、クックヒーロー『ランチラッシュ』がいた。

和洋中何でも料理でき、作業スピードも速く、生徒たちの胃袋を支えている、卒業後もこの食堂に通うヒーローがいるという噂もある。

そして午後最初の授業、ヒーロー基礎学。

クラスメイト達が昼食を終えて待ちきれなくなってソワソワしている中、彼は現れた。

「わーたーしーがー!!」

普通にドアから来た!!!」

『H A H A H A H A』とどこか特徴的な笑い方をしながらNo. 1ヒーロー、オールマイトがやってきた。

彼は技名にもアメリカ要素をよく取り入れているので、笑い方もそれに因んでいるのかとアクトは考えているのだが、今時のアメリカでこんな笑い方をしているアメリカ人は滅多にいないことをそれとなく伝えると、一瞬固まってしまった。

クラスメイト達はそんなオールマイトを暖かく、興奮しながらも迎える。

ヒーロー基礎学、ヒーローの素地を作る為、様々な訓練を行う科目で、単位数も学年時で最も多い。

初日の授業は——戦闘訓練。

基礎訓練も無しにいきなりの戦闘訓練に首を傾げたクラスメイトが幾人いたが、オールマイトからすれば、その基礎を知る為の実戦だそうだ。

アクトのいたアメリカでもこうした実践的な授業が多く——名目は護身だが——留学中は良くやっていた頃のことを思い出した。そして、訓練に伴い、入学前に合格者たちが雄英高校に送った『個性届』と『要望』に沿ってあつらえた『戦闘服』^{コスチューム}が教室の壁が分かれる。

雄英高校は被服控除の制度があり、先の二つを送ることで学校専属のサポート会社がコスチュームを用意してくれるシステムだ。

特に要望を添付——具他の内容を細かく記載することも含め——すれば、それに沿った便利で最新鋭のコスチュームが手に入る。

アクトは既に自分用のコスチュームを持っている為、個性届だけ提出していた。

コスチュームも雄英高校には預けていない、日本とは違い、アメリカの最新鋭技術を多分に含んだアクトのコスチュームは技術の塊、情報漏洩の危険性もあり、一時的にも提出する訳にはいかなかった。

オールマイトはクラスメイト達にコスチュームに着替え、グラウンドβへ来るように伝えた。

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!!」

自覚するのだ!!!

今日から自分は——ヒーローなんだと!!」

クラスメイトの誰もが待っていた授業が始まった。

クラスメイト達がコスチュームを着てグラウンドβでお互いのコスチュームの感想を言い合っていて、その中にはアクトの姿もあった。

「ほう、響香のコスチュームは然程普段着と変わらない格好だな。

だが、自分の個性の補助になる武装もされている…まあ、デザイン重視な面が強く防御に弱そうなのが懸念事項だな。

「電気も同じだ、お前たちももう少し考えろ」

耳郎と上鳴のコスチュームは細かい要望を記載して作られただろう印象を受けたものだったが、いかんせんデザインに固執するあまり防御面においての配慮が欠けているように見え、アクトはそれを指摘した。

2人も今更になつて気付いたのか、気まづげな表情を浮かべたがもう遅い。

「アクトのだってそうじゃん、ソフトハットにマントに外套…で捲つてみたら下はスーツ、んで手袋だし。

「ウチらと似たようなもんじゃないの？」

「何か一昔前の映画に出て来てたヴィランの親玉みたいな格好だな!!

俺らとはまた違ったオシヤレじゃねえか!!」

上鳴の言つたとおり、アクトのコスチュームは一昔前の映画に登場していたヴィランが着ている様な格好だった。

黒を基調としたソフトハット・マント・外套・スーツ・手袋・ブーツに至るまで全てが黒。

他の色といえば靴下やシャツの白とネクタイの赤位だ、比率にして黒9、赤0.5、白0.5という圧倒的黒。

上鳴の言っていたヴィランの親玉というのは、おそらくはマフィアの首領のことを指していたのだろう。

「クハハハ!!」

確かにオシヤレはしているぞ、ヒーローにとって印象というのは大事だからな!

だが、俺のマントと外套は防刃・衝撃・防火・防水・対電に対応しているし、下のスーツ一式も同様だ。

ソフトハットもいざとなれば変形して防刃・ガスマスクにも変わる。

他にもギミックはあるが…まあ、これ以上は伏せておこうか、開け

てみてのお楽しみだな。

まあ俺が言いたいことはだな…オシヤレをするのなら万全でいて、且つ優雅に見せてみるのだな!!」

と、バサリマントをたなびかせるアクトに、耳郎は若干だが残念なものを見る目で見ただのに本人は気付かずになっていた。

「ヴィランの親玉っていうのには否定しないんだ…」

「単純に被っただけだ、他意は無い。

…あれは、出久か?」

全身をジャンプスーツに身を包んで遅れてやってきたのは出久だった。

オールマイトをリスペクトしているのか、特徴的なマスクをしたのが出久と気付いたのはアクトと麗日だった。

「あ、デクくん!」

かっこいいね、地に足ついた感じ!」

「デク…?」

ああ、そのまま字を読んだのか、蔑称にも聞こえるのだが、いいのか?」

「い、いいんだ、ぼ、僕…頑張れって感じの、デクだから…」

「…ほう、ならば頑張るといい。

色んな意味で、応援しているぞ、デク」

アクトはデクがちらちらと麗日の方を気にしながら小声で伝えてきていた様子を見て、大体の事情を察した。

それに乗じてだが、アクトも出久のことをデクと今後呼ぶことにしたのだ。

ことさら変な動きをして恥ずかしがるデクと、察し切れていない麗日の2人を見てアクトは邪魔をすまいと離れていく。

「いいじゃないか皆、カッコイイぜ!!」

全員揃ったところで、オールマイトが声を上げた。

シルバーエイジ時代のコスチュームをした彼に興奮しているデクを見たアクトだが、戦闘訓練の内容を聞くため集中していた。

「先生!」

『ヴィラン』は制限時間まで『核兵器』を守るか、『ヒーロー』を捕まえること

そして、コンビ及び対戦相手は…『くじ』で決める!!」

カンペを読むオールマイトに一部の生徒が反応しているが、それ以上にコンビや対戦相手をくじで決めるといふ適当さに飯田は驚いていると、デクがオールマイトのフォロー——急場でコンビを組むのは当たり前ということ——を入れる事で事なきを得ていた。

アクトは教師に慣れていないオールマイトに特に思うことはなく、くじの結果がどうなるかが気になって眺めるのみだ。

くじの結果、アクトは耳郎と上鳴の3人——G組となる。

このクラスは21人、必然的に一人あぶれてしまう事になるのだが、あえて3人組というハンデ戦をする羽目に遭う相手は不運としか言いようがない。

くじの結果に耳郎はほっと一息を付き、上鳴は『うえーい』と反応に困る喜び方をしていた。

「ほとほと縁がある様だな響香よ?」

「…ほんと、ウチとアクトって縁があるみたいだね」

「ラッキーだな3人組だなおい、勝率が上がったよなこれ!」

「最初の対戦相手は…こいつらだ!!」

オールマイトが組み分けしたくじに両手を突っ込む。

第一試合は——、Aコンビ対Dコンビの対決だ。

Aコンビにはデクと麗日が、Dコンビには爆豪と飯田がいて、初戦から波乱の予感を感じさせた。

オールマイトは爆豪と飯田にヴィランの思考をよく学ぶようにと助言を行う。

度が過ぎれば中断するが、基本は実戦である。

リカバリーガールという頼もしい保健医がいるからこそ、オールマイトも多少の怪我は大丈夫と言った様であった。

アクトにとっての『多少の傷』はアメリカ仕込の瀕死一歩手前である為、アクトとしてもこれが多少の傷とは思っていない。

個性を使った圧倒的な制圧を駆使し、圧倒することにした。

その後、アクトはデクへ声をかける。

「デクよ、あまり怪我はするなよ？」

怪我をするにしても最小限だ、いいな？

ヒーローがそうポンポン怪我をしていては助けられる数がどんどん減っていく、デクの場合は最終的に他のヒーローに救ってもらう羽目になる、それでは本末転倒だ。

分かるな？」

入学1日目の個性把握テストでの『醜態』はヒーローらしからぬ行為と厳しく嗜めたのだ。

「う、うん、わかったよ!!」

ところで加減君の格好つて、アメリカの…」

厳しくもプロと過ごした半年間を思い返し、アクトはいらぬお節介ではあるが、デクにヒーローという存在のあり方を示した。

デクも厳しく言われて心当たりがあるのか、苦々しい頷きだった。

他にも聞きたいことがあったのか、アクトに質問しようとしていたが、麗日の声掛けでその機会は別の機会となるのだった。

「——あれ、加減君あたしには？」

「お茶子にはそうだな…慌てたりせず、着実に進んでおけ、コンビを…デクを信じろ」

「…うん!!」

アクトは2人に声を掛けると、2人と別れた。

その後、初戦で勝ちを拾ったデクたちだったが、結果としては散々な講評を受けた。

デクと爆豪は幼い頃からの想いで独断専行が逸り、麗日は中盤の気の緩みや終盤の乱暴な攻撃が目立ったこと。

今戦のベストは状況設定に最も順応していた飯田であると、八百万はそう分析していた。

4人の問題、改善点を上げ、その説明にクラスメイト達も八百万の解説になるほどと頷いていた。

オールマイトも言うだけ言われてしまっって表情が硬くなっている。

「まあ…正解だよ、くう…!」

この時すでにデクは小型搬送用ロボ——ハンソーロボ——に保健室へと連れられてこの講評を聞くのは後になるのだが、この講評を聞いて表情の険しかった爆豪の表情が更に硬くなったのに気付いたのは極僅か——オールマイトとアクトの2人だけだった。

爆豪の攻撃がビルを半壊させたことにより、次の場所は別のビルとなった。

「次の対戦は…この組だ!!」

オールマイトがくじを引き、ヴィランチームの組が呼ばれた。

「G組：俺たちの番だな!!」

「相手は…轟と障子のB組だね」

「…俺たちはヴィラン側、つまりは防衛戦だな。」

響香、電気よ、早めに現地入りしてビルの構造を把握するぞ、ついで来い」

アクトは2人を早目に連れていくと、ヒーロー組のB組より早く現地入りして1階から屋上まで隅々まで確認していった。

「アクト…何かいい作戦考えついた?」

「俺が防衛、響香と電気が攻撃だな。」

相手を見たところ、今のお前たちでは轟の相手は出来ないだろうから、障子を2人がかりで狙え。

幸い、階段は二手に分かれている。

障子の体格からして、轟と比較にならないほど足音に差があるだろう。

響香は障子の足音が階段のどちらから来るか確認次第奇襲しろ。

電気、奇襲の第一撃目はお前だ、余力を残せる程度に放電して障子の動きを止めて、耳郎はその後から追撃を仕掛ける。

轟が先に来たら通してもいい、隠れて見過ごせ。

お前たちは障子に奇襲を成功させることに集中しろ。

ちなみに、奇襲が無理だと思つたら二人同時ではなく、間隔を若干空けて襲い掛かれ。

同時攻撃より間隔を空けた方が、対処する際に若干の遅れもあるかな。

障子の反射速度は反復横とびを見ていてある程度把握している：お前たち2人ならまあ何とかなるだろう。

無理なら俺が轟を倒すまで持ち堪えろ、制圧次第ゆっくりと俺のいる階へ誘導して3人がかりで制圧だ」

「…うわ、なんかすげえ手慣れている感のある作戦だなおい。

けど…アクトは1人で大丈夫なのか？

轟って、八百万と同じ推薦入学者の1人だろ？」

「心配はいらん、俺に手傷を負わせられる相手など世界にそうはいないからな!!

それより、試合開始までは俺の近くに居ろ、開始直後の奇襲対策だ」
「アクト、障子について何か対策しておくことある？」

「そうだな、どの異形型でもそうだが、彼らは大概体格もよくパワーもとんでもない。

握力540キロから来る一撃は受けたら間違いないとお前たち2人の体格だと致命的になる、絶対に避ける。

ヒット&アウェイだ、分かるな？」

「了解」

「おうー」

上鳴がアクト1人を残すことに気が引けているが、アクトは傲慢ともとれる発言で会話を打ち切った。

耳郎が声を上げなかったのは、入試時のアクトの実力を知っていたからだ。

あの常識外れの個性ならば、轟の個性も難なく圧倒出来ると確信していた。

そして試合開始のベルが鳴る。

アクトはいつも通り、どこから攻撃が来てもいいように個性を発動する。

「——ゼロフィールド、展開」

アクトの個性開始と同時に、ベルが凍る。

第2試合の火蓋は、今切られた。

第05話 戦闘訓練《下》

轟は訓練開始と同時に障子を後ろに下がらせ、ビル全体を凍結させた。

仲間を巻き込まず、核にもダメージを与えず、動かすことを封じ、そしてヴィランも弱体化する。

そして、核とヴィラン組3人をその場に固定させ、訓練は拘束代りのテープを貼って終了——という形で終わるはずだった。

「…む、轟、足音が聞こえてくる…2人だな、このビルは階段が2か所から上がり降りできるから、どちらかが1対2になる。

どうする？」

障子目蔵の個性は複製腕。

触手の先端に自身の体を複製することが出来る。

これを使って彼は周囲の状況をかなりの精度で把握していた。

「…どついうことだ？」

こんだけの威力だ、足が凍って動けなくなるのが普通だ。

動けたとしても…足の皮剥がれて満足に戦えねえはずだ」

G組の3人は轟の予想を大きく外れて動いていた。

障子に再度確認を取るが、走っている2人の歩調は引き摺るような様子もなく、片側の階段で待ち伏せしているようだと返ってくる。

最後の1人は最上階で防衛を担当しているのか、一步も動かずに佇んでいると追加の情報が返ってきて、轟は障子に2人の足止めを頼むと、階段を駆けていく。

「と、轟!!」

独断専行はさつき講評で…!？」

障子の呼び止めも聞かず、轟は周囲を見渡し駆けていった。

ビルは確かに凍っている、それは間違いない。

ビルは外から見て5F、上の階へ行くには二つの階段があり、その一方に2人待ち伏せをしている可能性がある。

たったこれだけの情報しかもっていないというのに、轟は動こうとしていた。

モニタールームにいるオールマイトは眉間をぐつと寄せ、ペンを動かしている。

どう評価したのかは、傍から見ているクラスメイトから見ても一目瞭然だった。

そんなことも露知らず、轟は階段を駆け上がっていく。

3階まで駆け上がるが待ち伏せの2人はおらず、轟は敵対するのは1人だけだと気付くが、誰が相手なのかはなんとなくだが察していた。

——加減アクト、入試試験を圧倒的速度で蹂躪し、個性把握テストでは圧倒的有利だった八百万を僅差だが超えた英才だ。

——否、英才では収まらない才気に、轟はどこか彼との戦いが厳しいものになると感じていた。

彼の個性は増強系の一種の加速に属している、いわば高速での近接戦に特化した戦闘スタイルだ。

故に、轟の対策はアクトを如何に近付けずに拘束するかにかかっていた。

相性で考えてみれば、轟の方が遠距離から攻撃できるから有利だ。遠距離から攻撃しながら拘束の機会を窺い、接近してきても氷壁を展開して防げばいいと考えていた。

そして、最上階の5Fへ到達した時、ようやく轟はお目当ての核を見つけた。

核は確かに凍り付いており、動かすことは至難の業だ、ヴィラン側の勝利条件が難しくなったことを意味していた。

だが、その手前——轟はありえないものを見るような目でそれを見た。

「加減…それはいったいなんだ？」

轟の前に現れたアクトは特に何かをしている様子もない、ただ立っているだけに轟には見えた。

しかし、アクトの周りには異常が起きていた。

アクトを中心にして、半径2メートルの円が出来ており、その内部には周囲のような凍結は起こっておらず、必然アクトの足は轟の個性

は届いていなかったのである。

「クハハハ!!」

轟よ、今は実践試合の最中だ、お前はヒーロー側、そして俺はヴィラン側だぞ？

——答える訳がないだろう、お前の氷を無効化した謎はこの試合が終わるまでに解き、そして乗り越えてみる。

もつとも、謎を解いたとして、乗り越えられるはずもないがな!!」

「…後悔するなよー」

傲慢にも聞こえるアクトの挑発は轟の癩に障ったのか、右足から放たれる氷の第二撃がアクトを襲う。

無防備にも、アクトは懐から取り出したタバコを暢気に吸い始めた。

喫煙の年齢制限は現在では15歳まで引き下げられていて、アクトは喫煙可能な年齢に達している。

だが、戦闘中にも拘らず、こうしてタバコを吸っているのは、攻撃をしている轟でも分かった。

アクトは轟に『お前程度タバコを吸っていても楽勝だ』と暗に挑発しているのである。

「…ああ、タバコに見えるかもしれないが、これは違うからな？」

アメリカにいた友人の1人が持っていた創造系個性、ステイスマン薬物生成から作った『無害なタバコ』だ。

ちなみに、味はサイダー味だな」

「聞いてねえ!!」

『か、加減くうん!』

無害なタバコ、ちゃんと税関通っているかい!?

それに、学校にも届けているのかな!?

危ないクスリじゃないよね!』

オールマイトがモニタールームから慌てた声でアクトに声をかけたが、アクトは上機嫌で答えた。

「無論だともオールマイト、税関にも血液検査も全て空港で済ませて異常なしと判断されているし、根津校長や誰もかもがこの精神安定剤

を絶賛していたぞ？

量が限られるから俺も節約して吸っている。

オールマイトも吸ってみるか？

特別に1箱プレゼントだ、決して賄賂ではないから評価は普通にしてくれていい。

無論俺の評価は賄賂など送らんでも最高だろうがな!!」

『え？』

ちよ、いま君精神安定剤って!？」

「おおおおおおおっ!!」

轟は先程の倍の氷をアクトに叩きつけるが、あの円の中を突破する事は出来ない。

一瞬、自分の左腕を見て『もう一つの個性』を使用しようと考えたが、即座に否定する。

自らの誓い——左の個性を使わずNo. 1ヒーローにすることで父に復讐する、という目的を入学して2日目で投げ捨てることは出来ない。

そんな思いを知らず、アクトは涼しい顔をして轟の攻撃を無効化、あるいは防いでいた。

アクトの個性が自分が、おそらくは誰もが予測していなかった個性でなかったことに驚きもあるが、それでも轟に敗北することは出来ない。

「…なんだ、まだ謎解きも終えず、無駄に個性を使用していたのか？

そろそろ終わらせるぞ轟よ、お前はやる方だと思っていたが、これ以上は無駄だ。

お前を制圧した後、響香たちの支援に行かなければならん」

「てめえっ!!」

轟が声を震わせながら、全力で部屋を覆いつくさんと氷をぶつけるが、その先にアクトはいなかった。

「…まったく、もう一つの個性も使っていれば謎解きのヒントになっただろうに、馬鹿な奴だ」

「うしっ——ガハッ!？」

突然轟の背後に現れたアクトに隙を突かれた轟は不意の一撃を受けて倒れてしまう。

致命的な一撃ではないが、手刀の一撃は見事に轟の意識を刈り取った。

『ヒーロー轟、戦闘不能!!』

オールマイトの宣言がビル内に響き渡る、アクトは懐からテープを倒れた轟にぺたりと貼り付けた。

強力な個性ではあるが攻撃が大味だったこと、実力の内半分を使つてこなかったこと、認識不足——どれもアクトを圧倒するには足りなかっただけの話であるとアクトは吸い終えたタバコをポケット灰皿にきちんと捨てる。

「さて、轟も倒したことだし、響香たちの援護に行くとするか。

状況を聞ければいいが…響香、電気、状況を教えろ。

放送を聴いたとは思うが、轟は倒したから人質として——」

『ヒーロー障子戦闘不能!!』

ヴィランチームWIN!!』

再度オールマイトの宣言が放送されて、アクトは2人が障子を倒したのだと気付き、随分と早い決着だと思った。

『…あー、アクト?』

何とかこつちも勝てたよ!!』

『うえーい、うえい!!』

耳郎と上鳴の声に2人とも無事だったのかと声を掛けたいアクトだったが、その前に一つ、耳郎に聞くことがあった。

「…響香よ、何やら電気がうえいうえい言っているのだが、心当たりはあるか?」

『あー、奇襲に失敗して埒が明かないから、上鳴の奴を人間スタンガンにして…』

2対1という不利な状況から、防戦して轟の来援を待っていた障子に痺れを切らして、耳郎が上鳴を文字通りの人間スタンガンにして障子に投げ付けたらしい。

放電しながら急接近したこともあり、障子もとっさの判断に迷って

いる内に上鳴と接触、最大出力で放電された彼はあえなく戦闘不能にされたのだった。

その代償に、個性の過剰使用で脳に負担がかかった上鳴は『うえい
うえい』としばらくの間著しくアホになっているらしい。

「…まあ、いいとしよう。」

とつきの機転はさすがだな、後で電気も労ってやるといい」

『さあ、講評の時間だ、モニタールームに全員集合だぞ!!』

オールマイトの放送でアクトは耳郎と上鳴と障子を連れてくるように伝えて、轟を担いだ。

第2試合、圧倒的有利だった轟たちチームを下した加減たちはモニタールームへ凱旋するのだった。

「——今戦のベストは加減少年だ!!」

わかる人!!?」

オールマイトの声に、クラスメイトたちが口々にアクトの活躍した点を上げていく。

「作戦がすごかった!!」

「いや、それいうならその前の地形の把握とかじゃない?」

「轟の初撃を予測して防いだのもすごかった」

逸早く周囲の状況の把握、分析した情報を元に勝率の高い作戦を立案する能力、対象を素早く無効化した制圧力、無効化した対象を人質にするという設定にも順応した対応力。

圧倒的な個性を見せつけながらも、絶賛されるアクトはさも当然とばかりに腕を組んでいた。

「う、うむ、どれも正解だ!!」

さすがは加減少年だな!!

アメリカで最年少サイドキックとして活躍していただけある!!

お父上譲りの迅速な対処は素晴らしい!!」

「「「えーーーーー!?!?!?!」」」

「オールマイト、あまり俺の血生臭い経歴を暴露しない方がいい。今のこいつらには刺激が強すぎる」

驚愕の事実の声を上げたクラスメイトたちに反して、当の本人は冷めた目でオールマイトを軽く睨み付けた。

別段隠していた訳ではない、聞かれたら答えられる範囲で答える気であったアクトであったが、こうした場で暴露されたら嫌でも注目の度合いは高まってしまいうだろう。

特に血生臭い経歴——アメリカでの濃い半年間は平和な日本とは比べられないほどに殺伐とした思い出ばかりだった。

「つていうかき、加減の個性って自己強化系の加速とかじゃなかったのか？」

轟の個性を防いだ個性とは相性悪いし、そもそも防げねえと思うんだけど？」

「なんていうか、見えない丸い壁みたいな感じだったよね？」

「加減の個性って実際どんなのなんだ？」

「俺の個性は『加減速自在』ラディカルモデラータという。」

物理法則における『加速・減速』を意のままに操る能力でな、轟の個性を防いだのは俺のもう一つの個性、減速による停止結界：ゼロフィールドという。

自己強化系の個性ではない。

ちなみに、ゼロフィールドの突破方法は単純に力押しだ。

オールマイトほどの超パワーであれば突破出来るだろう。

まあ、易々と突破させる気はないがな!!」

基本秘密主義に徹しているアクトであるが、アメリカでサイドキックをしていた頃にある程度の情報は知られてしまっている為、情報の開示についてある一定までは比較的寛容だった。

轟の個性を防いだ減速によるゼロフィールド、運動エネルギー熱エネルギー、その他諸々のエネルギーをどんな形であれゼロ——停止させる。

摂氏10000度であろうと、マイナス1000度だろうとゼロフィールドに触れば0、つまり停止してしまうまで減速させる強力

な防御手段となる。

異形型、発動型、そしてオールマイトもおそらく属している強化型の個性もよほど強力な、それこそオールマイト級の超パワーの個性の持ち主でなければ、停止限界を突破する前に停止してしまうだろう。

「…才能マンだ、才能マン」

ようやく電気がまともに口を利けるようになったのか、アクトの個性を知ってうわ言の様に呟いていた。

「相手への攻撃に加速系の個性、防御に減速系の個性…という事ですか？」

応用の幅がありますね」

「なんか轟君と似たような…個性の発現っぷりだね？」

クラスメイト達の声に、アクトは特に気にした様子もなくその疑問に答えた。

「それはそうだろう、何せ俺の個性はその轟の親のした方法をそっくり真似てそういう風に望まれて生まれてきたからな。

当時の週刊誌だと轟の所より酷くバッシングされていたぞ」

アクトの両親は轟の父——No. 2エンデヴァーがしたとされていた個性婚をして、意図的にアクトが轟の様な個性のデメリットを補い合う個性を持つ子供を望んでいたと週刊誌に報じられていた。

加えてアクトの両親はこの個性婚は契約婚として、アクトのような子供を何人も生もうと何やら非合法的な技術にも手を出していたと噂されていた。

既にこの2人は他界していて真実は闇の中だが、アクトとしては死んだ人間にあれこれ思うところは特にない。

「まあ、個性なんて所詮は身体機能の一部でしかない。

使おうが使うまいが当人の自由だ、ヒーローをする以上使える手段はいくらあってもいいがな」

轟がアクトを凄まじい目で睨んでいるのに気付いていながら、あえてその話題を振ったアクトは素知らぬ顔で流していた。

そして順々に試合が流れていく。

それぞれの個性を自分なりに工夫している戦いが見れてアクトと

しても最終的に満足のいく結果となった。

それと同時に、現状アクトに匹敵する戦闘力を持つている者がいない事も浮き彫りとなる結果にも繋がったのだが、それも仕方がないといえた。

片や両親が死んで以降アメリカで自己研鑽と個性研究に情熱を傾け、アメリカ最年少でサイドキックフックとなったアクトと、ぬくぬくと平和な日本のぬるま湯に浸かってきたクラスメイトたちでは生まれや辿った軌跡、覚悟が違った。

何より、誰よりも自分の立ち位置を自覚しスタートしたアクトと彼らでは既にかんりの開きが出来ている。

実力差などあって当然といえた。

「お疲れさん!!」

緑谷少年以外は大きな怪我もなし!

しかし真摯に取り組んだ!!

初めての訓練にしちやみんな上出来だったぜ!

1日目の相澤の後の授業とあって全うに感じられたクラスメイトたちは拍子抜けしていたが、真つ当な授業を行うのも教師の自由とのたまうオールマイトはデクに講評を聞かせるために超パワーを駆使して走り去っていく。

オールマイトはちらりとある少年に目を向けていた。

爆豪勝己、初戦で見せた自尊心の塊の彼は授業終了までただ黙ったままであった。

膨れ切った心ほど脆いもの、オールマイトは教師として機会を作り、彼としつかりとしたカウンセリングをせねばと奮起する。

加減アクト、アメリカどころか世界で知らぬ者はいないといわれるほどの新進気鋭のヒーロー。

噂される残虐な姿勢など見られず、真摯に、誠実で、だが傲慢さも見える発言がありながらも根っこは善良だと思いつながら、この場から早く去るのだった。

まるで、何かに気付かれては拙いといわんばかりの走りっぷりにアクトはいぶかしんだが、さほど興味を抱かず着替えるため更衣室へと

向かっていく。

「なあ加減!!」

学校終わったら飯行かね?

何好きなんだ?」

「俺あ切島鋭児郎、今みんな飯先で訓練の反省会しようって話してたんだ!」

「私芦戸三奈、凄かったね試合!!」

「騒々しい……」

「ほう、向上心があつていいことだな。

……今日は特に予定はない、よければ一緒に行くとしようか。

響香、一緒に行くか?」

「ウチも行こうかな、反省会したかったし」

次第に放課後ファミレスで訓練の反省会をするメンバーが決まっていくな、爆豪に轟は更衣室へと向かっていく。

「爆豪に轟、お前たちもよければ来るか?」

楽しいかはともかく、有意義に時間を過ごすならこういう機会も必要だぞ?」

多角的な視点はヒーローには必要だからな」

「……いや、俺はいい」

「……………」

遠慮がちに轟は行かないと答え、爆豪も無言でアクトの呼びかけにも答えず行ってしまった。

余程堪えたのか、アクトとしては知る由もないが、彼等にも考える必要があると思ひ、それ以上誘いはしなかった。

そして放課後になり、デクが保健室から帰ってきたところで切島たちが放課後の反省会に誘ったが、デクは爆豪に用があつたのか追いかけていった。

関係が良好でない2人でもやはり幼馴染ということなのか、爆豪を追いかけたデクに興味を抱きながらも、アクトは執事の雷銅に電話を掛けた。

『はい、どうされましたアクトさん?』

アクトのスマホから落ち着いた青年の声が聞こえてきた。
「雷銅か？」

今日はクラスメイトと夕食をするから迎えはそこに来てくれ」

『畏まりました、お気をつけて行ってらっしゃいませ』

短い間ではあったが、すぐに電話が終わると切島が不思議そうにアクトへ声をかける。

「なあ加減、雷銅さんって？」

「俺の家の執事だ」

「「しっじいっ!」」

アクトの発言に驚くクラスメイトたちをよそに、アクトは耳郎と共に教室を出て行く。

遠くからオールマイトがどこかへ猛スピードで駆けていくのを見たが、それを呼び止める者はいなかった。

アクトたちは反省会に使うファミレスに耳郎、上鳴、切島、常闇、飯田、遅れてやってきた麗日とデクの8人で来ていた。

雄英高校から少し離れた立地的にも安心感が持てるのか、店内は客で込み合っていて30分ほど待たされて、ようやくアクトたちに番がやってくる。

アクトは約10年ぶりのファミレスへと来て、物珍しそうに店内を見回していた。

両親が存命の頃は滅多に外出を許されなかったアクトにとって、ファミレスというのは新鮮に映ったものだ。

「…帰国して初めて来たなこうした店は」

「やっぱり金持ちになるとこういう店にはこねーのか？」

上鳴は嫌味ではなく興味本位で聞いてきたのだが、アクトも気にせず答えた。

「ああ、アメリカでもこうした大衆向けの店ではなくコース料理が出ている店ばかり行っていたな。」

もつとも、俺の場合会食という形の食事ばかりで食べた気はしなかった」

サイドキック時代から最年少プロと接触を持つとする業界人が多く、アクトは時間が合えば事務所の勧めでそうした企業人たちと会食をしていた。

中には自分の娘まで連れてきて婚姻を仄めかす食わせ者もいて、アクトとしてはそうしたやからを振り切るのにも神経を使っていたのを思い出したのだった。

とはいっても、それは最初の時期だけで、1ヶ月もすると接触しようとする業界人も激減したものだ、それをアクトは口にしなかった。

「やっぱプロは違えなあ。

なあ、ヒーロー名聞いてもいいか？

もしかしたら知ってるかもしれないねえし」

「まあやめておけ、食事中に俺のヒーロー名や評判を聞いたらヒヨっ子のお前たちでは食事も通らなくなるだろうからな。

俺のことよりも、まずは今回の実戦試合の反省会だ。

俺の意見から言わせてもらうと——」

アクトはモニタールームで見た反省会参加者たちの良かったところ悪かったところ改善すべきところを、次々と上げていく。

「…まあ、全体的に見てお前たちに足りないのは体力だな、基礎がまだまだ固まっていない。

個性の使い方はやはり長年付き合ってきているとあつて目を見張るものもあるが、個性以外の…基礎体力や格闘技術、状況判断の仕方がまだまだ圧倒的に不足している。

…まあ、デクは少々例外だがな、お前は基礎もそうだが個性の使い方になっていない、自爆するその個性をどれほど理解しているかは知らないが、早急に使い方を見詰め直すのだな」

総括して全員には体力が足りないと言い切り、デクにもきつめの指摘を付け加えた。

「格闘かあ、あんましして来てないから、どこか部活動でもやってみよ

うかな?」

「体力は…確かに持久走を八百万君みたいな個性便りと違つて個性と自前の体力であれだけ走っていたからな、確かに必要なんだろう、勉強になるな!!」

「最後に物を言うのは体力という事か…」

耳郎たちも食事を終えない限り口を開きそうにないアクトに釣られるように食事を摂り始める。

「食事も来たことだし、後にしよう」

アクトは無理に話を切り上げ、ウエイトレスが配膳してきた料理を食べ始めた。

アクトとしては食事をしている間、どう言つて彼らの気分をなるべく害さない程度の話に持つて行こうか考えていた為、あまり味を気にすることなく注文していたチキンドリアを食べている。

「ねえ、加減君のヒーロー名つて…『グッドスピード』で合ってる?」

「『グッドスピード!』」

「デクよ、良く気付いたな」

そして食事を終えた面々はアクトが口を開くのを待っていた時、店内に衝撃音が走った。

「えっ、なに!?!」

「いったい…あれはっ?!」

「——お前たち伏せろ!!」

アクトの鋭い声上がり、デク達はすぐに体制を低くして周囲を見回す。

入口周辺の自動ドアがぶち破られていて、その周辺も何かの個性を使ったのか、壁面が抉れていて外部から店内が見て分かるほど破損していた。

「か、金を出せええええええええっ!!」

店内に響き渡るほどの男の声が聞こえてきて、自然とその方向にアクトたちも視線を向ける。

そこには、目の血走しつた短髪の狼男が興奮して暴れていた。

強盗——アクトたちの前にヴィランが現れた。

第06話 狼男退治

——狼男、異形型の個性の中でも戦闘にかなり特化した個性と言えるその特性は多岐に渡る。

鋭く頑丈な爪と牙、闇夜を見渡せる瞳、長距離を走破する体力、純粹な狼と違い、腹部が硬い腹筋で割れていて弱点はすぐには思いつかないほどには、強力である。

そして、アクトも異形型のヴィランとは何度も戦闘を行ってきている。

とりわけ狼男は対処の難しい相手だったが、今回は更に勝手が違った。

「くそつ、くそつ、クスリい、クスリがあつ!!」

早く金集めて買わねえとクスリが来ちまう!!

12時までには揃えないと俺の俺のクスリがあつ!?

…あああああつ、クソ、黙れ、うつとうしい!!

ムシが…ムシがうるせええんだよ!!」

支離滅裂な発言に瞳孔の開き切った状態、全身の震え。

他にも見所は多々あるが、これだけ条件が少なくとも、答えはすぐに見つかった。

「…ドラッグ漬けのヴィランだな。

面倒な相手だ、ただでさえ強力な個性なのに、何時暴発するか分からん…いや、既に暴発していたか」

愚痴るアクトだが、その表情には余裕が多分にあった。

同じく身を低くしていたデク達は若干高揚気味でこれからどうすればいいのか悩んでいたが、アクトの余裕な表情を見て段々と落ち着いていく。

こつそりとレジ付近を飯田が見てみると、狼男が店員を脅してレジの中の売り上げと金庫をよこせと怒鳴りつけているのを見て歯噛みする。

——個性の無断使用は原則法律違反、この場で狼男を取り押さえるとなると今の實力では間違いなく個性を使用してしまう事になる

と分かっていたからだ。

「くっ、付近のヒーローが来るまで、ただ見ている事しかできないのか…!!」

「となると、ファミレスに居る客を何とかして逃がすしかないけど、どうすれば…」

「けど、見つかったら…」

「ど、どうしよう、パトロール中のヒーローがいつ来るのか分からないし…」

今できる事を探したり、不安を口にするクラスメイト達を見て、アクトは考えが纏まったのか、口を開いた。

「——まったく、揃いも揃って不甲斐無い。」

まだ数日足らずだが、お前たちはそれでも雄英生か?」

とはいえ、口を開いて早々罵倒されたのに目を点にしたクラスメイト達は小声ではあるが憤った。

「じゃあどうするんだ!!」

入口には狼男のヴィランが居て、ファミレスには多くの人質候補がたくさんいる!!

しかも入口を塞がれた上、店員が目の前で怒鳴り散らされているのをいっただいどうしろと!?!」

「アクト、大丈夫なの?」

分かっているとは思うけど、個性は使えないんだよ?」

「当然、知っている。」

ヒーローを志すのなら、ありとあらゆる手段を以てしてヴィランを殲滅する。

個性が使えない、或いは使わないのであれば、個性を使わずしてヴィランを行動不能にする、それしかあるまい」

そういうと、アクトはテーブルから備え付けの箸、ナイフやフォーク、それにタバスコソースと塩、一味唐辛子にゴマを混ぜ合わせたりと、戦闘準備を始めた。

手持ちのコスチュームは使用することはできないし、未だ隠している個性を使う気もない。

この場でアクトはクラスメイト達に示そうとしていた。

アクトの——ノンストップヒーロー、グッドスピードの実力を。ヴィランにとっての大敵、死神、虐殺者。

畏怖を以てして、彼のヒーロー名をこう揶揄する者もいた。

虐殺系ヒーロー、マッドスピードと。

狼男のヴィラン、本名大上一狼27歳。

高校中退後、ドラッグの売人をしながら過ごしていた彼の人生は墮落していた。

上納金を集める為に個性を使って強引に売り捌く、強面な異形型の個性である彼にとって、金銭集めは比較的楽な物だった。

楽だったが故に、彼は売り物であるドラッグに手を出した。

自らを否定した社会から逃避するのにドラッグへと走ったのは需要と供給が一致した結果である。

ドラッグを使った者がどういう末路に至ったのか、売り捌いていた自身が知っていないながらも使ったことは愚かの極みでしかない。

そしてドラッグの使い込みがバレてしまつてからは、墮落から転落へと悪化した。

大本であるヴィジランテ——昔でいうところのヤクザ——が大上へペナルティとして上納金の10倍の金額を集めろという指示が下つたのである。

期限も僅かで、いくら大上が上客にドラッグを売り捌いても目標額まで届かない。

至らないが故に、薬漬けの頭是最悪の手段を取ることに戸惑いがなかつた。

真昼間からの強盗、しかも覆面をして客の少ない時間を狙うといった考えに至らないあたり、彼の状況は破滅的だった。

そしてその終局に、彼は出会ってしまった。

禍々しい二つ名を多く持つ、ヴィランの天敵に。

「…ああ？」

薬漬けの頭でも、大上の認識におかしなところはなかった。

大上の膂力を以てすれば紙の様に引き裂けるほどの小柄で細身の体軀、しかもプロテクターといった防御的な要素を一切身に纏っていない眼帯を付けた少年が、大上の前に現れたのである。

「んだあ？」

金でもくれるっていうのか？

ははっ、お礼にヤクやるぜ？」

「——臭い口を開くな、ヴィラン風情が。」

黙っている、殺したくなる」

圧倒的弱者にしか見えない少年は大上を開口一番に罵倒した。

大上が何を言われたのか一瞬固まったのを見逃さず、アクトはベルトの腰に隠していたナイフ3本を片手で投擲する。

「——ぐっ!？」

ああっ、めえっ、俺の目があああ、てめえ…!!

俺のヤクが抜けてっ!？」

顔面目がけて投擲されたナイフを大上は反射的に腕で庇って防ぐが、それは悪手だった。

ナイフは中ほどまで深く刺さり、血が流れ出す。

そして運悪く、大上の目にまでそのナイフは突き刺さってしまった。

狼男の個性を持つ大上にとって、食事用のナイフが自分の腕や目に刺さったという人生初の経験に驚愕と激痛が襲う。

自分の腕でナイフを防ごうとしたが、それでも相手から目を離さないというまともな思考が生きてしまった事が大上にとって1つ目の不幸だった。

2つ目の不幸は、腕と目に刺さったナイフの痛みで身体が硬直してしまった。

しかも、ただの痛みではない。

ナイフにはこれでもかと言わんばかりのマスタードが塗りたくられていて、ナイフが刺さった以上の痛みが走ったのである。

支離滅裂な発言をする大上にアクトは追撃とばかりに接近した。薬漬けではあるが、大上の個性は優秀だった。

片方の視界は塞がれていたが、狼男の個性で嗅覚が通常よりも利いている大上はアクトが急接近している事に気付き、カウンターの蹴りをしようとして咄嗟に膝を低く下ろし、蹴りを放つ。

威力だけを見れば、小柄なアクトの体など小石を蹴飛ばすように吹き飛ばせただろうが、威力はあっても雑な攻撃でしかないそれを喰らうほど、アクトは鈍磨ではなかった。

必要最小限の身のこなしで避け、大上の伸びきった足に乗ると、いつの間にか腰から補充していたナイフを大上の下顎に突き立てるが、頑丈な大上の皮膚には届かない。

「こ、このおっ!!」

大上はもはや自らの腕に刺さったナイフを抜かず、アクトを捕まえようと下顎にあるアクトの腕を掴んだ。

あとは狼男の個性が持つ凶悪無比の腕力でその腕を握りつぶしてしまえばアクトの細腕などぐしやり——と妄想するが、全ては遅きに失した。

アクトは大上の掴んだ腕を視点に、全力でナイフの柄に膝蹴りを叩き込んだ。

——その結果、大上の下顎から口の中にナイフが生えるという悍ましい光景が出来上がる。

「■■■■■■■■■■っ!!」

身も気もよだつ悲鳴が大上から放たれ、これまで以上力強く暴れ回るが、その射程圏内にアクトは既になく、大上の無様な姿を眺めていた。

この惨状を運悪く見てしまった店内の客たちは甲高い悲鳴を上げ、大上の神経を更に興奮させた。

暴れ回る中、大上の焦点がアクトにようやく向けられ、報復の一撃を喰らわせようと腕を振りかぶるが、時すでに遅く、

「先制必縛ウルシ鎖牢!!」

——シンリンカムイ、人気急上昇中の若手実力派ヒーローが大上

に個性を生かした必殺技を繰り出し、拘束した。

意識が完全にアクトに向いていた為、大上は捕えようとする木の枝に簡単に拘束されてしまい、地面に押さえつけられたのだった。

「遅くなつてすまない!!」

「シンリンカムイだ!!」

「助かった!!」

口々にヒーローが来たことで喜びの声が上がるが1人の男性の一声で再度レストラン内が凍りついた。

「シンリンカムイ、まだヴィランの子供がいるんだ、捕まえてくれ!!」
「狼男のヴィランも、その子がしたの、気を付けて!!」

アクトの容赦ない大上への仕打ちに、店内の客たちも震え上がっており、やってきたシンリンカムイへ早く逮捕して欲しいと訴えたのである。

「なんだって?」

…その少年、少し話を…って君って雄英生じゃないか!!」

シンリンカムイは用心しながらアクトへ声をかけるも、アクトの着ている服に見覚えがあった。

数年前まで自分も着ていた制服——雄英高校の制服だったからだ。

シンリンカムイは捕えた狼の状態を確認する。

見るからに重傷でいて特に口蓋を貫いているナイフを見てすぐさま救急車へ応援要請をかけた。

「君、個性を使ってヴィランに敵対するのは法律違反だ!!」

雄英生なら当然知っている事だろう!？」

「お言葉だがヒーローシンリンカムイとやら、俺はこの程度のヴィランに個性など使っていない。」

使っていたら今頃こんな汚れた色持ちなどミンチにしていた所だ」
シンリンカムイの注意に対して吐き捨てるように否定したアクトは隠し持っていたナイフや刺激的な混ぜ合わせの調味料を見せて細かく説明する。

その発想にシンリンカムイは容赦のないアクトの仕打ちにうすら

寒さを感じるが、アクトの視線は既にシンリンカムイにはなく無様にも足掻こうとする大上にあつた。

「そ、そんな馬鹿な…異形系の個性の持ち主に個性を使わず？」

「アメリカにいた頃、個性封じ対策として学んだ戦闘術だ。」

表皮が鉱物のような個性ならともかく、柔らかなのなら対処は容易いことだ。

なんだ、日本のヒーローはこの程度の戦闘術すら会得していないのか？」

アクトが学んだのは中国拳法、柔術、ナイフ術、拘束術など多岐に渡る。

これら数々の技術をミックスし、シビュラシステムが用意した戦闘用ロボットの最高レベル10と互角以上の戦いを繰り広げる程に卓越した戦闘能力を有していた。

シンリンカムイは半鎖国状態のアメリカから来た目の前のアクトを奇異の目で見るが、本人は気にした様子もなく装備していた道具を取り外してテーブルに置いた。

「それで、どうするのだシンリンカムイ？」

拘束するのか、しないのか？

拘束しようものなら徹底的に抵抗してアメリカ大使館に逃げ込んで抗議するのでそのつもりでかかってこい。

しないのならとつとこの場を収めて俺たちを解放しろ」

「シ、シンリンカムイ!!」

ほ、本当なんだ、アクトは個性を使わずにこの狼男のヴィランを倒したんです!!」

「あ、ああ、本当だぜ!!」

加減のやつが個性使ってたらこんなに酷い怪我させずに済んだんだ!!」

高圧的な態度でこの場の主導権を握ったアクトはシンリンカムイに対して居丈高な態度でいる。

アクトのクラスメイト達も、シンリンカムイにアクトが個性を使わずに大上を倒したこと、正当防衛を主張した結果、拘束はしないが参

考人として事情を聴く為、警察署まで同行することで譲歩した。

アクトとしては不満の残る結果ではあったが、クラスメイトからの援護がなければ睨み合いは応援のヒーローたちが来るまでこの押し問答は続いていただろうことは容易に想像できていたアクトは、素直に要求に応じたのだった。

そしてアクトは自らの身分、現状、今回の事件の聴取を担当した警察官に説明し、迎えの雷銅が来るまで必要最低限の証言をして帰って行った。

警察署を出てから軽く周囲を見回すもアクトの迎えは雷銅だけだ、クラスメイト達が駆け寄ってくる気配もない。

おそらくはヒーローたちに解散するように言われたのか、それともアクトがどの警察署に任意同行されたのか分からなかったのか。

期待した訳ではなかった、時間も既に20時を過ぎていて夜も更けている。

あれだけアクトのサイドキック時代を聞きたがっていた面々がやけにあっさりしているなど思う程度の認識だったが、それ以上にアクトは軽い頭痛に襲われていた。

迎えの車の中で、アクトは雷銅に今日の出来事を一切隠さずに伝えた。

「…失態だった、あの程度のヴィラン風情を軽く撫でた程度で任意同行を求められるとは…日本の平和ボケを甘く見ていた。

あの程度、アメリカでは…いや、対策課では始末書も書かないレベルだった筈だ」

「余計な注目を浴びてしまわれたようですねアクトさん、貴方ほどの方が珍しい失態をされたものです。

アメリカと日本の価値観…これが大きく乖離かいりしていたのが原因かと」

雷銅は今回のアクトの失態を冷静に分析して指摘し、アクトも同意した。

平和ボケしているが故に、刺激的な場面を見てしまったが周囲の客たちの精神を大いに揺さぶってしまった、これが大きな要因であると

アクトも自覚している。

良い意味でも悪い意味でも甘く見ていたと舌打ちしたアクトは今回の失態で任務に支障が出ないか思考を巡らせる。

「今日の出来事でどれだけの波紋を呼び込むのか気になるところだが…こればかりは前向きに考えるしかない。」

今回の出来事を呼び水に、対象人物の一派を誘い出してしまえばいいか？」

「釣り針にエサはありますから喰いつきはするでしょうが、お目当ての人物が喰いついてくるか不明な点が懸念されますね」

雷銅はアクトのこうした頭腦的な面を補佐する為にも一役買っており、アメリカ時代にも幾度となく助けられていた。

補佐する人材はもう1人いるが、そちらはまだアメリカでの後始末をしてから合流する予定となっており、雷銅1人で諸々の仕事を任せていた。

「もつともな指摘だな、俺もそこは不安がある。」

…もともと長期戦を見越しての長期派遣任務だ、情報網もまだ発展途上な段階ではこれが妥当な一手だろう。

この一手を補強する為の一手を打って、相手の出方を窺うとしよう」

「何なりとお申し付けください。」

この雷銅、万事を恙無く達成してみせましょう」
「クハハハハッ、期待しているぞ」

数日後、新聞の一面に2つの記事が載っていた。

1つはオールマイトが雄英高校に教師として赴任した事。

2つめはアメリカでヒーロー活動をしていた最年少ヒーロー、グッドスピードが雄英高校に入学した事。

アクトの物語は加速していった。

オールマイトが雄英高校に赴任した記事を見たのは一般人だけで

第07話 異端なるヒーロー

平和の象徴、オールマイトが雄英高校の教師になったことが新聞、ニュース、ネットといった情報媒体を介して日本中で知られるようになってからは連日お祭り騒ぎのように雄英高校に記者やパパラッチ、そしてファンたちが押し寄せてきていた。

記者たちはオールマイトの雄英高校での印象を学校側に許可も取らずにインタビューを行うというマナー違反を侵し、インタビューを受ける生徒たちはそれぞれ真面目に答える者、答えようとして窮する者、一時メデイアで知られた生徒などは足早にインタビューから背を向けたりと様々だ。

だが、記者たちはオールマイト以外にも生徒たちに聞き出したいことがあった。

アメリカどころか世界にも知られているヒーロー、グッドスピード^アについての情報だ。

半鎖国状態のアメリカにおいてその実情を知っているアクトの生の情報を得ようと、間接的に生徒たちからアクトの、アメリカの実情を知ろうとしていたのである。

とはいっても、アクトと直接話したことのない生徒が殆どで、クラスメイト達も昨日の一件以来アクトとまともな会話など出来ていない状況だ。

現場にいなかったクラスメイト達もニュースを視聴して知った者、居合わせた者から聞かされたのか、アクトに声をかける者はいない。クラスメイトの中でも特に交友関係のある耳郎も同声をかければいいか分からずに遠巻きしていた。

「…HR始めるぞ」

朝のHRで担任の相澤の一声で、教室にいたクラスメイト達が一瞬でしんと静かになる。

たった数日で見事に適応している彼らをよそに、HRが始まる。

「昨日のV^{ファイ}と成績見させてもらった」

「……!!」

「爆豪、お前もうガキみてえなマネすんな。

能力あるんだから」

「……わかってる」

相澤から小言を爆豪は若干俯きながら返事をする。

彼にとつても昨日の出来事は乗り越えた気持ちでいたかもしれないが、改めて言われて思うところがあるのか、爆豪は若干遅れて返事をした。

「…で、緑谷はまた腕ブツ壊して一件落着か。

個性の制御…いつまでも『できないから仕方ない』じゃ通さねえぞ」
デクが相澤から威圧感のある注意を受け、アクトも思わず同じ感想を抱いていた。

個性の制御、それさえできてしまえばデクの個性は一気に汎用性のある個性に早変わりする。

最近になって判明した個性であろうと、このクラスに居続ける為には早急に個性の制御が必要となるだろう。

「俺は同じこと言うのが嫌いだ、個性その制れ御さえクリアしてしまえばやれることは多い。

焦れよ緑谷」

「はいっ！」

アクトは初めて相澤がまともな教師らしい助言をしている場面を見て若干だが評価を修正した。

「加減は…さすがの一言だったな、己の力を過信しているような発言はヴィラン役だったからか？」

「いや素だが？」

アクトとしては過信している訳ではなく純然たる事実として告げており、あまりにも当然と言わんばかりのアクトの発言に相澤も一瞬黙ってしまった。

爆豪と轟がこの中でアクトに対して並々ならぬ視線を向けてきているが、アクトのスタンスとしては依然として無視だった。

「……アメリカと日本じゃ温いと感じるかもしれんが、油断はするな

よ。

あと、放課後の一件は警察署から感謝状が届いている、あとで事務課に行つて受け取つておけ」

「了解した」

一貫として態度を崩さないアクトに相澤もそれ以上言うことはなかったのか、生徒たち一人一人に短くはあるが助言をしていく。

「急で悪いが今日は君たちに…学級委員長を決めてもらう」

「学校っぽい来た——!!」

また臨時テストがあると思つたのか、思わぬイベントに教室が一気に賑やかになった。

殆どの生徒が手を挙げて自推していく中、アクトは手を挙げずに朝の記者たちの質問を反芻していた。

——残虐なヒーロー、グッドスピードについてどう思われますか？

——ヒーローでありながらヴィランを殺害する彼の思想をあなたはどう思われますか？

アクトの——ノンストップヒーローグッドスピードのヒーローとしての姿勢に対して否定的なマスメディアの偏った質問に、日本においてのアクトのあり方が歪なこと、日本のヒーロー社会にとつて自分がいかに異物であるかよくわかる一幕だったと理解させられた。

かといって、その出来事がアクトの精神に何か大きなさざ波を立てたのかと聞かれれば、本人は即座に否定し笑い飛ばすだろう。

そんな謂れは覚悟でアクトは対策課に所属していたし、その道を選んだ事を後悔したこともない。

冷血、冷酷、残忍、残酷、残虐結構。

小を犠牲に全体を救うことが出来るのなら本望だ。

ヴィランの殺害——サイコパス値が黒オーバー300色ばかり、社会に何ら生産性を齎さないゴミだ、生かしておくだけ収容所の維持費に負担がかかる。

切り捨てる事は国が認めている、国のメディアもアクトの活躍を称賛していた。

諸外国、特に日本のようなヴィランを生かしておくような将来に禍根を撒き散らすより遥かにマシだ。

年々ヒーローが増えていながらヴィラン発生件数を抑える事の出来ていない日本が治安維持率世界一の国家を非難とは、口先国家がしやしやり出るんじゃない。

価値観が対極的な以上、たとえ同郷の人間でも相容れないものは相容れないと切り捨てたアクトは静かにHRが終わるのを待つのだった。

「静粛にしたまえ!!」

“他”を牽引する責任重大な仕事だぞ……!!

『やりたい者』がやれるモノではないだろう!」

と、自推するクラスメイトたちに待ったの言葉を上げたのは真面目な印象の強かった飯田だった。

将来ヒーローを率いていくのであれば、上手く指揮を執って事件を解決したいと考えるのが普通だ。

となれば、早い内から経験があつた方がいい、学級委員長という役はまさにうってつけだろう。

「周囲からの信頼があつてこそその聖務……!」

民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるといふのなら……これは投票で決めるべき議案!!」

「そびえ立ってるじゃねーか!

何故立案した!?!」

と、きつちりと右腕を上げているあたり、正直な性格なのだろう。

「日も浅いのに信頼とかクソもないわ飯田ちゃん」

「だからこそ複数票をとった者こそが真に相応しい者といえないだろうか!?!」

「そんなん自分で投票すらあ!!」

クラスのほとんどから突っ込みを受けた飯田はそういって、最終的に相澤も許可を出したことで無記名での発表が始まった。

飯田の年相応な姿に苦笑したアクトは飯田の名前をメモ用紙に記入した。

最初はデクの名を書こうとしたが、現状の期待値は高いものの実戦を想定した際の2人の動きを想像し、飯田に配が上がったのが理由である。

先日の爆豪との戦闘でのデクの分析力・判断力には光るものを感じたアクトだが、個性の制御をみて、委員長という——率いる者が度々怪我をして満足に指揮も出来ない状況になってはいけないと感じ、飯田に入れたのである。

自分ほどではないが出遅れても早さで挽回でき、現場に辿り着けるのならば、時間を誰よりも早く有効に使える飯田ならばと1票を入れたのだ。

無記名投票な為、自分の名前を記入することも出来たが長期任務がある以上余計な枷はない方がいいと思いき書こうとは思わなかった。

そもそも自分が投票されるとも思っていなかったが。

すぐに開票され、結果が発表される。

投票が最も多かったのは緑谷出久が3票、次いで八百万の2票、そして1票のクラスメイト達がいる、このほとんどは自分の名を記入した者たちだろう。

アクトには票は入っていない……と思っていたのだが、意外なことに1票入っていた。

心当たりがなく、思わず周囲を見回すと耳郎と目が合い、その動揺した様子に当たりをつけて鼻を鳴らした。

「僕3票——!!!?」

「なんでデクに……!!」

「誰が……!!」

「まーおめえに入れるよか分かるけどな!」

「1票……!!」

「誰かがぼ……俺に清き1票を!!」

「だが、やはり聖職といったところか……!」

「他に入れたのね……」

「お前もやりたがっていたのに……何がしたいんだ飯田……」

「……あ、アクト……残念だったね?」

「構わんき、アメリカで一通り経験済みだ」

素っ気なく流したアクトにうなだれる耳郎という図が珍しかったのか、何人かのクラスメイト達の目を引いたが、声を掛ける者はいない。

未だ、アクトにどう声を掛ければいいのか分からないからだ。

アクトの過去は高校になったばかりの彼らでは重過ぎて遠巻きに見る事しかできなかった。

唯一入試試験でクラスの中で付き合いの長い耳郎ですら二の足を踏んでいるのである。

他のクラスメイト達ではなおさらだった。

委員長には投票の多かったデクが、次いで八百万が副委員長になり、授業は過ぎていく。

そして昼食時、アクトは一人で食堂へ来ていた。

天ざるうどんを啜りながら、アクトは後からやってきた耳郎を見ると若干だが眉間にしわが寄った。

次いで近くに座ったデクや麗日、飯田を見やりながら、囲まれたと内心でぼやく。

「…アクト、なんか言いなよ。」

食事中は一人で食べたいとか、失せろとかさ…」

「…響香、俺は別段一匹狼を気取っている訳ではないのだが？」

お前たちが遠巻きにしているから、自発的に離れているだけだ。話しかけてくるのなら、俺は普通の対応を取るだけだぞ」

「そ、そうだけど…」

「俺の過去は昨日知っての通り血生臭い経歴で満載だ。」

近付きたくなければそうすればいい、去る者は追わんし、追いかけてもしい。

俺はそういう風に生きると既に決めて、アメリカで過ごしてきた。理解しろとも言わん、むしろしない方がお前たちの精神衛生上良いことだろう。

お前たちは俺を理解せずともいい、加減アクトという存在——ノINSTOPプヒーローグッドスピードはそういう存在なんだと別物と

思っていればいい」

理解されないのは慣れっこだと言わんばかりに、アクトは先手を打って拒絶の言葉を吐き出した。

「誇張もなく、謙遜もなく、ただ在るが儘を受け入れる。」

それが理解不能なアクトという存在のあり方だ。

アメリカにいた頃も日本と然程変わらない、異常者を見る目で見られることも多かったアクトはそれで傷ついたりはしない。

「アクトはさ、それでいいの?」

「理解者はなくとも俺の行く道に変わりはない。」

後悔はない、俺の生き方は間違っていないと胸を張れる。

「…食事時にする話でもなかったな、忘れろ」

「…いい、覚えとく。」

「…アクトは強いね、うちもアクトみたいに強くなりたいよ」

耳郎は自分の道を歩んでいるアクトに憧憬の念を抱き、自分なりの道を考えさせられたのだった。

「じゃあ、この話は終わり!!」

緑谷は委員長就任おめでとう!」

切り替えたのか、耳郎は近くに座って聞き耳を立てていた緑谷に声を掛けた。

耳郎のこういう切り替えの良さにアクトは好感が持てた。

冷めているのではなく、割り切る潔さを持っている。

アメリカにも僅かにいたアクトの数少ない友人たちは総じてそんな強さを持っていた。

「うーん、いざ委員長やるとなると務まるか不安だよ……」

「ツトマル」

「大丈夫さ。」

緑谷くんのここぞという時の胆力や判断力は “多” をけん引するに値する。

だから君に投票したんだ」

「(君だったのか!!)」

飯田はデクに入れたことを口にし、当の本人は思わぬ投票者の1人

が飯田だったことに驚いた。

「でも飯田くんも委員長やりたかったんじゃないの？」

メガネだし！」

「お茶子よ、メガネは関係ないと思うぞ」

アクトとしてはメガネの有無で委員長は出来ないと感じながら一言突っ込みを入れた。

「〴〵やりたい」と相応しいか否かは別の話：僕は僕の正しいと思う判断をしたままでだ」

「僕：!!」

デクと麗日が同時に飯田の一人称に気付くと、麗日の『坊ちゃんなの？』発言に飯田は気まずい表情を浮かべた。

ヒーロー一家の次男坊だと白状していく内に、実兄でもあり東京都でも規模の大きな事務所を開いているヒーローインゲニウムの話題に移ると気まずかった表情が嘘のように誇らしげなものを語る少年特有の顔をしていた。

その表情はデクがオールマイトを語る姿に酷似していて、アクトは飯田の語るインゲニウムが憧れの類のものと思ったが、何も言わず食事に集中した。

「規律を重んじ人を導く愛すべきヒーロー!!」

そんな兄に憧れて俺はヒーローを志した：人を導くのはまだ俺には早いんだと思う。

上手の緑谷君が就任するのが相応しい！」

場も和み始め、昼休憩も半ばに差し掛かってきた頃、食堂の上部にあるスピーカーが警報を鳴らした。

その場にいた全員が食事を止め、スピーカーからの続報を待つ者、警報に慌てて騒ぎ始める者もいてアクトは食事を邪魔されたとしてスピーカーを睨みつける。

『セキュリティ3が突破されました。』

生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください。

繰り返します———』

セキュリティ3、何者かが正門にある通称『雄英バリアー』を突破

し侵入した者がいる事を知らせる警報が鳴ったことで、食堂中から悲鳴が上がった。

「セキュリティ3って何ですか!？」

事情を知らない新入生——飯田が食堂から出ようとしている3年生に尋ねようとしたが、逃げる事に必死なのかその場で止まって答えを返してくれる者はいない。

ただ分かることは、この事態が上級生たちでも予想外の自体である、ということだ。

「セキュリティ3、言ってみれば校舎内に誰かが侵入したということだ。」

学生手帳にも書いているぞ飯田……こっちに来るといい、この波だと身動きは難しいからな」

アクトの個性を使った応用技『ゼロフィールド』で人の波を操作してぶつかる方向を流すように個性を展開していたおかげで、生徒たちはぶつかることなくアクトたちにぶつかることなく左右に流れている。

その余裕がある為なのか、飯田の質問にアクトは律儀に答えていた。

既に耳郎はアクトの傍にいて安全を確保していて、デクと麗日も合流しようとしている。

「つ、ついたあ…痛かったあ」

「にしてもすごい波…アクト様々だね」

「ゼロフィールドは向かってくる慣性をゼロにして止めるっていう技だったと推測していたのに今僕たちは減速することなく加減君の傍にまで行けたってことは部分的な展開も可能としているのかなという事は今の状況を見るとぶつかるうとして止まったりする生徒がない辺り流れなんかも操作できたりするのだとしたら慣性をゼロにし切れないほどの高速の飛び道具が来ても…」

「あ、ありがとう加減君!!」

そ、それにしても、いったい何が進入したというんだ!!」

デクがブツブツとアクトの個性を推測しているのにアクトは暢気

なものだと呆れながらも、アクトが外にいる元凶を指差した。

「マスコミだな、どういう手管を使ったかは不明だが連中が侵入者のようだ。」

対応しているのは相澤教師とプレゼント・マイクか…マスコミではあるが不法侵入者、ヴィランも同然だな」

マナーのなっていない報道関係者は自分たちが持つ報道の自由を掲げて入ってきたのか、悪びれたりする事なくマイクを2人に突きつけて何かコメントをもらおうと必死のようだ。

アメリカにもかつてはパパラッチという芸能人や政治家のスキヤンダルやゴシップを手に入れようと犯罪すれすれのグレーから犯罪行為を犯して情報を手に入れようとする者が多くいた。

現在ではその手の輩は更正施設送りとなっていて、滅多な事でスキヤンダルやゴシップは起きたりしない。

その辺りの監査も見守り続けているシビュラシステムが選別している為、民衆のサイコパス指数も健全を保っていた。

「飯田、俺はここから動くつもりはない。」

このパニック状態を鎮めてみせろ」

現状アクトがこの場を動いてしまえば人の流れに歪みが出て大惨事になり兼ねないことから自分の世界に入り込んでしまったデクよりも、解決策を模索しようとしている飯田に声を掛けた。

「い、行き成りそんなことを言われても…こんな大人数に大丈夫だと理解してもらうには…」

「現場はいつもその行き成りを対処している、お前が褒めたデクは今使い物にならない。」

麗日も響香もその手の対処は難しいだろう。

助言くらいはする、やって見せるがいい」

アクトに促され、飯田は周囲を見回しながら考える。

今生徒たちがは一直線に食堂の出入り口に向かっている、つまり視線は一方に限られているわけだ。

「分かり易く伝えろ、短く端的に、そして大胆にだ。」

お前が褒めたデクのように、自慢の兄ならどうするか…模倣からで

もいっ」

——Plus更Ultr向こうaだ、壁を乗り越えてみせろ。

「~~~~っ!!」

やってみせるさ!!

麗日くん、僕を軽くしてくれ!!」

「えっ!？」

う、うん!!」

麗日は飯田の手にタッチすると、個性の効果で飯田が宙に浮かび、飯田の個性で非常口の上に飛び乗った。

一瞬バランスを崩しそうになったのか、近くにあった配管を右手で掴むと、大きく息を吸い込み、そして——、

「大丈夫夫!!」

飯田の声に一齐に生徒たちが非常口付近を見上げる。

「ただのマスクコミです!」

何もパニックになることはありません、大丈夫夫!!」

飯田の声に、次第に足が止まっていった生徒たち。

アクトは周囲の状況を確認し、個性の展開を解除した。

飯田はアクトの求めた要望を叶えてみせた。

後は、繰り上がった計画を若干の修正を入れて実行するのみだ。

アクトはポケットから携帯端末を取り出し、事前に記憶していた番号へ素早くタッチする。

「…失礼します校長、少々お時間をいただけますか?」

アクトの足元には、アタッシュケースが置かれていた。

『オールマイイトとグッドスピードを出してくださいよ!!』

いるんでしょう!?!』

『一言コメント頂けたら帰りますよ!!』

報道関係者の身勝手な言い分に、対応に追われていた相澤とプレゼント・マイクはこの場から立ち去るよう伝えるが、言葉が通用しないのか帰ろうともしない姿に苛立ちを覚えていた。

正門を破壊したことによる器物破損、加えて許可なく土地に不法に侵入したこと。

綱渡りは報道関係者もよく渡っているのだろうが、既にやっていることは犯罪行為、言ってみればヴィランだ。

「…不法侵入だぜ、これもうヴィランだ、ブツ飛ばしていいかな」

「やめろマイク、あることないことかかれるぞ。

警察を待とう」

プレゼント・マイクの我慢が限界に達しようとしたところ相澤が嗜める。

「——その必要はない」

だが、そこに来てしまっただけはいけない人間が相澤たちの前に現れた。

黒を基調としたソフトハット・マント・外套・スーツ・手袋・ブーツに至るまで全てが黒のヒーロースーツ。

ソフトハットを目深く被っているからか、素顔は放送されてもばれる事はない辺り計算してこの場に現れたのだろう。

相澤も先日の記録を見たばかりで、未だに覚えている姿だ。

加減アクトのヒーローとしての姿、ノンストップヒーローグッドスピードだ。

「…………グッドスピード」

「ヤベえんじやねえのかこれ?」

呻く様に相澤は声を絞り出し、プレゼント・マイクも最悪だった状況にニト口を突っ込んだ事態になるのが想像に難くなかったのか、表情が引き攣っていた。

「彼がグッドスピード!?!」

「一言、一言お願いします!!」

「ヴィランを殺すことについて、何か思うところはないのですか!？」
「どうして日本へ!？」

相澤の小さな声をインタビュアーの耳が捉えたのか、一斉にアクトの——グッドスピードの前に押し寄せマイクを突きつけた。

「……127か、ゲスだな。」

汚い色はこれだから好かん」

「ひっ!？」

吐き捨てるかのようにインタビュアーを罵倒し、アクトは腰からある兵装を手に取ると、目の前の男に構えた。

それは異形の銃で、日本では存在しない銃の類でカメラマンはアクトの姿を全体から映すために若干だが後ずさる。

異形の銃——ドミネーターを突きつけられたインタビュアーは一瞬で固まってしまった。

「おい、あれって…」

「ああ、おそらくはドミネーターと呼ばれている特殊拳銃だ。」

アメリカのヴィラン対策課に所属しているヒーローのみが持つことを許されている：グッドスピード、分かっているとは思いが殺人行為はたとえヒーローであろうと…」

相澤はアクトが日本のヒーローにとって当たり前の絶対的ルールを伝えたが、帰ってきたのは嘲笑交じりの返答だった。

「むろんだともイレイザーヘッド、たとえ目の前にいる輩が潜在犯：日本では普通にヴィランだったか、何であろうと殺しはご法度いう事は入国前に調べている。」

ちなみにこの状態で撃ったとしても目の前のこいつは麻酔で眠るだけだ、アメリカなら更正施設送りだな。

これを見せたのは、俺がアメリカからの留学生であり：ノンストツプヒーロー、グッドスピードだと証明するためだ、それ以上の行為はしない。

だが——」

アクトは言葉を途切れさせると、ドミネーターを腰に装着しているホルダーに戻し指を鳴らした。

いわゆる——フィンガースナップという練習すれば誰にでも出来る簡単な動作だ。

だが、アクトが個性を駆使して行使すれば、それは凶悪な武器へと早代わりする。

マイクやカメラ、音響などの機材がアクトの『フィン^指ガー^{パッ}ス^チナップ』で、両断されたのだ。

あまりの早業に、全員がそれに気付いたのは機材がボロボロと音を立てて地面に落ちたときだった。

「うわあっ!?!」

「きゃあ!!」

「い、いったいこれは!?!」

悲鳴を上げた報道関係者たちをよそに、アクトは今度は両手を大きく広げると、両掌を打ち鳴らした。

普通ならばこれだけの喧騒の中であれば、アクトの打ち鳴らした音などかき消されるはずだったが、予想に反してアクトの起こした音は後者に大きく響き渡り、騒いでいたマスコミを一瞬にして黙らせた。「犯罪者をこのままだで帰す訳にはいかん、貴様らの名前、顔写真、所属している組織、すべて吐いてもらい警察へ突き出してやる。」

イレイザーヘッド、プレゼント・マイク、この件については根津校長から許可を得ている、手伝ってもらおうか」

アクトは雄英高校校長、根津に根回しの連絡をし、今回のマスコミへの対処を特例として認められていた。

それは2人の教師にとっても寝耳に水だったようで、相澤が確認の電話をするとすぐに返事は返ってきた。

全面的な協力要請——相澤はこの一件をアクトに任せることで、アクトが日本でどう対処するのか試金石にしようとしているのだと察すると、電話を切る。

「…拘束は俺がする、マイクは全体を見ろ、グッドスピードは抵抗する奴の制圧…ただし、昨日のヴィランのような容赦ない制裁は必要ない。」

「分かったな?」

「当然だ、特例とはいえ、俺の現在の身分は学生だ。

教師の指示には基本従おう」

アクトの目的達成のため、手段を選ばず状況の制圧を試みたのは最初の一手、その成果の確認だ。

この中にアクトの求めている存在に繋がっている人間がいれば、警察から釈放された彼あるいは彼女を尾行しアジトを急襲。

これで任務達成となるとは思ってもいないが、その尻尾でも掴めればと思ひ、行動に移したのだ。

難なく捕縛した報道関係者たちは所属も確かなものだが経歴が公務執行妨害や暴行、不法侵入などを両手では足りないほど犯した紛れもない犯罪者たちだった。

アメリカならば更正施設で一生を過ごしていただろう者たちだ。

実刑を受けていないのが不思議と思えるほどの犯罪者ばかりで、アクトも頭痛がした。

絞れるだけの情報を絞り出していく。

手を変え品を変え、時には調子に乗らせ時には鞭と表現の使用のないうキツイ口調で情報を絞り出す。

その手際は同年代とはもはや格の違う、正規のヒーローと同等かそれ以上の優秀さで、相澤もアクトの手腕に思わず感心した。

不満があるとすれば、鞭を振るった時相手の心を押し折るところか殺しにかかった所だろうか。

既に準備万端と正門前に交通渋滞を起こさない程度に配置されたパトカーにマスコミたちを押し込んだアクトは、相澤やプレゼント・マイクへ礼を言つて自らの教室へと戻っていく。

「…加減、一つ聞いてもいいか?」

「どうかされたか相澤教師?」

マスコミへの対応が苛烈な事については後日叩かれるのは俺だから気にしないでもらえるといいのだが?」

アクトはこれから教室へと戻ったとしても午後の授業は既に遅刻であるからか、相澤の質問に快く答える。

実際に今回のマスコミへの対応は雄英高校としてはマスコミにそ

れほど叩かれる事はないだろうが、アクトは——グッドスピードはこれを機にさらに炎上するだろう。

「どうして日本へやってきた、日本にはお前の家族は既くない。

親類も：日本にいた頃から絶縁状態だと聞いている。

はつきり言つて、既にアメリカヒーロー界で高い評価を受けているのに、態々水の合っていない日本へ来てまた一からヒーロー免許を取ろうとしているなんて非合理的だ。

：何が目的だ？」

相澤の言っている事は全て事実で、プレゼント・マイクも常々疑問に思っていたことだった。

半鎖国状態のアメリカへの入国審査をパスし、更にはシビュラシテムの学習プログラムを最年少記録で卒業。

以降ヒーロー過程を取得しアメリカでも最高のステータスを手に入れたというのに、それを簡単に捨て日本へやってきたアクトが理解できなかった。

理解出来ないが故の不可解、何か裏があると思ひあえて誰も聞こうとしなかった質問を相澤は本人へと投げかけた。

無論本音が聞けるとは思ってもいない、アクトの返答を分析しどんな思惑があるのかを推察するしかないだろう。

「：まあ、もつともな質問だな。

既に送っていた入学希望の通りでは納得はいかないのか？」

「あんなネットに転がっていきそうな志望動機で信じられれば苦労はしない」

「それもそうか」

「認めんなっての：」

相澤が吐き捨てプレゼント・マイクが呆れたように、アクトが雄英高校へ送った志望動機はネットに転がっていたものをコピーしただけのものだ。

元よりアメリカ政府からの推薦文がある以上受かると思っていたアクトは真面目に志望動機を書こうとせず、ネットに転がっていたのをコピーしたのだ。

「そうだな、どうせ止められんだろうし、言っても構わないか」

アクトは不敵な笑みを浮かべて、相澤とプレゼント・マイクに向き直った。

「俺が日本へ来たのはアメリカ政府からの密命があるからだ」

「やっぱりか…内容は…教える筈もないか」

「さすがにそればかりは教えることは出来ん。」

まあ、この辺りは日本政府も一部のヒーロー…相澤教師も想像していた通りかな？

俺の監視をして意図を探ろうとしているヒーローや公安、情報屋…そして直接的な接触を図ろうと企む勢力も何もかもがまだ掠りもしていない。

正直拍子抜けだ、つまらん」

傲慢とも取れるアクトの態度に2人が一瞬不快な表情を浮かべるが、アクトの立ち回りは一流ヒーローでも真似することが難しい。

「…ヒーロー側に情報を流したところで、欲しい情報は得られないだろうからな。」

故に先日から行動を派手にしてみた。

そして今日動きがあった。

…気付いているだろう、正門のアレを？」

「……ああ」

マスコミ関係者から事情聴取をしていくうちに、不可解な事が判明する。

どうやって正門の『雄英バリアー』を突破したかだ。

彼らの個性を調べていったが、正門を粉々することが可能な個性の持ち主はいなかった。

であれば、誰が正門を突破してみせたのか。

順序立てて考えれば答えはすぐに辿り着く。

「マスコミは囿…これは宣戦布告だ」

「グッド、その通りだイレイザーヘッド」

まるで出来の悪い生徒を褒めるような態度に相澤もこめかみに血管が浮かぶが、アクトは答え合わせを楽しむかのように声音が弾ん

でいく。

「近日中に再度雄英に侵入者が現れるだろう。

『雄英バリアー』を強化しようと、更に一枚上手の手段を以って盛大にやってくる。

ふふふ…カリキュラムの見直しを進言しておこうか、流石にクラスメイトに犠牲者が出るのは忍びない。

向こう一ヶ月…いや一週間くらいか。

演習実習のある授業の教師の増員をノンストップヒーロー、グッドスピードが進言させていただく」

「てめえ…雄英高校を戦場にする気か？」

企みの一端に気付いた相澤はアクトをヴィランに対した時と同様の鋭い眼で睨みつける。

アクトは相澤の詰問を笑顔で返す。

まるでイタズラがばれた子供の表情をするアクトに、プレゼント・マイクは気持ち悪いものを見る目でアクトを見てしまうが、それも仕方のないことだろう。

自らの立ち位置を有利な状況に合わせる、言うのは簡単だが、実際にその状況へ持っていくまでどれだけの労力と時間を必要とするかは難易度にもよるが求める結果を出すにはそれだけの手間が必要だ。

それを短期間にやっつてのけた手腕はもはや常軌を逸していた。

敢えて言葉に落とし込むとするのならば、『異端』という言葉が相応しいのか。

「結果的にはそうなるなが、勘違いしてもらっては困る。

俺がやったのはヴィランどもをこの雄英高校に誘導してはいるが、オールマイトがいる時点で遅かれ早かれヴィランどもは雄英高校に來ていた。

時計の針を進めただけだ」

「…正直退学処分にしてやりてえところだが、アメリカ政府からの意向もある。

見過ごすしかねえって事か」

相澤はこれまで100以上も退学者を出してきた。

その誰もがヒーローを志すには不資格で、ヒーローになれたとしても数年と持たず不幸な現実と直面するだろうと相澤は彼らを退学させていった。

相澤の基準からいって、加減アクトの能力は既に学生レベルを超えている。

正直に言ってヒーロー協会はアクトへアメリカからの密命とやらを果たすまでの間、限定的なヒーロー資格を与えてもいいというほどに。

その弊害が雄英高校へとしわ寄せとなってきた。

「そういうことだな。」

では俺はこれで失礼する。

午後の授業へ行かないとな」

「…グッドスピード、よく覚えておけ」

正門から去ろうとしているアクトの背中へ相澤は声を投げかける。

アクトは振り返ろうとはしなかったが、足を止めて相澤の次の言葉を待った。

「…お前のやり口は合理的だが…度を越えた外道な真似までしてみる。

あらゆる手段を講じてお前をふんじばってアメリカへ叩き返す。

よく覚えておけ」

アクトは返事をせずそのまま去っていく。

その様子から耳には入ったのだろう。

あとはそれをどうアクトが思い行動に移すかだ。

普通ならばこれで少しは大人しくなるだろうと思うだろうが、相手は数多の忌み名を持つヒーローだ、油断はできない。

ヴィランへの対策も必要だが、内なる問題——アクトの行動へも注視しなければと相澤はため息をつくのだった。

その後、委員長となった緑谷が昼休みの飯田の対応にやはり飯田こそ委員長に相応しとその座を譲る一幕もあり、授業は進んでいく。

アクトはその場に居合わせなかったが、嬉々として大きな身振りをする飯田に苦笑いしながら席に着いたのだった。

第08話 開戦の時来たれり

この日のヒーロー基礎学は人命救助訓練だった。

あれからアクトとクラスメイト達の関係に若干だが変化はあった。当初離れて様子を窺っていた飯田やデク、麗日、上鳴、切島、蛙吹がアクトに声を掛けたのだ。

来る者拒まずの態度をとっていたアクトも短期間に自らに近付くクラスメイトが多いのに内心驚いていた。

そんな中、耳郎は何か吹っ切れたのか、アクトに事あるごとに声を掛けていた。

「アクトはアメリカだとどんな活動をしていたの？」

バスでの移動中、耳郎はアクトの隣の席に座り質問した。

アクトはアメリカにいた頃のヒーロー活動に思いを馳せる。

だが、思い出すのは殆どが凶悪なヴィランを血生臭い処理をしている自らの過去にすぐに考えるのを止めてしまう。

「専らヴィラン退治だったな。」

来る日も来る日もヴィランヴィランヴィラン!!

僅か半年の間だったが、随分と濃い生活を送っていたな」

「ケガとかしなかった？」

「殆ど無かったな、ゼロフィールドが使えない状況でも何とかしていた。」

俺の個性は応用が利くからな、指一本あれば大概のヴィランなど塵芥だ」

「相変わらず自信だな加減は!!」

「当然だ、世間は血生臭いだの何だの扱き下ろしているが、その程度で右往左往する俺ではないからな。」

大体日本のヒーロー社会は人気取りだの高給取りだのと緩過ぎる

!!

この前などヴィランが暴れていてヒーローが近くにいるからどのような対処をするのか見ていたが、報道陣が来るまで放置するなんていう戯けがいたくらいだ。

あんな輩に免許を出した公安委員会の怠慢が伺えたな」

アメリカのヒーローは日本と同じ絶大な人気を誇る職種ではあるが、年間にヒーローが何人誕生するかは厳正な審査が行われていた。そもそもアメリカ社会では個人の将来すらもシビュラシステムがサポートしており、自由に職を決めるといふ立場は個人にはない。

シビュラシステムの提示した未来から外れて自分の求めた職に就いたとしても、そこで待っているのは職場からの迫害一択だ。

シビュラシステムに逆らったというその個人に、その個人の傍にいて接していけばサイコパスが濁ってしまうのではという恐怖からか、誰もが離れていってしまうからだ。

シビュラシステムが導入された当初は特にそういう行動を起こした潜在犯は多くいて、その度に矯正施設は大量の潜在犯を収容していった。

現在ではそのような誤った判断をせず、シビュラの神託のままに生きていく者が殆どだが。

ちなみにアクトはヒーロー職から省庁まで全ての職種に適合しており、一種の伝説を作り上げていた。

故に彼のことを一部の人間が『シビュラの申し子』と呼ぶものがあった。

「緑谷ちゃんの個性、オールマイトに似てるわね」

少し離れたところで、蛙吹と緑谷が話をしている、アクトも気になっていた話題をしていたので加わった。

「そそそそそかな!？」

「いやでも僕はそのえー…」

「だが蛙吹ちゃんよ、デクの個性とオールマイトの個性とは決定的な差があるだろう」

「そうだね、オールマイトはケガをしないけど、緑谷はケガをしちゃっている」

最近発現した個性、デクはそう言っていたことをアクトは思い出し、こどもも仮定した。

ケガをしなければ、つまり制御してしまえばケガもなく、増強型の

個性は出来る幅は一気に広がる。

相澤が以前言っていた通り、制御が出来ればの話である。

「デクよ、お前は個性をどういう風に使っているのだ？」

ふと気になったのか、アクトはデクがどのように個性を発動しているのか尋ねていた。

「えっ？」

えっと、電子レンジに見立てて…」

デクは自らを電子レンジの卵と変わった調整の仕方をしているように、アクトはそのやり方に呆れた。

「なるほど100%のスイッチを着けては切つてと繰り返しているのか呆れた奴め。」

体が作れていないのに100%を使う奴があるかあほう」

「えっと、加減くん？」

興が乗ったのか、アクトは見所のある個性を持っているデクに発想の転換を示した。

「必要な時に必要な個所に個性を発動？」

それがそもそも違うのだ。

全力の100%ではない、せいぜい5%程度の出力を全身に張り巡らせる。

それを常時発動するのだ。

常に100%を行使してケガをして回復しての繰り返し？

いったい何時になったらケガをせずに個性を使いこなすのだ、ヴィランはお前の成長なぞ待っていないぞ？

制御のマスターに生涯を費やす気か？

デクよ、相澤に発破をかけられて焦る気持ちは…分かんが、もっと軽く考えろ。

20分の1と侮るかもしれないが、それでも十分な火力はあるだろうさ…俺には届かんがな!!」

スイッチを着けたり切ったりをすれば二手、三手とすぐには続かないだろう。

体力テストの時に見せたような、指一本につき一撃と考えても実戦

になれば足りないだろう。

アクトはデクが今まで個性を使ってこなかったことから個性という当たり前を教えることにしたのだ。

常に100%を使っている者などそうはいない。

使えば自分の身がどうなるか身を以て知っているからだ。

幼い頃から使っていれば感覚でその調整を測れるのだろうが、デクはその勝手が違う。

デクには3年しかない、焦らなければならぬが、闇雲に走っても何も変わらない。

だからアクトは方向性を示すことにした。

具体的で的確なアドバイスでもある。

「あ、ありがとう加減くん!!」

早速着いたらやってみるよ!!」

「ああ、すぐにはモノに並んだろうが、慣れていけば後はほとんど拍子に出来る事は増えていくだろう。

俺の個性も制御には苦労した、何せ応用が利き過ぎてやれる事が多過ぎるからな。

全てを極める時間がないからこそ効率的な手段を以てして最短で高める。

制御が出来れば後はそれまで出来なかった事に時間を費やせばいい。

要は順序の問題なのだ、分かるか？

焦るのもいい、試行するのもいい、ケガをしてもいい。

だが、恐れるな、自分を信じ続ける。

努力すれば夢は叶う？

それは違うな、間違っているぞ。

夢が叶うまであらゆる努力、手段を以て続けるのだ、叶い続けるまでな」

そういつて満足したのか、ソフトハットで光を隠して演習場まで昼寝を始めたアクトの自由人ぶりに周りはどうと疲れてか、大きなため息をついた。

「ぎっすがプロのヒーロー、言ってる事が適格だし重いしで緑谷以外のウチらにも為になることばっかだね」

耳郎が隣で昼寝をしているアクトになるべく小さい声でフォローを入れた。

アクト本人は気にしないだろうが、こうして印象を悪く思われないよう草の根活動をするのが耳郎の誠意の見せ方だった。

「にしてもアクトの奴、到着まであと10分もねえんだけど、休めるもんなのか？」

「どうなんだろう、やっぱ休める時には休むっていうのが、染み付いてるのかな？」

「なるほど、プロヒーローとしての在り方を見せてくれているのか、流石だな加減くん!!」

「委員長声おつきいって」

「すっすまない…」

それに乗じてか、アクトの株を上げるグループが好意的にクラスメイト達との溝を少しでも構築しようと頑張っていた。

本人にやる気は無い為、対人関係は基本放置しているが委員長となった飯田やデクたちは加減にもクラスメイト達と仲良くなっただけらしいと思っっているのだ。

アクトがどんな思惑で日本に来たかなんて知らない。

ただ、この雄英高校で少しでも一緒に成長していけるクラスメイト——仲間として。

そんな思いを知らず、アクトは全力で休息に入っていた。

耳の周囲にゼロフィールドという完全防音状態で。

彼らの頑張りがいつ実るのか。

それはまだ、誰にもわからない。

* * *

アクトたちが着いたのは、およそ学校にある筈のない光景の映る場所だった。

水難事故、土砂災害、火事、あらゆる事故や災害を想定し、設計された演習場。

その名も――、

「ウソの災害や事故のルーム!!」

僕が作りました」

全身を宇宙服のようなコスチュームで身を包んだヒーロー、スーパーヒーロー、13号だ。

災害救助で目覚しい活動をしていて、丁寧な救助で人気を博しているヒーローだ。

ファンなのか、特に麗日が興奮して騒いでいるが、相澤がクラスメイトたちを一睨みするとしゅんと静かになった、アクト以外は。

アクト以外のクラスメイトたちは短い間で実に調教されていた。

アクトは周囲を見回すが、この場には相澤と13号の2人しかヒーローがいない。

警備レベルを上げるよう忠告していたが、雄英高校側は聞き入れていないのだと思うと落胆するも、自身がいればどんな相手でも対処してみせると奮起した。

「えー始める前にお小言を1つ2つ…3つ…4つ」
（(増えてく…））

小言の数の多さに萎えていくクラスメイトたちをよそに、13号は口を開く。

「皆さんぐ存知かと思いますが、僕の“個性”は“ブラックホール”
どんなものでも吸い込んでチリにしています」

この個性を使ってあまたの人々を救ってきたのだと13号は語り、一部のクラスメイトたちも13号の言葉を黙って聴いていた。

「しかし、簡単に人を殺せる力でもありません。

皆にもそういう“個性”の人もいるでしょう」
心当たりがあるのか、自らの個性を思い返していくクラスメイトたち。

13号は語る。

超人社会は“個性”使用を資格制にし厳しく規制することで一見

成り立っているように見えるが、それは一歩間違えれば容易に人を殺せる“いきすぎた個性”を個々が持つていることを忘れてはいけない。

相澤の体力テストによって自らの個性の秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘で人に向ける危うさを体験した。

今回の演習では心機一転、人命の為に“個性”を使うことを主題にやっていくことを伝えた13号は、再度クラスメイトたちに厳しくもやさしい声音で語る。

「君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。

救^{たす}ける為にあるのだと心得て帰ってくださいな。

以上、ご静聴ありがとうございます」

ぺこりと一礼した13号に口を閉ざしていたクラスメイトたちが個々に感嘆の声と拍手を13号に送った。

そんな中、アクトの表情は険しくなっていた。

これまである機能によって情報収集を続けていたところ、『回線遮断』と突然打ち切られたのである。

ハッキングといった違法な手段ではなく、クラスメイトたちのサイコパスを見ていたというだけのアクトにとっては当たり前前の行動だったのだが、ここに来て異常事態が起きたと周囲を警戒していたのである。

危惧していた事態が起きたのだとアクトは周囲を見回す。

近くには異常は無い、ここが教育機関だとは思わないほどの広大な施設だが、電波の広域封鎖を通達も無しに行うなど通常では有り得ない。

アクトの右眼からは頻りに『通信エラー、システムとのリンクを構築できません』と指向性音声によるアラートが鳴り続けている。

予想していた異常事態だが、ここまで大掛かりな手段を使って来るとは予想していなかったアクトは舌打ちするもすぐさま相澤に声掛けた。

「相澤教師、異常事態だ!!」

通信が何者かによって遮断された——!!」

「なに——っ!?!」

相澤もアクトの警告に眉を寄せる。

元々この演習ではオールマイトがつく予定だった。

演習を行うときは校舎を離れることから、アクトの警告に従い最低でも5人の教師を常駐していたが、オールマイトがいれば少数でもいだろうという楽観と、運悪くオールマイトが通勤中にヒーロー活動をして休憩中という事態にならなければここまで不利な状況には陥らなかっただろう。

「響香、障子、周囲を警戒しておかしの音が紛れ込んでいないか調べろ!!」

八百万は通信遮断を突破できる機材を今すぐに製作開始しろ!!

電気、お前は八百万が機材を作り次第電力源だ、無闇に個性を使うなよ。

他の者は周囲を警戒、急げ!!」

「え…?」

「てめえ眼帯ヤロウしきつてんじや——」

矢継ぎ早にクラスメイトたちに指示を下したが、彼らはどうしてアクトがそんな指示を下したのか理解できないのか動かないでいた。

それに加えて命令が気に食わなかったのか、爆豪がアクトに掴みかかろうとした時、相澤が声を上げた。

「——ひとかたまりになって動くな!!」

「え…?」

「13号!!」

生徒を守れ!!

加減、悪いがお前にも出てもらうからな!!」

「はい!!」

「了解だ、大船に乗った気でいるといい」

ここに来て異常事態だと気付いたのか八百万、轟らが漸く周囲を見回し、それに気付いた。

「あ、あれは何ですの!?!」

「黒い渦から…人が?」

「なんだありや!？」

また入試ん時みたいなもう始まってんぞパターン?」

広場の中央から、黒い渦のような物体が突然現れ、中から全身を手首の模型でまるで押さえ込んだような男を皮切りに、本来現れる筈の無い者たちがぞろぞろとやってきた。

「黙れ、動くなお前たち!!」

あれはヴィランだ!!」

鈍いクラスメイトに苛立ったのかアクトが声を上げる。

黒い渦からは異形型を中心とした不法侵入者たちが続々と現れてくる。

アクトは黒い渦——否、黒い霧を移動系と異形型の個性を持ったヴィランと判断し今日何度目かの舌打ちをした。

「——13号に…イレイザーヘッド、それにマッドスピードですか。先日頂いた教師側のカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが…」

黒い霧がだんだんと人型を作っていく、そこから男の声が聞こえてきた。

声音は落ち着いた男性の声だが、言っていることがまるきり犯罪者だ、アクトがドミネーターを使わなくても分かる。

「ちっ、オールマイトが狙いということとは俺の方は外れか?」

「アクト、どういうこと?」

「…どこだよ…せつかくこんなに大衆引き連れてきたのにさ…」

響香がアクトに事情を聞こうとしたが、最初に現れた手だらけ男がだるそうな声をあげた。

「オールマイト…平和の象徴…いないなんて」

聞く者を不快にさせるような声音で体をゆらゆらと揺らす手だらけ男はしっかりとクラスメイトたちを怖気の走る目で見やった。

「子どもを殺せば来るのかな?」

それは途方もない悪意が人の形をしたもの。

ヒーローと対を成す、闇の住人たち。

これが後にヴィラン連合と呼ばれる彼らの最初の事件。

「響香、唐突の事態だが現実を見ろ。

これは——」

ヴィラン襲来という、雄英高校始まって以来の大事件。

そして、1年A組にとって早すぎる実戦の時が、今始まった。

第09話 蠢く者 蹂躪する者

雄英高校上空500メートルに、その人影はあった。

青空に浮かんだ白いシミのようなソレはよく目を凝らしてみると人の形をしている。

白いシャツにパンツスタイルの青年は銀髪を靡かせ、白い翼を羽ばたかせながら遙か地上を見下ろしていた。

これで金色の輪があれば天使のようだと見る者は言うだろう。

見下ろした先では雄英高校の一部演習場を狩場としたヴァイランたちが続々と黒い霧から現れていた。

突然現れたヴァイランに目撃した生徒たちはショックで身を構えてしまっていて、動ける生徒は極僅かだ。

この非常事態に周囲は気付いた様子はない。

広大な土地を有した雄英高校は演習場へ行くのにもバスなどの移動手段を要している。

つまり、それだけ学校が広く、隣接している施設は限りなく少なかった。

連絡手段も必然文明の利器である携帯機器となるが、電波を遮断された演習場は陸の孤島と化した。

「…さあ、見せてくれ英雄の卵たち」

落ち着いた声の筈なのに、寒気のある声で彼は口を開く。

「僕に…人の、魂の輝きを見せてくれ」

×熱の籠った瞳で彼は——天使の姿をした悪魔邪悪は嗤った。

×「先生、侵入者用センサーは!?!」

「もちろんありますが…おそらく」

八百万の詰問に13号は言葉を濁す。

鉄壁を誇っていたセキュリティシステムが破られた。

だが、それも過去の話。

先日の時点で既にセキュリティシステムに綻びがあるのは指摘されていた。

対策も打ったつもりだったが、結果がこれだ。

現れたヴィランはここにいただけなのか、それとも重要施設を重点的に狙っているのか。

センサーが反応しないということは、ヴィラン側にシステムを妨害できる個性、あるいはスキルを持ったヴィランがいるということだ。

現状、校舎と離れた隔離空間、そして意図的なのか偶然かも分からない状況で最悪を想定するならば、

「――雄英高校側のカリキュラム：もしくはそれ以上の情報がヴィラン側に流れている可能性が高いなこれは。」

オールマイトを狙い撃ちしたこの奇襲、まったくもって最低な事態だ」

この状況下でも最悪と口にしないうあたり余裕があるのだろう。

アクトは手だらけ男を不愉快な目で見やった。

怖気の走る目でアクトたちを見つめるヴィラン、アクトは彼が今回の現場におけるリーダー格と認識する。

「…バカだがアホじゃねえ。」

オールマイト狙って用意周到に画策された奇襲だ」

相澤は13号に生徒たちを非難するように指示を出す。

ヴィラン側に再度連絡するように重ねて指示を出した。

上鳴には既にアクトが指示を出していた為、個性を使った連絡はやめておく。

保護対象である生徒である上鳴にあれこれと指示をして混乱させてはいけなと判断したからだ。

「先生は?」

1人で戦うんですか!？」

デクが相澤にヴィラン側の人数に相澤の個性を使つての戦闘スタイルでは不利だと、口にはしないものの自分たちも何か手伝えることがあるのではと声を上げようとしたが、相澤は――ヒーローレイザーヘッドはゴーグルを嵌めるとデクの言葉を遮った。

「…一芸だけじゃヒーローは務まらない。」

13号、避難を任せる。

かげ：いや、グッドスピード、お前は13号と一緒に生徒たちの護衛だ。

責任は取ってもらおうぞ?」

「元はといえば俺の蒔いた種でもある、言われなくともしてみせよう、イレイザーヘッド。」

責任を以て全力で対処しよう、視界に入ったヴィランは全て殺さず、よほどの相手がいない限り生け捕りにするとも」

アメリカヒーロー界の新星の力強い言葉を聞いて、相澤は生徒たちを残し、ヴィランたちがいる前方に突撃する。

「——射撃隊、いくぞお!!」

「ん?」

情報じゃ13号とオールマイトだけじゃなかったか!」

「ありや誰だ!」

「知らねえが、1人で正面で突っ込んでくるたあ——」

遠距離射撃の個性のあるヴィランたちが相澤に狙いをつける。

複数からの射撃では相澤の個性を消す個性にも限度があり、その行動は無謀だと一部の生徒たちは思ったが、次の瞬間それは勘違いだったと悟った。

「——大まぬけつ…え?」

口々に相澤をバカにしようとしたヴィランたちの声に戸惑いの声上がる。

相澤をハチの巣にしようとした彼らの個性は、誰1人として発動しなかった。

その隙を逃さず、捕縛武器を使ってヴィランに巻き付けると、慣れた手つきで操る。

拘束されたヴィランは隣接していた味方のヴィランと勢いよくぶつかり昏倒する。

個性が発動しなかった——ということに気付いた聡いヴィランが大声を上げる。

「——ばかやろう!!」

あいつは見ただけで“個性”を消すつうイレイザーヘッドだ!!」

「はっ!!」

俺らみてえな異形型の個性も消してくれるのかよ!？」

四つ腕に鉱石を纏ったヴィランが相澤に襲い掛かるが、相澤はその一撃を交わし、カウンターで顔面に一撃入れる。

「いや——発動系や変形系に限るっ」

殴ったヴィランが吹き飛ぶが、それと同時に捕縛武器を絡め、同じく近接戦闘に持ち込もうと相澤の背後から襲い掛かったヴィランへ投げ飛ばした。

個性を消すという以外無個性と変わらない相澤は、その身体能力だけで異形系のヴィランを圧倒してみせた。

これを皮切りに、次第にヴィランたちは相澤を取り囲めはしたものの、肉弾戦も強い上にゴーグルで目線を隠している状況では『誰が個性を消されているのか』分からないヴィランたちはせつかくの包囲した状況でうまく連携が取れないでいた。

「すごい……」

多対一こそ先生の得意分野だったんだ!!」

「デクっ、状況を見てから行動しろ!!」

デクが相澤の戦闘を見て感嘆しているが、アクトとしては見ていて気持ちのいいものではなかった。

相澤は生徒たちが無事に避難できるまで罠を買って出たのだ。

アメリカならばアクトが率先してその任を受け、ヴィランたちを蹂躪したのだろうが、日本である以上は勝手は出来ない。

アクトは八百万の通信機創造の進捗状況を確認するが、構造が複雑な通信機の創造には時間がかかっているようである。3分の1程度だ。

「——させませんよ?」

13号を先頭にアクトを殿しんがりに避難を開始しようとした矢先、ヴィランたちを連れてやってきた黒い霧のヴィランが13号の目の前に現れたのだ。

相澤は己の失態を悔やんだ。

戦闘能力はあるが、この状況下で一番厄介なヴィランを生徒た

ちの前まで通してしまつたのである。

「初めまして、我々は敵連合。」

僭越ながら…この度ヒーローの巣窟、雄英高校に侵入させていただけだいたのは…」

アクトはあえてこの男の話に耳を傾けた。

周囲を警戒するのは怠らないが、これだけの規模の事件を起こした組織に興味を抱いたからだ。

「——平和の象徴、オールマイトに…息絶えて頂きたいと思つてのことです」

13号が男の言葉と同時に戦闘態勢に移る。

アクトもいつでもゼロフィールドを展開できるよう臨戦態勢の状況でいる、少しでも情報を逃すまいと耳を凝らしていたアクトはある違和感に気付く。

誰かが自分を——自分たちを見つめる視線があることに。

僅かとはいえ実戦で鍛えられた勘に従つて遙か上空を睨み付け意識を空に向けてしまった隙に、男が個性を展開した。

黒い霧が生徒たちを取り囲むように広がっていく。

アクトはすぐゼロフィールドを展開する。

あらゆる力をそのフィールドに触れるだけで停止させるという鉄壁の盾が、この黒い霧を阻むだろうと、アクトは確信していた。

——だが、予想だにしていなかったことに気付く。

アクトのゼロフィールドをすり抜けてきたのだ。

単純な力技でしか突破方法がない考えていたアクトの持つ最強の盾を易々と突破されたとショックを受ける。

己の慢心に気付いた時には遅く、体の殆どを黒い霧で覆われたアクトは響香に手を伸ばした。

「響香っ、俺の手をつ!!」

「アクトっ!!」

だが、その手は届かない。

己の慢心を恥じるも、経験から空間転移の個性に直接的な殺傷能力はない事は知っているが、厄介なのは単純な転移とその応用性だ。

広場にあれだけのヴィランを連れてこれただけの個性だ、アクトのいたアメリカヒーロー界でもあれ程の個性を持ったヴィランは片手で数えるくらいしかいなかった。

飛距離がどれほどかは不明だが、単純な飛距離がキロ単位となればオールマイトを殺害する不安定要素であるアクトをこの場から退場させることも不可能ではないだろう。

「響香っ、無理はするな、俺が行くまで……」

最後までアクトは響香に伝えることが出来なかった。

視界が漆黒に覆われたアクトは次の瞬間、演習場に転移していた。想像していた最悪な展開より数段下の事態に安堵した。

「——来たぜ、マッドスピードだ!!」

「アメリカヒーロー界の期待の新星だつてよ?」

「こいつを殺しちまえば、オールマイト程じゃねえが名が売れる!!」

「かこめかこめえ!!」

そう、視界いっぱい広がる異形系のヴィランたちに取り囲まれながら、アクトは安堵したのだ。

周囲にはクラスメイト達はいない、アクト1人だ。

あの黒い霧のヴィランの個性の限界を凡そだが予測できたのも次会敵した時のアドバンテージとなることを頭に入れながら、思わず笑みを浮かべてしまった。

手にしたドミネーターに意識を向ける。

相変わらず『通信エラー、システムとのリンクを構築できません』というシビュラシステムとのリンクが切れた指向性音声しか届かない事態だが、アクトはこの事態をこう受け止めていた。

「——シビュラの目を盗んで動くのは殲滅作戦以来か……」

この時アクトのサイコパス指数をシビュラが読み取っていれば即座にドミネーターの使用権限停止が通達されていたかもしれないが、アクトには己がその範疇に当て嵌まらないと確信していた。

アメリカにおいて、シビュラが自らを裁くことは出来ないという、絶対的な確信を——。

「では、始めようか。」

なに、殺しはしない、ここは日本だからな、加減はしてやる。
ああ、ところで貴様ら——」

——地獄を見たことはあるか？

アクトの言葉を皮切りに、ヴィランたちはアクトに向かって突撃した。

アクトのコスチュームには数々の精密機器が装備されている。

しかもその設計を行ったのがシビュラシステム。

アクトにとつての要望を期待通りに叶えた結果作られた装備となれば、トップクラスの装備といえよう。

「とはいえ、手の内を多く見せる気は更々ないがな。

それでは我が憤怒の炎、受けるがいい!!」

パチンと、アクトのフィン^指ガー^{パツ}スナツ^チプが周囲に響き渡ると、ヴィランたちの周囲に突然、勢いよく炎が吹き上がった。

炎は瞬く間にヴィランたちを飲み込んでいく。

パチン、パチン、パチンと。

鳴らすこと3度、指パツチンを重ねるごとに炎は周囲に広がっていきヴィランたちを容赦なく呑み込んでいく。

「い、いきなりなんだあつ!？」

「なんで炎が!？」

こいつはモノを早くしたり遅くさせたりする個性の筈だろう!？」

悲鳴と共にヴィランたちから話が違うといった見苦しい言い訳が聞こえてくるがアクトはお構いなしに炎を再度放った。

「ほう、俺の情報がある程度知っているとということとは、雄英高校側のサーバーにでも侵入したのか？

とはいえ、俺が提出した個性にウソはないぞ？

——周囲の大气速度を早くして酸素濃度を局所的に上げ、コスチュームにある発火布で火種を付ければ…ボンっという訳だ」

アクトは全力でこの状況を楽しんでいた。

シビュラの目が届かないこの状況を。

パチンと鳴らす度に響き渡る悲鳴の合唱を。

パチンと鳴らす度に響き渡る憎悪の猛りを。
パチンと鳴らす度に響き渡る怨嗟の叫びを。

丹念に、念入りに、丁寧に、すぐに殺してしまわないよう気をつけて個性を使っていた。

暴威の炎は瞬く間にヴィランたちを戦闘不能に追い込んでいく。

死亡したヴィランはいない、だが、それ以上に悲惨な今後を歩んでいくだろう彼らからすれば、死んだ方がマシだと思ってしまうような人生となるだろうことは確実だ。

生きながらにして全身を焼かれ、特に両手両足は炭化してしまい物を持つことも、歩くことも満足に出来なくなった彼らの人生はただただ悲惨で、無常で、自業自得と片付けるにはあまりに無情であった。

「これが結果だヴィランども。
己の欲求不満を犯罪行為で解消しようとした結果がそれだ、そのザマだ!!」

パチンと、炎が上がる。

赤赤とした炎が、赫赫とした炎が、蠟燭ヴィランに火を灯していく。
だが、アクトは止めない、止まらない。

この場にいるヴィランがすべて立ち上がれなくなるまで、彼は止まらない。

作業的に、機械的に、ヴィランを燃やしていく。

そして最後のヴィラン——50超えたあたりからアクトは数えることを止めていた——を焼き終え、ようやくアクトは止まった。
疲れた様子はない。

ただの一度も、黒い霧のヴィランに転移されてから一步も動かずにこの惨状を作り上げたアクトに疲労の表情は窺えなかった。

「つまらないルーチンワークをこなした気分だな。

どいつもこいつも燃やされに来てからに…時間を取られた、さっさと行くか」

アクトはふと、空を見上げた。

あの時の視線は既がない。

異様な視線、熱を孕んだあの悪意の眼差しに気を取られたのは不覚

であった。

「…今回の騒動の裏に、俺の探している人物がいる？」

いや、さすがに早計か？

……まあいい、まずはこの騒動を収めるのが先決か」

次こそは油断しないと気を引き締めたアクトは個性を使つて宙へと浮かんだ。

風をいったん加速させることで制御して自らの機動力を上げると、一番近くのフィールドへと向かっていく。

後日談ではあるが、この場にいたヴィランたちを黒い霧のヴィラン

——通称黒霧が逃亡させる為に個性を使うことはなく。

使い捨てる駒にされた彼らの人生は、暗澹としていた。

第010話 死柄木弔

アクトの一番近くのフィールド——山岳フィールドには響香や上鳴、八百万がヴィランたちと奮闘していた。

上鳴の無差別電撃で殆どのヴィランたちが戦闘不能に追い込み優勢だったが、電気に耐性のあるヴィランがいたのか、不意打ちを受けたオーバーヒート状態の上鳴がヴィランに捕まり人質にされていた。

時間を稼いで隙をつこうとした響香や八百万も戦闘経験の未熟が見抜かれたのか、その動きを制止したヴィランは得意げに笑ってみせた。

「——残念だったな!!」

さあ、こいつの命が惜しけれ——ばあっ!？」

相性的には優勢だが、子供とはいえヒーローの卵相手に油断していないのか、ヴィランの男は上鳴を二の腕で締め上げながら後退していく。

あとは2人を遠ざけて逃亡しようと試みたところで、逃亡を開始しようとした時、その可能性を根こそぎ奪い取る存在が現れた。

「——時間が押している、茶番はそこまでにしてもらおうか」

ヴィランの後頭部を鈍器で打ち抜かれたような衝撃が襲う。

ヴィランはそのまま失神してしまうが、アクトはそんなヴィランにお構いなく追い打ちをかけた。

——パチン。

たったそれだけで、悲劇がまた一つ量産された。

「ぎゃああああああああああああつ!!」

ヴィランの両手両足が燃え上がり、失神していたヴィランが炎の痛みに覚醒し絶叫し、そして痛みから逃れるために現実から夢の世界へと逃避する。

あまりの出来事に、クラスメイト3人は茫然としてしまった。

アクトが当たり前のように非道な行いをしたことに、現実味が無かったという事もある。

「うっ」

「うえいうえい!？」

「アクト、あんた何やってんの!？」

特にアクトの非道を始めて見た八百万など人の焼ける匂いに耐性が無かったのか、口元を抑えながら顔を背けた。

響香と上鳴は2度目ではあるが前回よりも酷いアクトの非道に憤った。

「何とは？」

…ああ、これは逃亡封じの一つだ。

コスチュームの機能に風を起こすものがあってな、それを俺の個性で操作、圧縮させて対象の四肢へ向かわせてこの手袋…発火布というのだが…まあ指パツチンだな、火花を起こし…酸素に火花を近付けたら、どうなるかは簡単な実験でも結果は解るだろう?」

「そ、そんなことを言ってるんじゃない!!」

そこまでしてこんな酷いこと…」

「これが酷い?」

そんな事だから容易に人質になどされるのだ。

日本はヴィランを制圧するにも対応が生温過ぎる。

気絶させるだけ拘束しただけ?

反撃できる選択肢を、逃亡できる選択肢を…そして反抗のチャンスを残すなど本来ならば有り得ないぞ?」

逃亡反撃の選択肢を奪い、特に反抗の意思を根こそぎ奪うには、これは一番効率がいいのだよ」

アクトの理論は正しくはあるが、もはやそれはヒーローの思考ではない。

——— 猟犬の思考だ。

「…駄目だよアクト、そんなことしたらアクトが何時かヴィランになっちゃう」

「心配するな、加減はする。」

「…ここまでは、よほど状況が悪い時だけだ」

「…絶対だかんね?」

「…なるべく日本流に合わせるようにしよう。」

善処する」

疑いの目を向けられているが、アクトとしては別段悪びれた様子もないので尚性質が悪かった。

——携帯型心理診断鎮圧執行システム、ドミネーター起動しました

——ユーザー認証、加減アクト特別監視官

——公安局サンフランシスコ支部刑事課所属、使用許諾確認

——適正ユーザーです

通信状況が正常になったのか、ドミネーターが起動し指向性音声のアクトの耳元に届いた。

先程のヴィランが電波妨害を担っていたヴィランなのだろうと当たりを付けるが、このことを目の前の3人には敢えて伝えなかった。

「…では、俺はこれから中央へと戻る。

お前たちは散らばったクラスメイト達に合流次第この場から退避だ。

そうだな：轟や爆豪あたりに護衛をさせれば必ず脱出できるだろう。

外壁をぶち破ってでもお前たちは退避して、この状況を近くの施設の通信機を使って知らせるんだ」

アクトも通信機の類を持っているが、耳郎達の目の前で遣う気はなかった。

理由を作ってしまったえばこの場を離れてくれる理由にもなるし、万が一の良い訳も考えてある。

この場を離れていった耳郎達としっかり距離を取った後で時間差をつけて通信を行えば、『後になって通信が回復した』という言い訳になるからだ。

「アクトを置いて逃げるなんて…!?!」

「わたくしも耳郎さんの意見に賛成ですわ!!」

いくら貴方がアメリカでヒーローをしていたとしても、1人であれだけの数をするのは無茶です!!

「ここは…」

そうとも知らない2人はヒートアップして頑として譲ろうとしないが、アクトとしてもこの問答を続ける気はない。

「——はつきり言おう、足手纏いだ」

アクトが一番懸念しているのはクラスメイト達が先程のようにヴィランに人質として捕まってヒーロー側が戦意を落とすことだ。

今回の一件、大規模ではあるが蓋を開けてみれば大した戦力は片手で数える程度の数であった。

この程度であればクラスメイト達も知恵を巡らせれば対処可能だろう。

問題は想定を超えた相手——遙か上空の謎のヴィランだ。

直接の戦力は不明だが僅かなりとも感じ取ったあの悪意をアクトは、敗北の可能性を少しでも減らす為、この際邪魔な要素には退場してもらおうことにしたのだ。

それが、いくら仲の良いクラスメイトである耳郎であろうとだ。

「…言い方がきついのは分かっている。

だが理解しろ、これはまだお前たちには早い…聞き分けてくれ」

「…分かった。

絶対、絶対戻ってきてよ!!」

「ああ、また後で会おう」

アクトは宙に浮かぶと、セントラル広場へと向かっていく。

小さくなっていく彼の姿に耳郎は寂しさと悔しさがぐちゃぐちゃになった感情を抱きながら、八百万と上鳴を連れて山岳ゾーンを降りていく。

途中、尾白と轟と会い、アクトの言葉通りこの場からの退避を提案しようとしたが、轟はセントラル広場へ向かうと言って耳郎たちを置いて行ってしまったが、その後青山と葉隠れたちとも合流し、アクトの思惑通りUSJからの退避には成功したのだった。

セントラル広場では、集団戦をしていた相澤——イレイザーハツ

ドが脳丸出しの黒ヴィランに蹂躪されていた。

戦闘中、首謀者の手だらけ男に肘を崩され、身体能力が異常に高い黒ヴィランに一方的にサンドバックにされてしまったのである。

「個性の無効化…素敵だけなんてことないね」

手だらけ男がイレイザーヘッドを嘲笑う。

黒ヴィラン——脳無によってまるで杖を折るような手軽さで満身創痍のイレイザーヘッドの右腕に追い打ちをかけるようにバキバキと握り潰し、左腕を一ぐしゃりと押し潰してしまった。

「圧倒的な力の前では——ただの無個性だもの」

イレイザーヘッドの個性は多少の肉体の一部でも視認すれば個性を封じる事が可能だ。

——だが、視認したにも拘らず、脳無の身体能力は衰える様子はない。

相澤は戦慄する。

この異常な身体能力は、個性によるものではなく、素のものであるという事に。

その状況を、水難エリアのヴィランたちを撃退したデク達は遠目から見ていた。

水難エリアで辛くも初勝利した彼らは錯覚していた。

自分たちの力がヴィランに通用する——そんな錯覚に。

通用はした——だが、それはアクトの言うところの雑魚が相手だったからだ。

手だらけ男の言ったとおり、圧倒的な力の前では自分たちが相澤の下へ行つたところでむしろ邪魔にしかならない。

「——死柄木弔」

そこに加えて、クラスメイト達を方々へ四散させた黒霧が手だらけ男——死柄木弔の下へと戻ってきた。

嫌な予感がする、デク達は息を潜めてその会話に耳を澄ませた。

「黒霧、13号はやったのか？」

「ええ…行動不能には出来たものの…散らし損ねた生徒がいます。

……1名逃げられました」

「……はあ？」

死柄木の声音に苛立ち交じりの疑問符が上がった。

黒霧の言葉を理解する為に自らの顔をガリガリと苛立ちを抑える為に何度か度も引つ掻く。

思考を落ち着かせる為に、何度も引つ掻く姿はまるで苛立ちを隠せない子供特有の癩癩の様で、その不気味さに拍車がかかっていく。

「はあ……黒霧、お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしていたよ。」

…何十人ものプロヒーロー相手じゃ敵わない。

——今回はゲームオーバーだ」

帰ろっか、と死柄木はまるでゲームに飽きた子供のような口ぶりである。この場からの撤退を口にした。

その死柄木の言葉が聞こえた峰田は喜んだ。

どさくさに紛れて蛙吹の胸に軽いお触りをするが、蛙吹に容赦なく沈められる。

「気味が悪いわ緑谷ちゃん」

「うん……これだけの事を引き起こしておいてあっさり……」

オールマイトを殺したいのであれば、こんな中途半端に撤退したところで雄英側の危機意識が上がるだけだ。

非常事態ということで、オールマイトの周りにも質の高いヒーローが傍に付く可能性も高い。

何より、この状況を『ゲーム』という物差しで壊れた判断基準を持つ死柄木^{首謀者}の言葉をそのまま鵜呑みにしてもいいのか。

この場から離れた方が良いのでは、そんな思考が鎌首を上げてくる。

「————だけどその前に」

死柄木がデク達のいる方向へ向き直る。

デク達が気付く、その場から離れようとするが、一足遅く。

「平和の象徴としての矜持を少しでもへし折って帰ろう！」

完全に虚を疲れたデク達の目の前にまで、死柄木の文字通りの魔手が蛙吹に迫った。

顔面にその魔手が触れたが、個性が一向に発動する気配はない。死柄木はすぐにその原因を悟る。

「本っ当かつこいぜ——イレイザーヘッド」
脳無に拘束されていたイレイザーヘッドが死柄木個性を寸前で止めたのである。

デクは目の前の死柄木をどうにかしようと思いを発動する。

全身に10パーセントの出力を掛け、相手を吹き飛ばしてこの場からの撤退。

「手っ…離せえ!!」

「——脳無」

「SMASH!!」

だが、現実是非常である。

未だ万全に個性を使えないデクの一撃はたった一言、死柄木の呼びかけで呆気無く潰えてしまう。

衝撃と粉塵がデクと脳無の周囲を覆う。

デクは己の腕を見て驚いていた。

折れていない、アクトの助言通り10パーセントの出力でヴィランを殴った。

そこまではよかった。

力の制御がうまく決まった。

目の前に、脳無と呼ばれた真っ黒な脳丸出しのヴィランが平然と立っていないければ、もっと喜べたであろう。

死柄木の盾のようになった脳無は無機質な目をしてデクを見下ろしていた。

敵意、悪意はない。

あまりにも異質な存在だ。

デクの脳裏に疑問が浮かぶ。

——相手が早すぎる

——いつの間に僕の目の前に…

——それよりもこいつ…僕の力が効いていない？

蛙吹の言葉が思い出される。

オールマイトを殺すといったその根拠。

殺せる算段が整っているから、こんな無茶をしているのではないかという。

「良い動きをするなあ…スマッシュユって…オールマイトのフォローかい？」

振り返らずに、死柄木は脳無に命令する。

「まあいいや君…死んで」

命令を受諾した機械のように、脳無は死柄木の言葉に反応しデクの利き腕を掴む。

蛙吹はデクをその場から遠ざけようと個性の舌を使うが、脳無はしっかりとデクの腕を掴んで離さない。

「———そこまでだ、ヴィランども」

酷く落ち着いた声が、衝撃と共に空から降ってきた。

「———がはっ!？」

衝撃が走り砂埃が中央エリアに舞う。

視界が悪い中、死柄木のうめき声、そしてデクを掴んでいた脳無の力が弱まったことで再度デクは全身に個性を行き渡らせてその腕を払った。

脳無の腕は殆ど抵抗もなく、ボトリと落ちたような音がする。

2度目の個性発動も失敗しなかったという実感と共にデクは先程の声の主を探した。

「———加減くん!？」

「…デクよ、あまり無茶はしてくれなな？」

それと個性を安定して使えたようだな、おめでとう」

「あ、ありがとう？」

じゃ、じゃなくなつて!!

いったいどうやって!？」

視界から砂埃が消えていくと、デクの前には見知った光景があった。

黒を基調としたソフトハット・マント・外套・スーツ・手袋・ブーツに至るまで全てが黒。

まるで一昔前の映画に登場していたヴィランを切り取ってこの場に降り立った姿。

ノンストップヒーロー、グッドスピードがそこにはいた。

第011話 VS脳無

雄英高校にて、4人の男女が正門前で佇んでいた。

正門は以前の崩壊事件からさらに強化した仕上がりになっており、嚴重さに磨きがかかっていた。

あるヴィランの持つ物体を崩壊させる個性を除けば、強力な個性の攻撃を最低でも1時間は止められるほどのものだ。

その中でリーダー格の男——切れ長の目で鋭い印象のポニーテールをした20代の男性——が腕時計型の携帯端末で正門の向こう側、雄英高校の校長、根津校長と会話中だった。

「——こちらの要求は呑めないか？」

アメリカからの正式なルートで日本政府には連絡は取って、許可も下りている。

早くこの正門を空けて頂きたい」

『いま文科省、外務省、公安委員会に連絡を取っていてね!!』

あと5分もしない内に全ての確認が取れるので待ってほしいな』

「それは10分前にも聞いた、いい加減時間稼ぎは止めてもらおう」

「——ギーンさん、オレ行くっスよ？」

いい加減待ちくたびれたんだけど」

年若い、少年が緊張感のない声音で、ニヤニヤしながら事態の進展の為にと立候補していた。

本音としては小一時間もこの場に待たされて限界が来たのだが、少年の個性では正門を破壊して事態を悪化させるだけだったため、ギーンと呼ばれていた男はあえて無視した。

「ハウンド4、あんたの個性だと確実に面倒になるわ。」

自重して」

整った顔立ちをした、クールな印象を受ける金髪の女性があとため息をついた。

「んだよハウンド2、お前のだって確実に面倒になるだろうが」

「私のは気化させるからせいぜい音程度よ、あんたのは周囲一帯砂だらけでしょう」

「お二人とも、お静かに。」

「どちらもアクトさんの許可がなければ個性の使用はいけませんよ？」

「ですが、あと10分待つてもダメだった場合は…この頑丈な扉に『自発的に』開いてもらいましょう」

2人の言い合いに仲裁へ入ったのはアクトが乗っていた車の運転手を務めていた雷銅駿太だった。

落ち着いた様子だが、この場で一番不穏で過激な発言をしたのは彼だろう。

ギーノの後ろで揉めている声が聞こえてきたのか、根津が気難しげな声が端末から漏れ出るが、次の瞬間、驚きに変わった。

『なんだって、中央の演習場でヴィランが!?!』

ギーノは知っていた。

この時間帯、中央の演習場を使っているのがアクトたち1-Aの生徒たちだということ。

思わぬ機会に、ギーノは根津に強引な交渉を行った。

「根津校長、戦力はあればあるだけいいだろう？」

我々もヴィランの対応に協力させてほしい」

事態が動いたことで、ギーノは事件解決に協力することで状況を動かそうとした。

根津は悩んだ。

加減アクトを含め、アメリカ勢力とつてもいい彼らが日本のヒーローに対して良からぬ影響を与えるのではないかという不安があった。

それと反対に、『これが日本のヒーローだ!!』というものを見せつければ、今後の関係を良くしていけるのではないかという期待に揺れ動いていた。

事態は刻一刻と過ぎている。

根津は決断した。

『———すぐに開ける、迎えの教師をよこすので、案内に従って協力してほしい!!』

穿った目で見れば、雄英側が独力で事件の対処ができないという証明とも取れる判断だが、ギーノとしてはどうでもよかった。

「いや、場所はある程度分かる。

中央の演習場が現場だというのなら、正門を通り次第、一直線に向かおう」

携帯端末から、アクトの所在情報が浮かんでくる。

やっと再発信し始めたのだ。

根津は非番にしていた教師を含め、今動けるヒーローたちへ連絡を取り始める。

波乱に満ちた事件は、収束に向かっていった。

* * *

デクの前に降り立ったアクトは徐にドミネーターをホルスターから抜き死柄木たちに向けた。

アメリカからの癖なのだろう、黒霧の個性は警戒しているが、それでも首謀者たちのサイコパス指数を確認しておきたかったのだ。

「マッドスピード…このチートがあっ!!」

「もう来てしまいましたか…一番数の多いエリアに飛ばした筈なのですが、貴方の事を過小評価していたようですね」

死柄木が激昂し、黒霧が作戦の失策を悔やんだ。

アクトが死柄木を攻撃して転がしたのか、砂埃塗れになった彼と、その近くにいた脳無の姿にデクは驚いた。

「くははははっ、有象無象が100や200増えたところで俺に近づく事など出来ないぞ!!」

「う、腕が…切られてる!?!」

脳無の右腕からは夥しい量の血が流れている。

肩口からバツサリと切られており、まるで噴水のように流れ出して

いた。

その光景を遠くからクラスメイト達も驚愕していた。

アクトの個性は加速と減速を操る個性だった筈、それがどういう使い方をすれば人体を切断するほどの危険な一撃を放つ事が出来るのか。

デクは脳無の魔手から逃れられた原因がこれだと悟った。

これを誰がやったのかも、同時に分かってしまう。

「か、加減くん、やり過ぎだよ!!」

「いや、あの程度なら後で焼き潰せば出血は止まるだろうさ。

…それに、それほどのことでもないみたいだぞ?」

アクトが脳無を指さすとそこには異様な光景が映っていた。

「腕が…生えてきてる!?!」

「…対象黒霧サイコパス指数295、対象手だらけヴィランオーバー300越えか。

アメリカなら執行対象だったな、そして…脳丸出しヴィラン、0ゼロと来たか。

なるほど、フレッシュミートなゴーレムときたか」

アクトはドミネーターから送られてくる情報を冷静に分析していた。
だ。

脳丸出しヴィラン——脳無からはサイコパスが測れなかったのだ。

その代わりに、ドミネーターからは別の警告が発されていた。

「おい、そこに転がっている小汚い教師、意識はあるか?」

「…グッドスピードか、状況は?」

相澤——イレイザーヘッドは首だけを動かして状況の確認をアクトに促した。

「エリアの半分は制圧完了しているようだ。

思いの他クラスメイトたちが奮闘しているようだな。

戦闘は終結に向かっている…後はここだな。

さて、提案だがなイレイザーヘッド。

貴様をボロ雑巾にしたと思われるあの脳丸出しのヴィラン、消滅さ

せるが構わないな？」

なんでもない、当たり前前の提案をしたつもりのアクトだったが、相澤には受け入れられなかったのか、苦悶した表情が更に歪んでいた。「はははっ、何だよイカレてやがるぜヒーロー、綺麗事がお題目のお前たちがヴィランとはいえ人殺しをするのかよ!!」

「加減くん!」

「訳を言えグッドスピード、いくらヴィランであろうと、殺人の許可はできんぞ」

「殺人ではない、そもそもあれはもう既に人として正気を失っている。ドミネーターがあれを人と認識しなかったというのもあるな、治る見込みもゼロだ。」

言ってみればあれは生きた人型のラジコンだ、手だらけヴィランの命令を忠実に守る生きたラジコン。

「殺すというよりも、この場合壊すということだ」

「…なんだよ、バレてんのかよ。」

そうさ、こいつが対平和の象徴、改人脳無っていったな。

元あった人格なんて余計なもん取っ払って、徹底的にこの体を弄繰り回して生まれたものだ!!

いくらお前がチート染みた個性を持っていようと、こいつの前には無個性も同然!!」

舌打ちする死柄木は痛みも引いてきたのか、落ち着きを取り戻した死柄木は脳無に命令を下した。

「脳無、黒霧、2人がかりで、マッドスピードを殺せ!!」

「殺人教唆の現行犯だな、全力で抵抗させてもらおうか。」

あとイレイザーヘッド、俺が抵抗しているうちに結論は出しておいてくれ。

勢い余って消滅させた時、許可がなかったとあれば器物損壊罪だからな!!」

ドミネーターをホルスターに戻したアクトは個性を発動して突撃する。

「だめだ加減くん!!」

そいつは僕のパンチが効かないし、腕なんか小枝を折るように破壊できる怪力の持ち主だ!!」

デクが脳無の危険性をアクトに説いて引くように伝えるも、アクトは一向に下がろうとはしない。

アクトは脳無に向かって手刀を繰り出す。

単純な、振り下ろすだけの行為だが、デクが見えたのは振り上げた一瞬だけだ。

次の瞬間、脳無の右腕が切り裂かれた。

「ちっ…硬いな、不意打ちで切り落とせたから、真正面でも可能と思っただけだ」

脳無の右腕の半が抉れるようにして切り裂かれたその一撃は、常人ならば即両断されてもおかしくない一撃だったが、強靱な肉体はその必殺の一撃に耐え切った。

むしろ手刀を繰り出したアクトの肘と手に激痛が走った。

一撃目は個性を応用した風を使った斬撃だったが、直接攻撃となるとアクトの戦闘力はさほど高い訳ではない。

個性を使つて無理やり攻撃力を上げているようなものだ、相手の防御が固ければその分諸刃となって自らのダメージとなってしまう。

アクトは黒霧の位置を確認しながら脳無から距離をとった。

「超高速の手刀!!」

いくら物理耐性のある脳無でも、あの一撃は拙いですね」

濃霧の傷はすぐさま再生を始める。

「…10秒もかかっていないな、さながら超再生といったところか。

超パワー、超耐久、超再生…完全なパワータイプだな。

性質の悪いラジコンだ!!」

右腕から鈍い痛みが発信されていた。

折れてはいない、だが、酷使すれば治りが遅くなってしまうという危惧を抱いたアクトは脳無との戦闘方法を近接戦闘から遠距離攻撃に切り替えた。

右手をパチン、と指フィンガースナッチパッチンが鳴る。

瞬間、脳無と黒霧のいた個所から超高温の炎が吹き上がった。

火だるまにされた脳無は突然の炎に動きが止ってしまいが、黒霧は動きを封じる事が出来ず、そのままアクトに突っ込んできた。

「この程度なら私の個性ならば対処可能ですよ!!」

黒霧は己とアクトとの相性の良さを活かし、アクトを自らの霧で包み込もうとする。

襲撃時にクラスメイト達をあちこちに転移させたような優しい攻撃ではないことは確実だ。

アクトはアメリカ時代、何人か空間転移系の個性を持ったヴィランやヒーローを見てきた。

その中でも彼らには共通していることがあった。

それは――、

「――己の個性の優位性に慢心しているということだ!!」

「がはっ!」

アクトは黒霧に接近すると、全身を黒いモヤで身を纏った黒霧の、人間でいう首元に巻かれた金属に手を掴んだ。

アクトはこの金属が黒霧の生身を守る為の防具だと見抜くと、躊躇せず個性を発動する。

浮いた黒霧を地面に叩き付けた。

「くははははっ!!」

そんないかにもな防具を見たら、攻撃しなくなってしまうだろうが!!

そして案の定、その部分だけが生身の様だったな。

獲物を前に舌舐めずり：個性は一級品だが、戦闘は3流だな」

黒霧は己の弱点にカバーをして、更に自らの個性でそれを隠していたが、クラスメイト達を囲い込んだ時の一瞬を見逃さなかった。

嘲笑うかのようにアクトはそのカバーを圧倒して叩き伏せたのだ。開戦直後の慢心を拭い去ればこの通り、アクト1人でヴィラン側の

切り札を圧倒してしまった。

「くっ!!」

「さて、黒霧とやら、動くなよ?」

反撃と見られる行動をとったと俺が判断したら、即座に直火焼きに

してやる。

勿論、火加減はこんがり…っ!!」

黒霧を抑え込んだアクトだったが、回復した脳無がアクト目掛けて絶死の拳を振るった。

だが、アクトは避けようとせず、ゼロ・フィールドを脳無の前に展開。

超加速した暴威の拳は見る見る内に減速していき、アクトから1メートル手前であらぬ方向へ振り抜いていた。

「バカめ、パワーだけはオールマイトに匹敵するかもしれんが、力任せの一撃で俺に近付けると思っただか!!」

「…は？」

なんでそんなところで振り抜いているんだよ、もう一度だ脳無!!」

アイツがグシャグシャになるまで痛めつける!!」

目測を誤ったのか死柄木は訝しんで、再度脳無に命令を下す。

命令を受信した脳無が今度こそとばかりにアクト目がけて拳を振るった。

一撃一撃が全てアクトを絶命させ得る拳にアクトも分析を終えていた。

減速した拳も十分な脅威であるとアクトは気付くと、脳無の初撃を同様に、攻撃を反らせることにした。

時速300キロの速さのボールを150キロに減速させたとして、危険なことに変わりはない。

ならばと、アクトはゼロ・フィールドに触れた脳無の拳の行き先を強制的に誘導して、攻撃をアクトのいない空間に放たせたのである。

デク達の視界には脳無がまるで威嚇するかのようアクトの周りを殴っているように見えて、啞然とさせた。

アクトも黒霧の反撃を警戒しながら脳無に何度も炎をぶつけるが、再生を続ける脳無は構わず拳を振るい続ける。

いくらアクトの個性で攻撃を反らし続けていても、その迫る一撃に全く恐怖せず一度として自らに近付けさせながら反撃するアクトの集中力は常人を遥かに超えていた。

「…しぶといな、焼いた先から再生して灰にならんとは…おい黒霧とやら、この脳無に弱点はあるのか？」

教えてくれたら今なら焼き加減をミディアムレアにしてやろう」
ふざけた質問に黒霧は冷ややかに返した。

「お断りします。」

教えでもして実行されれば、我々の敗北は決定してしまう」

「ふん、まあ期待していなかったからいいでしょう。」

——おいそこのボロ雑巾みたいなヒーロー、決断したか？」

アクトは相澤に脳無の処遇をどうするか再度決断を迫った。

「たとえばこの場で脳無を捕まえたとして、情報はロクに手に入らんぞ？」

分かるのは非人道的な実験の被害者の身元位で回復の見込みも無し、ヴィラン連合とやらの情報が手に入る訳でない。

生かしておいていざ奪還でもされたらこれほどの戦力だ、並みのヒーローでは束になったところで太刀打ちできん。

どうするヒーロー、俺としてはどちらでも構わなくなってきた。

生かしておいて後の禍根とするか、消滅させて後の脅威を消し去るか、好きにするがいい」

「…グッドスピード、その哀れな被害者を、何とかして拘束してくれ」

後の禍根となろうとも、ヒーローとしての立ち位置を間違える訳にはいかない相澤は脳無の拘束という決断をする。

だが、実行するのはアクトである。

面倒事を押しつけられたと相澤を睨んだアクトだが、勝手をする訳にはいかない以上その決断を尊重するしかない。

アクトは脳無を再生困難なまで追い詰めた後で死柄木をどうにかして拘束する事を計画し始めた。

「くそっ、これ無理ゲー過ぎるだろう！」

話しが違うじゃないか、先生!!」

死柄木が頭をガシガシと掻き毟って苛立ちを見せているが、状況は変わらない。

むしろ、脳無が倒されれば次は自分だということも分かっている。捕まってしまった黒霧がいなければ逃走もままならないこの状況は最悪の一言に尽きた。

そしてウイルス連合にとつての悲劇は更に続く。

USJの入口が勢いよく外側から吹き飛び、アクトたちのいた噴水近くまで残骸となって降ってきた。

視線を向けると、そこには日本において誰もが知る彼がやってきていた。

「——オールマイト!!」

「——もう大丈夫、私なき…た?」

不敵なスマイルを浮かべた平和の象徴、オールマイトがトドメとばかりにやってきたのだ。

とはいえ、事態は既に終局へと向かっている。

生徒たちの危機を救いにやってきたオールマイトも、事態が思っていたよりも危機的ではない事に気付いたのか、拍子抜けして首を傾げた。

「ようやく到着かよ平和の象徴。」

…くそつ、マッドスピードがいなければいまごろっ!!」

オールマイトを前に激高した死柄木が射殺さんとばかりにオールマイトを睨みつけるが、生憎ながら彼の個性は視線で殺傷する個性ではなかった。

「俺の前に立った時点で、貴様らウイルスの運命は決している。」

オールマイト、その手だらけウイルスを拘束しろ。

今回の事件の首謀者だ。

俺はこちらで手が離せん、そいつを片付ければこの脳丸出しウイルスは止まる筈だ」

命令する側がいなくなればおのずと脳無は反応しなくなると推測したアクトはオールマイトに死柄木確保を命じた。

「なにっ!?

よし、任された!!」

オールマイトは着ていたスーツを脱ぎ捨て死柄木を拘束しようと

超速で接近する。

いくら死柄木が接近戦に有利な個性を持つていようと、相手がオールマイトでは相手が悪過ぎた。

切り札の脳無はアクトを、グッドスピードを牽制している為呼び寄せる事が出来ない。

「くそっ、くっそおおおおおおおおおっ!?!」

死柄木の背後に回り、無力化しようとオールマイトの一撃が死柄木に迫ろうとした時、思わぬ事態が起きた。

『それは困るな、あまり私の望んだ状況ではない』

「——っ!?!」

身の毛がよだつ、ぞつとする声がどこからともなく聞こえてきた。

アクトが、オールマイトが思わず固まってしまうほどに圧倒的な気配。

オールマイトは死柄木から離れて周囲を見回すが、誰もいない。

一切の気配を辿らせないほど接近していたという違和感を覚え、アクトは真下にいる黒霧を睨みつけた。

「——黒霧、貴様っ!?!」

『——個性強制発動、さあ、続きといこうか』

既に黒霧はアクトの元にはおらず、何もない地面だけとなっていた。

どこに消えたのかと思えば、いつの間にか死柄木のいる場所にまで移動していて、個性が発動していた。

ずぶずぶと黒霧の個性に沈んでいきながら、死柄木はオールマイト、そしてアクトをこれでもかと睨み付ける。

「今回は失敗したけど……今度は殺すぞ、オールマイト、マッドスピード!!」

「玩具ではしゃいでいるようなガキに俺が殺されるか…次会った時が貴様の最後だ」

霧に沈んでいった死柄木と入れ替わるように新たな脳無が現れる。

『脳無、その2人を殺すんだ』

見る限りアクトを襲っている脳無と同タイプの戦闘力を有した相

手に、アクトも舌打ちする。

声の主はそれ以上何も言わず、おぞましい気配は消え去り、あとは脳無を残すのみだ。

「オールマイト、この脳みそ丸出しのヴィランの個性は超パワー、超耐性、超再生のガチガチのパワータイプだ。

俺たちからしたら頑丈なサンドバック程度だが、安全第一だ。

俺が抑えている内にそちらの1体を拘束して2人掛かりで俺の方を拘束で行こうと思うが、いいか？」

2対1であれば苦戦しただろうが、1対1の状況ならば時間を掛ければ勝てない相手ではない。

だが、アクトにはある一点、不得意としていることがあった。

アクトがアメリカにいた頃、凶悪犯専門として活動していたアクトの逮捕記録は驚くほど少なかった。

ドミネーターをヴィランに向ければ、その殆どがエリミネーターとして起動する潜在犯ばかりを相手にしてきたせいか、アクトが対象を確保——拘束した回数は片手で数えるほどしかない。

アクトがオールマイトに言った安全第一とは、アクト自信が詰みの段階で失着を打たない為の最後の一手だった。

「よし、任されたぞ加減少年!!」

さあ、いくぞヴィラン!!」

戦闘を始めたオールマイトをよそに、アクトは戦場をクラスメイト達から離れていく。

現状の脳無は逐一命令例を下さなければならなかったコマンド式ではなく、一度命令を下せば後は手当たり次第に暴れまわる自動式になっていると懸念したアクトが万が一を防ぐ為この場から離れようとしていた。

直線距離にして300メートルを稼いだ頃、オールマイトが脳無を吹き飛ばしたところで、予期せぬハプニングが起きた。

「この、壊れたラジコンが!!」

アクトが相手にしていたヴィランがオールマイトに突っ込んでいったのである。

ただでさえ早い脳無に出遅れたアクトは脳無の後を追っていく。

「——よっしゃー!!」

ようやく中央に戻ってこれたぜ!!

おい爆豪、救援に——」

アクトは更に続く。

中央広場に戻ってきた爆豪と切島が脳無の進行方向に出てきてしまったのだ。

アクトと脳無の距離は約100メートル、絶望的な程遠かった。速度的にはまだ上がるが、バランスを欠いた速さは逆に命とりだ。相澤との約束を守っているのは2人の命がない。

アクトは決断する。

「———すまないがイレイザーヘッド、約束は破らせてもらう」

『執行モード・デストロイ・デコンポザー・対象を完全排除します・ご注意ください』

アクトのドミネーターが変形した。

装甲版が、禍々しい生き物の翼のように広がる。

鋭い牙を持った動物が、口を開けて獲物を飲み込もうとする光景に似ている。

ドミネーターの最終形態、デコンポザーの一撃。

脳無の全身、そして地面も巻き込んで綺麗な球状に消失した。

分子破壊砲、公安局の刑事ヒューマンのみに許された壮絶な破壊力。

アクトと対峙した脳無の脅威はこの世から消え去った。

爆豪と切島は脳無が迫ってきたと思っただけ目の前が光り、目を開けてみれば何もなくなっているという状況に思考が追いつかなかったのか、困惑していた。

第012話 事件終結そして闇が動き出す

ヴィランたちが消え、アクトは周囲を警戒しながら切島と爆豪の2人に近寄った。

「お前たち、ケガはないか？」

「えっと、加減？」

「何がどうなってる？」

「——おい、眼帯野郎。」

「さっきの脳無はどうした？」

切島はいまいち実感していないが爆豪は気付いたのだろう、苛立ちを籠めた目でアクトを睨んでいた。

「いちいち言わんとわからんか？」

お前が常日頃言っている事を俺が実際にしてみせた、ただそれだけのことだ」

ほとほと睨まれる日だと肩を竦ませたアクトは呆れ交じりに応えようと、オールマイトの元へと向かっていく。

「——っ!!」

「おいてめえ!？」

相手にされていないのに腹が立ったのか、爆豪はアクトに掴みかかろうとするが、その手は届かなかった。

「——おっと、俺らのご主人様に手を出しちゃいけねえぜ？」

爆豪の前にどこから現れたのか、大量の砂が壁となって現れたのである。

とつさに個性を使って爆破するが、弾けたところから砂の壁は修復されていく。

「おいおい、いくらクラスメイトだからって躊躇なく個性を使うとは中々イカレてるじゃねえの。」

せんざい…じゃなくて、ヴィランと紙一重なガキが雄英にいたとは驚きだねえ、シビュラシステムみたさサイコパス診断しねえの？」

「ハウンド2、日本じゃシビュラシステムの運用を認可していないからどれだけ精神が澱んでいようと最低限の社会性を持っていれば義

務教育は受けられるのよ。

あと監視官を守ったのはよくやったわ。

私がやったら彼が蒸発していたものね」

軽口を叩き合う男女の声が砂の壁の向こうから聞こえてきて、蚊帳の外と感じたのか、爆轟は余計にいら立って個性を発動した。

「ハブにしてんじゃねえよっ、てかお前ら誰だ!？」

態度の悪い爆豪に対し、ハウンド2と呼ばれていた女性は仕方ないとばかりに挨拶をした。

「貴方のクラスメイト、加減アクト特別監査官の部下、ハウンド2——リンジー・フロレンスよ。」

こっちのチャライのはハウンド4」

つんとした表情を崩さずハウンド2——リンジーは冷めた態度で最低限の自己紹介をした。

「紹介雑だぞおい」

「自己紹介くらい自分でしなさいよ」

「はいはいっど…ども、アクトちゃんの部下で執行官してますヴァーリ・ホワイトです。」

趣味は料理だけど、お前には食わさねえからな!!」

「誰が食うかよっ!？」

あからさまな敵意を見せるのは、ハウンド4と呼ばれた青年ヴァーリだ。

爆豪のアクトへの態度が気に入らなかったのか、聞きもしないのに特技の料理を食べさせないと宣言していた。

律儀にも爆豪は返答しているあたり、妙な礼儀正しさとチンピラ具合である。

デクたちは死柄木たちが撤退したことに驚いたが、その後によつてきた2人組——リンジーとヴァーリに対しての警戒を怠らなかつた。

日本のヒーローが着ているようなコスチュームでない、ラフなスーツ姿の2人はどこからどう見てもヒーローには見えなかったからだ。

「あ、あの…あなたたちは?」

「俺たちはアクトちゃんの部下のヴァーリつてもんだ。

こつちの性格ツンツンしてそうなのはリンジー」

「さっきの意趣返し?」

「そうだけど?」

意を決して、デクは2人に声をかけるとヴァーリは爆豪の対応をしながら答えていた。

リンジーがじろりと睨むが、気にした様子はない。

「無視すんなやこら!!」

「お、おい爆豪?」

こいつらヴィランじゃねえみてえだし、そんな氣い立てなくてもいいんじゃないか?」

切島が爆豪を宥めているが爆豪の怒りが鎮火する様子はない。

「援軍が遅くなって悪かったな、今頃俺たちの同僚とか英雄こごの学校の教師——ヒーロー様が来てくれるだろうから、もう安心して良いぜ」

「私たちは個性の相性的にいち早く乗り込んできたから、後続ももうすぐ来ると思うわ」

その言葉が聞けてほっとしたのか、デクは安堵して深いため息をつくと、ヴァーリに声を掛けた。

「か、加減君の部下って…もしかして、あなたたちもヒーローなんですか?」

ひ、ヒーローネームとか聞いても?」

砂を操る個性…凄い、周囲への警戒も同時にしているあたり、かなり汎用性のある個性だ。かつちゃんの攻撃も防いでいるあたり、防御性能にもかなりの性能を発揮できているどちらかというと支援型の個性になるのかな拘束するのもかなり有用だブツブツブツブツツ…」

「緑谷ちゃん、空気読んでほしいわ」

「うーわー、緑谷のやつ指折れてるのにぶれねえな」

蛙吹と峰田は緑谷の様子に呆れていた。

ついさっきまでこの場では命の取り合いが行われていた筈なのに、

危機が去ったと思えばすぐに自分の思いを優先している。

ヒーローの卵としてまだまだ未熟な証拠だが、この事件という試練を乗り越えたデクにとってはご褒美だった。

「なんか面倒そうなやつだな、あと俺ヒーローじゃなくて執行官…つつつてもわかんねえか。」

日本で言うところの警察、ポリスマンだぜ。

個性は…まあ見ての通り砂を操る個性だな、詳しくは守秘義務つうことで」

「け、警察？」

けど、警察は個性を使えないはずじゃ…」

日本においての警察は個性を全面的に使用禁止にしている為、使う事が出来ないことを知っていたデクとしてはヴァーリが当たり前のように個性を使用していることに驚いていた。

「アメリカじゃこれが普通なんだけどねえ…いちいちヒーロー呼ばねえと警察とか何のためにあるかわからねえじゃん？」

まあ、単純に俺たちの国にはシビュラがあつたから、ヒーロー云々のその辺りは融通が利いているってのもあるけどな。

あと、日本で活動するに当たって俺たちは限定的にだけ個性の使用許可は貰ってるから犯罪じゃねえから。

ま、アクトちゃん…俺たちの上司は未成年つてことで突っぱねられたから今回はヴィランどもが直接出張ってきてくれてある意味助かったぜ」

厳密にはヴァーリの言う警察はデクたちのいる日本の警察組織とは機構が著しく異なっていることを説明しないあたり、ヴァーリのデクに対する印象は間違っていないかった。

「さりげなく同盟国の批判しない」

「文化の違いを教授してんじやねえか」

「そのボロボロになっている男の人見せて、簡易的にでも手当てするわ」

「無視すんなよ!!」

「てめえもしてるだろうがクソ砂野郎!!」

爆豪が声を上げているが、あえて全員がスルーしていた。

リンジーが相澤——イレイザーヘッドへ応急処置を施していくとアクトとオールマイトの話が終わったのか、デクたちの下へとやってきた。

だが、オールマイトの表情は険しく、アクトは飄々として何やら先程の会話で何かあったのか解るほどの空気の悪さだった。

「緑谷少年、蛙吹少女に峰田少年も、無事でよかった!!」

爆豪少年も切島少年も、よく頑張つてここまで戻つて来れたね!!」

「オールマイト、ケガは大丈夫ですか!？」

「ああ、さっきのヴィランはなかなか強かったが、何とかかなった。

…加減少年の情報のおかげだな、本当に感謝している。

協力者の君たちにも感謝を」

「気にすることはないオールマイト、情報の共有とヴィランの処理はヒーローとして当然の行動だ。

クラスメイト達も無事に生還した、我々の勝利だよ」

誰にとつての勝利かをあえて言わず、試練に打ち勝った全員の勝利だとアクトはいけしゃあしやあとのたまった。

これが一体誰が原因でこの雄英高校で起きた事件なのかを知つての上での発言だとオールマイトは気付くと尚の事眉間にシワが寄つていた。

「では、私は戻るとしよう!!」

後続の応援が来るまで警戒は怠らないように、さらばだ!!」

そう言い残すと、オールマイトは飛び立っていった。

残されたアクトたちはやって来た後続のヒーローたちが来るまで中央に固まって待つことにした。

数分後、ヒーローと警察が続々とやってきてクラスメイトの救助、及びヴィランたちの逮捕が始まった。

1年A組にとつての長い1日が、ようやく終わろうとしていた。

生徒たちの救助、及び雄英高校へ侵入したヴィランたちの逮捕が終わると、急遽高校は全体放送で臨時の休校を告げ、生徒たちを下校さ

せた。

事情をよく知らない生徒たちは首をかしげながら下校していくが、残っていた生徒もいた。

「…それで、俺をこの場に呼んだのはどういう訳か、説明を貰えるかな、根津校長？」

会議室に呼ばれたアクトは、部下を連れてまるで査問会の如く待ち構えていた雄英側、警察関係者たちから発せられる圧迫感に対し気にした様子もなく、飄々としていた。

だが、この場にオールマイトがいないという状況に違和感を覚えたアクトは平和の象徴が一体どこで何をしているのかなど興味はない。大方、気になる生徒と話し込んでいるのかもしれないと適当な予測を立てていた。

「言わなくても分かっているんじゃないかい？」

いや、聡明な君ならそんな面倒なやり取りは必要ないと思っていたのだけど、勘違いだったかな？」

そんなアクトに対して、校長の根津は今回の一件についての詳細な釈明を求めている。

のらりくらりとかわそうとしているアクトに嫌味すれすれの言葉を告げるあたり、気が立っているのかいつもの朗らかさはどこかへ行ってしまうていた。

もっとも、姿がネズミ姿の根津の憤りが伝わってきたのはこの発言からだった。

「・・・それもそうか。」

では情報のすり合わせと行こうか。

もちろん、機密に関わることは当然だが開示できないのは了承してもらおう」

「構わないよ!!」

相澤君から聞いている事を知っているという前提で話を進めよう、一問一答形式でいいかな？」

「答えられるものは答えよう、こちらとしても情報は欲しいからな」

そこから、アクトたちとの情報の共有が始まった。

とはいっても、最初の質問がヴィラン——脳無の殺害の理由を詰問してきたあたり、アクトに対しての印象はすこぶる悪かった。

「こちらとしては最善の対処をしたに過ぎんな。」

確かに、イレイザーヘッドからのオーダーは生かしたままの捕獲だったが、それは緊急性が無かったから承諾したからだ。

戦闘中、ヴィランが突然生徒に襲い掛かったという事態でなければオーダーは守る予定だった」

「だが、君は火器を使用してヴィランの命を奪った。」

そのことについての釈明はないのかな?」

その質問をしたのは警察側の塚内という刑事だった。

「ないな、ヴィランの戦闘能力は生徒たちを殺害しうる一撃を持っていた。」

出遅れてしまった以上、素早く対処するにはこのドミネーターでヴィランを処理するのが最も確実に、生徒たちを守る行為だったと確信している。

加えていうならドミネーターでヴィランを丸ごと消滅させたこともあり、生徒たちがショックキングな映像を見なくて済んだというのは精神衛生上むしろ良いことだと思いがな」

「だがあれは過剰防衛だろう!？」

オールマイトから聞いたが、分子破壊砲だなんて通常火器より遥かに危険な火器を一個人が持つものではない!!」

「何故刑事である貴方がヴィランを気にかけるのか分からんな。」

いや、これも文化の違いというものなのか?」

「いやいや、アクトちゃん故郷日本ここでしょ?」

「ヴァーリ、黙って」

「ヴァーリ、静かにしている」

「なんかみんなして俺に対して対応きつくねえ?」

「二度目は無いぞヴァーリ、黙っている。」

部下が失礼したな、それで、そちらの要求を聞こうか?」

「ドミネーターの没収…はしない。」

だが、今後一切の使用禁止は約束して欲しい。

了承してくれるなら後日文書にしてそちらに送ろう」

ドミネーターの機能として火器としての性能を危険視している警察側は譲歩として使用禁止を提案した。

サイコパス判断という異国の判断基準で国内ヴィランの殺害という前例を作られた以上、今後一切そのような捜査をされる訳にはいかなかった警察としては、当然の要求だった。

「見返りは？」

アクトとしてはドミネーター使用出来なくなる事について特に反対する気はなかった。

アクトにとつて、使わないというメリットは都合が良かったからだ。

シビュラシステムはどう感じるかはおよそ予測できたアクトとしては、この条件を見返りに、警察側からどんな譲歩をもぎ取れるのか単刀直入に聞き返した。

警察関係者の彼らは外国の捜査官アクトの反省の見られない態度に腸が煮え繰り返っていたが、聞く姿勢を取っているアクトがこれから提示する条件を呑んでくれることを祈ったのだった。

塚内はこめかみに血管を浮き上がらせるも激高したりはせず、やはり求めてきた見返りについてこう返答した。

「警察情報の共有に、一部機密情報の提供。」

そして、ヒーロー公安委員会からは加減君：グッドスピード、君の限定条件下での個性使用許可証が発行される。

これでどうだろうか？」

塚内としてはこれ以上の譲歩はしなくなかった。

手札が多い訳ではない、アメリカ側へ出せる手札が限られる中で今すべてを出し切ってしまう、いつまでいるか不明な彼らへの牽制手段を無くしてしまう訳にはいかなかった。

「至れり尽くせりで結構なことだ。」

よほど日本での活動をそちらに合わせろという認識で構わないか？」

「君たちから見れば合理的ではないのだろうか、郷には郷を・・・返答

を聞こうか？」

一度シビュラシステムに判断を仰うべき状況だとアクトは考えるが、事前の指令には『現場指揮官の判断に一任する』という心強い一言があったのを思い出す。

だが、これは今後の捜査活動の身体にも関わってくる重要事項でもある、この場で仰ぐべき上司に相談もなく承諾しても良い問題ではない。

「・・・一度持ち帰らせてもらおうか。

悪くない条件だと理解しているが、こちらもやはり宮仕えでな

「わかった、では今回提案して文書を渡しておこう。

では次だが・・・」

この質疑応答は陽が落ちても続き、終わったのが20時までの長丁場となった。

小休止も挟まずこれだけの時間を過ごしたアクトは正門まで歩いていく。

「にしても、アクトちゃん悪者にされてたねえ。

ていうか、アクトちゃんあの塚内デカに嫌われ過ぎてない？」

「それは仕方ないわ、違法捜査をしたのは監視官なんだもの。

これで批難しないとなれば方々からのバッシングは確実に起こるわ。

個人的にもヴィランとはいえ人を殺した監視官へ敵愾心を向けるなどというのは難しいわよ」

ヴァーリとリンジーが先程までの話を思い出しながらアクトの護衛をしていた。

周囲への警戒は怠っていない、1日に2度の襲撃があるとは思っていない彼らだったが、何か起これば今度こそアクトの身を守ろうとしていた2人としてはやる気が有り余るほどぎらついていた。

「——お迎えにありがとうございました、こちらへ。

ギーノさんは先に帰って消毒と殺虫剤をする予定なので、今日は外食をする様にとの事でした」

雷銅がリムジンを正門に付けていた。

外交官ナンバーの付いたりジムジンとあって、近付く者は誰もいなかったが、気になるのかちらちらと見ている者はいた。

この頃には既にマスコミも殆どが帰っていたが、一部の報道関係者は出待ちをしていたのか、正門からアクト達に気付くとリポーターが近付いてきていた。

「帰るぞ、時間も遅いから今日の所はコンビニで弁当を買って帰るか」
「監視官の執事としては余り健康的でない食事は摂って頂きたくないのですが？」

アメリカにいた頃は高級レストラン（なお、原料は全てハイパークオーツ小麦in安全な化学調味料）での食事が主だったが、久々の日本ではアメリカにはなかったコンビニ——アメリカにコンビニはあるが24時間ではない——での食生活を気に入っていたアクトは何かと理由を付けては住居の近くにあるコンビニを渡り歩いていた。

「まあいいじゃないのよ雷銅ライトニング、たまにはさ？」

「久々の故郷なんですから、少しくらい羽を伸ばしてもいいと思うんですけど？」

その度に同伴しているヴァーリとリンジーもコンビニの魔力にやられていて、基本的にアクトの意見や行動に無条件で従う姿勢が更に加速していた。

「イエスしか言わない駄犬は黙ってなさい、これはドクターセルティからも再三言われていたことです。」

あんな保存料だの添加物山盛りの食材を食べるだなんて・・・ぼつちちゃんのサイコパスが濁ったらどうするんですか!？」

「坊ちゃん言うな、あと都市伝説を信じるんじゃない。」

それに、アメリカにいた頃だってヴァーリの作った料理を時々食べたが、数値に変動など無かったぞ」

興奮した雷銅がアクトを坊ちゃん呼びしている所で更にガソリンを投下したアクトにヴァーリの頬が引き攣った。

アクトが食べていたのはシビュラステム開始以前の現在のアメリカでは食べられない本物のハンバーガーやピザ、フライドチキン、

マカロニチーズなど高カロリーなものばかりだ。

およそ一日分のカロリー等度外視した料理を面白半分でヴァーリはアクトに振る舞っていた。

「アクトちゃん今このタイミングで言うのはちよおおつと拙くない？」

「……ヴァーリ、帰ったら覚悟してなさい？」

雷銅はヴァーリがアクトにしている事を察したのか、ヴァーリ限定で不穏な笑顔を向けていた。

「ほら飛び火したあ!!」

「雷銅さんそれは後にしましょう、マスコミが来ますからこの場から退避しないと」

この場合、自業自得としか言い様がなかったが、リンジーの一言で一時中断（終了とはアクト以外は思っていなかった）となったのだ。た。

「きみ、雄英高校の生徒さん？」

今日起きたヴィラン襲撃の……」

「飛ばせ雷銅」

「イエス、マイロード!!」

擦れ違いでリポーターからの声掛けをかわしたアクト達は夜の東京へと向かっていく。

結局、雷銅はアクトのコンビニ推しを退けることが出来ず——駄犬と呼ばれた2人は次と目で見ていた——コンビニの添加物盛り盛り弁当を食べることとなったのだった。

そしてその夜、外交官ナンバーの付いたリムジンがコンビニに駐車している小さな噂が立った。

——東京、某所。

雄英高校を襲撃した主犯——ヴィラン連合、死柄木と黒霧は逃亡に成功していた。

どこかのバーなのか、昔ながらのカウンターや壁にはダーツボードが掛けられ、奥にはミュージックボックスという前世期の骨董品が

あつたりと古臭さが目立つ部屋だった。

死柄木は今頃になって体の痛みが疼きだしたのか、腕組みをして必死に痛みを抑え込もうとしていた。

「完敗だ．．．脳無もやられた．．．手下どもは瞬殺だ．．．子供も強かった」

そしてなによりも、死柄木にとって重要な事は――、

「平和の象徴は、健在だった！」

ノンストップヒーロー、加減アクトの援護など無くとも、オールマイトは脳無を圧倒していた。

生徒たちを守った立ち回りも何度も見た映像と遜色ないほどの力強さと気迫だった。

「話が違うぞ先生．．．．．」

死柄木の声には若干の弱さが籠っていた。

『――違わないよ』

テレビ越しの声の主が、見通しが甘かったと反省すべき点を挙げた。

テレビ越しからはもう1人の老人の声も聞こえてきて、相手を舐めてかかっていた事に反省していた。

『ところで、ワシと先生の共作．．．脳無は？』

回収してないのかい？』

老人が気になったのか、黒霧に声を掛けた。

「1体は吹き飛ばされ、1体は完全に消滅してしまっていました。

吹き飛ばされた脳無にしても正確な位置座標を把握できなければワープといえど探せないのです。

何より、そのような時間は盗れなかった」

『そうかい．．．せつかくオールマイト並みのパワーしたのに．．．

まあ．．．仕方ないか、残念』

「パワー．．．．．そうだ」

死柄木は痛みを我慢している中ふと思いついたのか、ある少年を思い出していた。

「1人．．．オールマイト並みのパワーを持つ子供がいたな．．．」

『・・・・・・・・・・・・・・・・へえ』

「それに・・・それに、あの黒マント、マッドスピード!!」

あいつの邪魔が無ければオールマイトを殺せたかもしれない・・・
アメリカから来た虐殺者が!!」

死柄木がデクやアクトに毒を吐いている中、『先生』と呼ばれた人物は興味深かったのか、その少年の事を気に留めておくのだった。

『それにしても・・・グッドスピードか。』

まさかあの少年がこれほどの者になろうとはね。

弔、悔やんでも仕方ない!

今回の襲撃は決して無駄ではなかった筈だ。

精銳を集めよう・・・じっくり時間をかけて!!』

テレビ越しの『先生』は死柄木へ語りかける。

優しく、力強く、導くように、謳うように。

「我々は自由に動けない!

だから君のような“シンボル”が必要なんだ。

死柄木弔!!

次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!」

死柄木の眼に炎が灯る。

怒り、憎しみ、恨みを燃料に、混沌とした感情がぐるぐると瞳に渦巻いていた。

第013話 体育祭に向けて…

アメリカ大使館地下5階。

本来の設計図にないその地下に、アクトは本国にあるシビュラシステムへ日本の警察機構から提案された案に対しての対応を尋ねていた。

「俺としては受けてもいいかと思っている。」

個性の限定使用許可についても毎度高校へ連中を呼び寄せるのは手間がかかり過ぎる。

シビュラシステムについては日本側へ分からない方法がある以上、表面上は契約を守っていると思わせておけばいいだろう」

『——眼の使用はシステムの機密情報の中でもトップクラスの機密だ。』

軽率に使用されては困るな』

「困ってしまう程度で済むのなら安いものだろうか？」

電磁パルス攻撃でもしない、大使館を丸ごと吹き飛ばされない限り外部にバレることはない。

指向性音声で俺と交信する以上俺がこの事を漏らさない限り絶対にこの機密が知られることはない」

『——少し待て、全員で協議を図る。』

私個人としては賛成だが、他の皆がなんと言うかは不明だからな』
日本警察——日本政府からの意向を守る気はアクトとしては更々なく、『バレなければいい』といった精神で考えている。

これで彼のサイコパスに何の変調もないのが不思議だと彼の同僚は常々語っていた。

——待つこと10分、会話していた人物が戻ってきた。

『協議の結果を伝える。』

君の思う儘にするようにとのことだ。

日本からの抗議は全てこちらへ回すといい、こちらで処理する』
帰ってきたのはアクトの思っていた以上の結果が返ってきた。

要求の一部修正や、アクトへの制限を秘密裏に掛けるといった内容を持って帰ってくると思っていたからだ。

「まさかの白紙委任状とはな、何があった？」

『当初はシビュラシステムの素晴らしさを他国にアピールする為にもドミネーターは必要だという意見が2割ほどあったのだが、血生臭い功績が先に流布されてしまっているから効果は望めないのではないかという意見が5割もあったのだ』

残りの3割はというと仕事の所為で回答不可だったという。

血生臭いという言葉を強調した人物にアクトは「人選ミスだろう諦めろ」生暖かい目を向けたのだった。

「――局長、いやシビュラシステム。

^{オーダー}指示を寄越せ。

俺はお前たちと契約を交わした身だ。

故に俺の自由を尊重して貰う代償として、お前たちの意向は最優先で叶えなければならぬ。

情報網^{あみ}は順調に広がってきている、街頭カメラのハッキングも警察組織にバレない様仕掛けているが発覚している様子はない。

順調だ、あとは獲物が網にかかるのを待てばいい。

時間がすべてを解決してくれる。

命令を寄越しな我らが神託。

刑事としてではなく、アメリカ社会を守るヒーローとしてその任を全うさせてくれ」

『では、改めて指示を下そう、加減アクト。

アメリカ社会を――我々^{我々}シビュラシステムを更なる完全性を齎す為に』

――オール・フォー・ワン、彼を生かしたままシビュラ^{我々}システムの下へ連れてくるのです。

* * *

アクトが雄英高校へと登校したのは午後になってからだだった。

正門には相変わらず報道陣が待ち構え道を塞いでいた為、高校へと連絡し裏門から入ったアクトは教室を目指すのではなく、教員室へと向かっていく。

クラスは既に授業を始めているが、国が関わってくるとなれば優先度はこちらが上だ。

「失礼する、根津校長と面会希望だ」

「・・・加減か、遅かったな」

やってきたのは包帯でグルグル巻きにされたミイラ男——負傷した相澤だった。

右腕が折られ顔面もかなり出血していた相澤が既に職場復帰している事に若干の驚きを見せたアクトは笑って見せた。

「男前が上がったなイレイザーヘッド。」

少し前に本国との連絡が終わってすぐにやってきた。

担任として同席するか?」

「後から聞かされるよりは合理的だしな、それと、今回の一件はすまなかつたな」

敵意は感じられない、相澤からの真摯な謝罪にアクトは首を傾げていた。

「謝罪を受ける心当たりがなかったからだ。」

むしろこちらが謝罪しなければと思っていたアクトとしては出鼻をくじかれた形で若干の苛立ちを見せた。

間違っても自分の対応が遅れたというどうでもいい理由で苛立つた訳ではない。

「謝罪を受ける云われはなかったと思うのだがな？」

むしろ謝罪をするのはこちらの方だ。

ヒーローとしての要請を受けたにも拘らず全う出来なかったこと。

低い可能性とはいえ、クラスメイトにトラウマを植え付けて若い芽を摘むことになったかもしれないこと。

アメリカではともかく日本ではまずヒーロー免許停止といった処置、過剰防衛による傷害致死罪を適用されても仕方ないことだろう「アメリカではたとえ優秀な人間だろうと一度サイコパスが崩れて

しまえば例外は無く更生施設域が決まり、サイコセラピーという治療を受ける事となる。

「いや、元々は俺たち雄英側が警備体制を厚くした方が良いとお前から助言を受けていたにも拘らずあの事態が起きてしまったんだ」

一部アクトが引き起こしたマッチポンプもあつたというのに謝罪する相澤にアクトはこれなら素直に恨まれた方がましだと内心ため息をつく。

「そういう事なら・・・謝罪を受け取っておこう。」

「・・・ちなみにだが、精神的に不調になったクラスメイトはいたか？」

現場には居合わせなかった耳郎クラスメイトが脳裏に過ぎるが相澤は首を横に振って誰もいなかったと答えた。

尾白については人を焼くというスプラッタを何度も見せたこともあり、直後のサイコパスが若干上がっていた事が気がかりということもあつたのだ。

「まあ・・・緑谷が相変わらず負傷したくらいか・・・だが、意外だな。任務の為のついで、低レベルな相手をさせられていて苦痛だ・・・な認識だつたんだがな」

「その認識は強ち間違っていないぞ？」

とはいえ、今回は少なからず俺が関わっているからな。

僅かばかりの良心も疼くというものさ」

アメリカにいた頃に既に今の価値観が落ち着いていたアクトとしてはこの程度の事件でサイコパスは揺らぎもしなかった。

良心が疼く、それは嘘ではない。

ただ、疼いてもサイコパスが変容しない、それだけがアクトの精神の異常性を示していた。

「そういえば、今度開かれる『雄英体育祭』なんだが、参加出来そうか？」

既にヒーロー——刑事として活躍しているアクトとしては日本に居続ける訳でなし、日本のビッグイベントの1つに魅力を感じないのではと考えていたからだ。

「ヴィランがやってきてすぐなのにするのか？」

「今度開かれる『雄英体育祭』では念には念を入れて10倍の警備で雄英は盤石だということを見せる意味もあるらしい」

「質の方はどうなんだ？」

それと抜けた穴を突かれた場合はどうする？

イベントに現を抜かして各地でヴィランが好き放題・・・なんて無様なマネは起こらないだろうな」

「そこまで警察やヒーローも馬鹿じゃない。

限りなく隙を無くした警備体制で行われる」

アクトとしては参加よりもシビュラシステムからの指令遂行を優先したかったが、白紙委任状を渡されたうえ期限も定められていないため自由度は高い。

過密なスケジュールを立ててもいない為、参加することは可能だった。

参加したとして、問題は降ってくるわけだが。

何よりも、今回の一件で目星を付けた人物の足取りが途絶えてしまった事もあり、暇潰しには最適といえよう。

「ハンデが必要だな。

どんな種目にするかは知らないが、並大抵のことは俺の速さで何とかしてしまうからな。

せいぜい頭を悩ますといい」

アクトの言葉を参加すると受け取った相澤は席から立ち上がると、アクトと共に校長室へと向かっていく。

今後の協力体制について話し合いを行っていき、終わったのは放課後になった頃だった。

話し合いを終えて、アクトはこのまま帰ろうと思ったが、クラスメイトに挨拶をせずに帰るといふのは薄情かと思いい教室へと向かっていった。

「・・・なんだ、人がやけに多いな？」

通行の邪魔だと声を上げたアクトは首を傾げたが、1人の生徒が振り返ると悲鳴を上げた。

「ま、マッドスピード!？」

するとまるで預言者が起こした奇跡の様にアクトから遠ざかろうと廊下の両端寄った生徒たちを一瞥するも完全に無視した表情でアクトは教室へと歩いていく。

どうやらこの長蛇の列の目的は1年A組の様で先頭にいた生徒が数名クラスメイト達へ挑発的な態度を取っているのが見えた。

先頭集団はまだアクトには気付いていない。

「———どうやら面白い場に立ち会えたようだな」

アクトを見ただけで顔面蒼白になった生徒に白けていたアクトだったが、気骨のある生徒が少なからずいたようで、その男子生徒へ優しく肩を叩いた。

「あ・・・？」

ま、マッドスピード!？」

「たった数日で人気者になれたなクラスメイト諸君？」

当たり前のように蔑称で呼ぶ男子生徒にいらつとしたアクトだったが、クラスメイト達への挨拶を優先した。

「あ、加減だ!!」

「お前何授業サボってんだよ!!」

「クハハ、まあ許せ、仕事が入っていてな。」

それにしても、随分と暇な連中がわらわらと集まってきたものだな。

普通科に隣のB組、その他大勢が雁首揃えて我がクラスメイト達への敵情偵察か？」

笑ってクラスメイト達からの声を流すと、目元にクマを作ったぼさぼさ頭の生徒がねめつける様に睨んだ。

「また随分と偉そうなのが・・・ヒーロー科に在籍している奴はこんな**の**ばっかりか」

アクトは落胆の声を上げた生徒に向き直って、その生徒をじつと見

つめている。

「体育祭のリザルトによっちゃ、ヒーロー科への転科も検討してくれ
るんだってさ」

その逆も然り、成績の振わない生徒は見込みがないと除籍する担任
がいる以上、その可能性は大いにあると気付いたデクたちは顔を強張
らせた。

「少なくとも普通科俺は調子乗ってつと足元ゴツソリ掬っちゃうぞっつ

——宣戦布告をしにきたつもり」

すると便乗するかのように人だかりの真ん中あたりから、ヒーロー
科B組の生徒が声を上げた。

「ヴィランと戦ったからっつうから話聞きに来ただけだよおっ!!

エラく調子づいちゃってんなオイ、本番で恥ずかしい事なんぞ
!!」

不敵な発言の連続で固まりっぱなしのクラスメイト達だが、爆豪と
アクトは何ら脅威と思わなかった。

「・・・おい眼帯野郎、テメエとは本戦で白黒つける、それまでやられ
んじやねえぞ?」

「クハハ、誰に物を言っている?」

天と地ほどもある実力差に絶望させてやるから首を洗って向かっ
てくるといい」

爆豪はアクトの挑発的な発言に逆上して噛みついてこずに、教室か
ら出ていく。

アクトは爆豪の冷静さに評価を若干だが修正をした。

普段の触れる物全てに対して攻撃的な爆豪の態度を見てきたアク
トだったが、体育祭まで2週間前からの集中力の高さに性格に難はあ
れど短期間短期間にあれは化けると思わせる色相だったからだ。

爆豪を見送ったアクトは先程の宣戦布告をした生徒に向き直ると、
落胆したように溜息をつく。

「爆豪あれに比べてこいつらは・・・いつまで時間を浪費しているつもりだ
貴様ら?」

「なんだと・・・?」

「お前らはどこの科のどいつだろうと興味はない。

口先野郎が身の程知らずにツバを吐いてきた、その程度の存在が一丁前に宣戦布告とは片腹痛いにもほどがある、分際を知れ」

罵詈雑言をつらつらと冷静に浴びせるアクトにクラスメイト達が止めようとするが、アクトは止まらなかった。

「なんだと・・・？」

俺たちだって、あの入試試験じゃなかったら今頃・・・!!」

「出たな、ロクな努力もしてこなかった脆弱者の言い訳が!!」

なるほど、つまりお前の個性はヒーロー科入試試験にあったヴィランロボを撃破するに至らない攻撃性の低い、あるいは機械のような無機物に効かないだけで生物限定で効くような一発芸に近い個性という事か。

となると精神などに作用するような個性か回復系か・・・なまじ強個性だと未練も一際という訳か、やはり言い訳野郎の常套句だな、下らん」

徹底的に扱き下ろさねば気が済まないのか、舌の滑りは回転を上げ加速する。

「そんな個性ならば尚更肉体を鍛えなければヒーローになってから一年と持たんと想像がつかないか？

その個性がヴィランに効かなければ、貴様はその後どうするつもりだ？

まさかボサッと突っ立っている訳じゃあるまいな？

それならお笑い草だ、限定的な場でしか使えんヒーローなどカカシ以下だ!!

救助者を目の前にただ指を咥えて助けられるのを待つしかない、一般人の仲間入りだ、おめでとうこの役立たずめ!!

そして見るからに貴様、筋力トレーニングや格闘訓練といった荒事とは無縁の日常を送っているようだが、ヒーローになれば災害にヴィラン退治とあらゆる事象に対処せねばならんだぞ？

ヒーローはどんな職業かといえば一言で言って肉体労働だ、体力のない輩など二次被害者候補にしかならん、仕事の邪魔だ、害悪だ」

アクトに指摘されて心当たりがあったのか、想像の付いた生徒たちはばつの悪そうにアクトの言葉の刃に晒されて俯いていた。

一部の生徒は涙すら浮かんで、今にも零れそうな者もいた。

アクトに言わせれば、口撃程度で泣くとはその程度か嘲笑されるだけだろうが。

ちなみに、アクトのクラスメイト達はとばっちりを受け一部の生徒が両手で顔を覆っていた。

「妄言も大概にしておけ、人生をドブ川に捨てているという自覚のない愚か者どもめ。」

こんなところで地面と睨めっこしている暇があるのなら少しでも努力しましたという言い訳作りにも励んでいろ」

言い終えると、アクトは教室に入り耳郎に声を掛ける。

「響香、出るぞ。」

負け犬どもに用など無いだろう？

・・・どうした、泣きそうになっているぞ、何があった？」

どの口が、と耳郎も言うつもりはない。

単にアクトの剣幕に当てられて涙腺が緩んだだけだ。

とはいうものの、アクトの言葉に全て自分が当て嵌まっていないと言いつけるほどの自信もなく、少しばかり打ちひしがれていたのだ。

当のアクトは耳郎ほどの者が泣き掛けるほどの精神状態になった理由が1つしか浮かばなかったが、まさかと振り払った。

先程の暴言は彼女には当て嵌まらないと考えているアクトだが彼女を慰めにかかる。

一度気に入ってしまった人間に対して甘くなってしまうのはアクトの悪い癖と同僚から指摘されているが、やめられないのが悪癖というものだ。

「腹が減ったのか？」

以前言っていた美味いと評判のクレープ屋があったな、時間があるのなら一緒にどうだ？

何なら奢りだ、喜べ」

どこことなく傲慢さを感じさせる誘いに耳郎もクレープと聞いて心

が揺らいだ。

気になっているクレールプ屋の事を覚えてくれていたというのもあるが、拙いながらも自分に気を掛けてくれているという事が分かるアクトの心配りに先程の暴言についてはいったん棚上げすることにした。

「……………絶対、奢りだからね」

地の底から這うような、低音の暗い声がようやくく上がる。

反応した、と勝機を見たアクトは畳み掛ける。

「まかせろ、食べ切れなくなったら俺も手伝おう。」

それにもうすぐ体育祭だろう？

食後の運動も兼ねて見てやる、プロヒーロー監修のトレーニング、byグッドスピードだぞ？」

だから機嫌を直せ、と言わんばかりの表情に耳郎は先程のしんどかった思いはどこかへ行ってしまった。

「すぐにカバンにノートとか入れるから、少しだけ待って」

「無論だ、ところで、先程は何で機嫌が悪かったんだ？」

アクトの右目も万能ではない、簡易的な色相判定で相手の精神状態の把握こそできるが、精度に関してはまだ発展途上の道にあった。

「……………絶対言わない!!」

べーつと、恥ずかしげに舌を出す耳郎にアクトは「女は分からんものだ」と思考放棄したのだった。

——余談だが、爆豪よりもヘイトを稼いだアクトは精神状態の落ち着いた生徒たちに目の敵にされ、体育祭当日まで彼の写真が飛ぶように売れたというのは、本人のあずかり知らぬ話であるし、何に使ったのかは、それこそ買った者にしか分からない。

第014話 雄英体育祭開催 上

——東京某所

夜も更けた頃、アクトは部下を引き連れ夜の東京、それもスラム街に近い無法地区へと向かっていた。

ここに目的の人物オール・フォー・ワンがいるという情報を得た訳ではない。

今回はアクトに同行している日本政府——警視庁からの依頼で凶悪なヴィランの協力要請があった為だ。

「てーか、俺たち全員で行く必要がある？」

かじよー戦力だぜ、かじよー戦力。

アクトちゃん俺おねむだから帰ってもいい？」

不満の声を上げているのはヴァーリだ。

任務外の協力要請に律儀にチーム全体で協力するなど以前のアクトではありえなかったことだとふて腐れているヴァーリは戦線離脱サボを希望するが、速攻で却下された。

「——ダメだ、日本の警察と連携する為にも、まずはこちらからの誠意を見せなくてはならない。

信頼を勝ち取る為には結果を積み重ねていくしかない、今後は無理のない範囲で要請に対応する。

そうだな、塚内刑事？」

以前アクトとぶつかった塚内刑事はアクト達の監査役に抜擢された。

主席監査として彼はアクト達の個性の限定許可をその場で裁可を下す権限を持った、日本においての上司になったのである。

本来ならば明らかな越権行為だと認めない気でいたが、むやみやたらと日本政府と事を構えても余計な摩擦しか生まないと感じ取ったアクトとしては塚内のパーソナルデータの収集に専念をしつつ、こちらの都合に良い状況を作り出す為に裏で活動をすることにした。

現状チーム全体で協力しているが、要請をこなしていくうちにヴァーリの言った通り過剰戦力ではなく適正戦力を投入するよう促

していき、次第に1人、2人と数を減らしていこうと考えていた。

「その通りだ、加減捜査官。」

お手柔らかに頼むよ、こちらでも日本政府からしっかりと隠蔽^{フオロ}工作^ロして欲しいとプッシュされているからね」

トゲのある表現だということはこの場にいる誰でも分かっていた。

日本政府からもアメリカとの関係を維持、あるいは向上させる為の配慮^{ヒイキ}をして欲しいと警察庁から通達が来ていることが不機嫌な理由なのだろうとアクトは気付いていたが、口にする気はない。

「クハハ、あまりこちらの捜査妨害にならない程度に頼つてくれ。」

なんならイベントの案内係役でもいい、着ぐるみを着て一般人に風船を配る仕事も最高だな」

「監視官、私汗だくになるの嫌なんですけど・・・」

「ホクを使えばならないだろう?」

ギーノがリンジーのぼやきを慰めていたが、アクトとしては冗談のつもりだったので本当に要請が来ても断る気でいた。

「もうすぐヴィランが潜伏しているとされる場所だ、静かに。」

ここからはハンドサインで行動する、ゴーグル着用」

「へーい」

気の抜けた返事をするヴァーリを除き、塚内を含んだ全員がゴーグルを着用する。

実はこのゴーグル、塚内に渡したゴーグルだけ通信機能が壊れている不良品だった。

それに加えて、そもそもこのゴーグルについて、アクトは塚内に暗視^ゴグ^ーグ^ルとしか伝えていない。

ドミネーターが使えない以上、通信面において一部制限がかかった以上、必要な処置だった。

「———現時刻を以て、加減アクトに30分の個性限定使用許可を承認する」

ぼそりと、塚内は小声でアクトの個性使用の許可を下した。

たった30分の使用許可だが、アクトにとってはそれで十分だった。

「さて、今日も世界を縮めてしまおうか」

傲慢に宣言するアクトに、ヴァーリたちは遅れまいと付き従っていく。

「ああん？」

何だテメエら？」

「——グッドイヴニング良い夜だな、ヴィランども？」

さあ、蹂躪の時間だ」

この日、勢力拡大中だった人身売買組織『ハゲタカ』の本部は警視庁が協力要請をしていたアメリカ所属のヒーロー『グッドスピード』と共に解決したと速報がお茶の間を騒がせ、朝一番のニュースでアクトたちの活躍が報道された。

体育祭当日、雄英高校1年は今、どの学科も熱気に溢れていた。

先日のアクトの口撃を受けた生徒たちが雄英体育祭で一矢報いようとクラス総掛かりで鍛えていたのだ。

放課後もTDLと呼ばれるトレーニング場の使用権を巡ってクラス規模で軽い騒動が起きるほどに白熱している事態に偶然目にした委員長飯田が狼狽したほどである。

アクトに言わせれば付け焼刃の訓練など生兵法にしかならないと切って捨てられるのがオチだが、それ以上にアクトの物言いに反骨真が沸き上がったのか、ヒーローに向かない個性を持つ生徒までもが時間が空けばクラスメイト達とアイデアを出し合い、打倒アクトを掲げ団結していった。

「——言い訳作りに余念がない連中は？」

そんな事をするよりも学業に励めばよいものを・・・」

SHR中、飯田からの情報を聞いてアクトが思った感想がこれである。

ある意味爆豪よりもヘイトを稼ぎに稼いだアクトは無駄な努力をしていると切って捨てた。

それを聞いたクラスメイトもアクトの情け容赦のない物言いに一部が総毛だつていて、峰田に至つては「余計なことしやがつてちくしょおおおお!!」と絶叫していた。

「ほらアクト、意地悪なこと言わない。」

努力が期待通りの結果を生み出す訳じゃないけど、努力そのものを否定するような発言は良くないよ」

「ふんっ」

耳郎が窘めるがアクトが反省した様子はなかった。

アクトと耳郎は時間があれば共に訓練をしていた。

訓練中もペアを組んで効率よく個性の使い方を指導していき、普段のトレーニングメニューもアクト監修の元アレンジを加えていく。

食生活にも指導が入り、栄養学も強制的に学ばされた耳郎は気付かない内に部屋の本棚に栄養学の参考書が占拠していた。

とはいえ、劇的な変化はなく、体育祭にすぐにでも反映されるほどでもない。

だが、無茶をして体を壊すようなメニューではなく、長期的スパンで見たトレーニングを作成してくれたアクトに感謝した耳郎は万全の状態で体育祭当日を迎えた。

体操服に着替えたアクトたち1年A組は控室で緊張する者、くつろぐ者とでこつた返している。

アクトのメンタルはシビュラシステムの基準値でクリアブルー、正常値を維持しており教室下から見える喧騒を眺めていた。

門の外はテレビ報道関係者たちがセキュリティチェックを終え、指定された報道ポジションへと向かって行くのが見えたアクトはオリンピックに代わる高視聴率を叩き出すこの雄英体育祭に掛ける熱量に冷めた目で見ていた。

アメリカではこうした催しは殆ど——否、エリアストレス——その区画が人々のサイコパスに悪影響を与える度合を数値化したもの——が上昇するような催しはあまり推奨されておらず、粛々と定期試験をこなしてきたアクトとしては早く終わって仕事が出たいと内心でぼやいていた。

日本人の血の為せる業なのか、弱冠15歳にして仕事中毒者の言である。ワーカーホリック

「もうすぐ入場だぞ、準備はいいか!」

飯田が声を掛けると、クラスメイトの芦戸がヒーロースーツが使いたかつたところちていたが、公平性を期す為の一部の学科を除き、アイテムの使用許可は難しく、A組で申請が通ったのは青山だけだった。

「アクト、時間だつてさ」
「分かつている」

飯田の声が聞こえていたアクトも会場へと向かう為に席を立った。

耳郎もアクトの隣で若干だが呼吸の荒い様子が見られ、緊張しているのだろう。

コンディションの調整は老若男女と人それぞれだ。

自己完結するもの、人からの声掛け、大別するとこの2点に絞られる。

アクトは前者、耳郎は後者だった。

「——響香、力むな。」

普段のペースで行け、お前のパフォーマンスを十全に活かせば予選程度何とかなる」

「わ、分かつてる!!」

これでもこの2週間で個性の使い方にも幅が広がってきてるんだから」

「だったら自信を持って、震えているぞ?」

「む、武者震いだし!!」

「なら心配はないな、行こうか」

「——ありがと」

「気にするな」

気恥ずかしいのか、アクトの顔を見れない耳郎は小さくだが感謝の言葉を口にした。

それを少し離れた場所で見っていた峰田と上鳴は更に小さな声で話し合っていた。

「…知ってるか上鳴、あいつら、付き合っていないんだぜ?」

「ああ、知ってるぜ峰田。」

席が近くだとたまにあの甘々空間に巻き込まれて砂糖吐き出したくなるんだ」

「クツッ、チビでも顔が良ければモテるのか!？」

チクシヨオオオオオッ!!」

「いや、お前はまずエロを控えろよ」

好き勝手に言っている2人に気も止めず、アクトと耳郎は控室を出ていく。

少しすると轟が出久に宣戦布告をしている場面に出くわしたアクトは、いつもより闘争心むき出しな轟に若干の違和感を覚えつつも、開会式の時間を待った。

「——加減、今いいか？」

すると、轟が出久との話を終えたのかアクトに声を掛けた。

アクトは轟の方へと振り返ると、その表情を見て何が言いたいのかすぐに分かった。

「どうした轟、デクへの宣戦布告の次は俺もか？」

「ああ、緑谷については伝えているが、お前にもと思っとな。」

個性把握テスト、はじめての模擬戦闘、その後の授業でも他の追隨を許さないその圧倒的なセンスと個性。

現状、最大の壁はお前だけだからな」

「おいおい轟、まるで俺の個性が強いからお前を圧倒したような言い方はよせ。」

俺の個性が圧倒的に見えるのは、それに相応しいだけの努力をしたからだ。

もちろん才能という点も考慮するが、それにしたって俺が一番よく知っている。

お前のような甘っちょろい制限しているガキが分不相応な対抗意識を持つのは止めてほしいものだな、不快だ」

触れたら切らないとすまない妖刀なのか、アクトの口撃は遂にクラスメイトにまで標準を合わせて発射された。

直撃した轟本人からすれば、触れられたくない心の内への急襲に心が瞬

時にざわめいた。

「…なんだと?」

表情に陰しさも加わった轟に、不穏な空気を感じたのか、切島がアクト轟の間に割って入った。

「ちよつ、待ってってお前ら!!」

開会式前でカリカリしてんのは分かるけど落ち着けて!!

お互いに不用意な発言はよせよな!」

「切島、そのの現在進行形で反抗期のガキと俺を一緒にするな。

俺は至つて落ち着いている、その身の程知らずが不遜にも挑戦状を叩き付けようとしてきたから身の程を知れと払いのけた、ただそれだけのことだ」

「てめえつ!?!」

遂に逆上してしまった轟に慌てて切島がアクトから離し、我に返つた耳郎もアクトを轟から距離をとるように離れた。

「はあ、これだから強個性とばかりに慢心したバカは救いようがない。

欠点を補える個性を持つていながら、それを研ぎ澄まそうともしないとは…」

「アクト、開会式が始まるまで暇だからって人が嫌がることしない」

「そういうな響香、あれは煽り耐性のない轟が悪い」

「嫌なことを直接突かれたらそりゃ怒りもするよ、ワザとな分アクトの方が悪いね」

「…ワザとではあるが言ったことについては不当なものではないから、やはり俺は悪くない」

「頑固だなあ…はあ」

アクトから見て、轟という男は初対面の時から気に入らなかった。競争心を持つことは悪いことだとは思わない、アクトには縁がなかったが、互いを高め合うという行為は爆発的な成長を生み出す。

最初はアクトも轟のことを競争心の強い増長したガキと思っていたが、次第にその評価は変化していった。

轟の視線の先に、クラスメイトではない何かが映っているように感じたのだ。

しかも性質の悪いことに、その目つきは大よそヒーローを目指すがしてはいけない類の、いわゆるマイナス面に直結した代物で。

「何にイラついているかは何となくだが予想はついている。」

だが、目の前の競争相手を無視して…当然のようにマナー違反をした相手に尽くす礼儀はないぞ」

「ん？」

アクト、なんか言った？」

『雄英体育祭!! 我こそはとシノギを削る年に1度の大バトル!!』

「いや、なんでもない。」

…時間だ」

プレゼントマイクのアナウンスが響いてくる。

耳郎はアクトが何か言っていたと思いきや声を掛けたが、そっぽを向いてしまったアクトがそれ以上口にすることはなかった。

雄英体育祭が、始まろうとしていた。

第015話 雄英体育祭開催 下

雄英体育祭開催2週間前。

オールマイトとその個^{ワン・フォー・オール}性を継承した少年——緑谷出久は相談室で面談という形で落ち合っていた。

オールマイト——大衆に見せている体長220センチという巨漢はそこにはなく、上背だけ高く、病的までに痩せ細った枯れ木のような姿がそこにはあった。

オールマイトの真実——活動限界が更に短くなった事を告げるとデクは先の戦いでの不甲斐なさに俯いてしまう。

だが、オールマイトはそんな事よりも身近に迫った危機があると告げた。

言わずともデクにも分かった、雄英体育祭の事だ。

オールマイト曰く、次代の後継者たる平和の象徴、緑谷出久がきたという事を世に知らしめよ、と師からの言葉にデクは「はあ」と気の抜けた返事をした。

USJ襲撃から直後という事もあり気が乗らない、オールマイトという偉大なヒーローから注目されているという事もあり、世に知って欲しいと言うモチベーションが低いこと。

そしてなにより、現状世に自らを知らしめる事が出来るのかという疑問が過っているデクの心中は総合的に今回の体育祭に対してイマイチ乗り気でなかった。

「ナンセンス界じゃ他の追随を許さないな君は!!」

そんなデクの反応にオーバーなりアクションだが、ひっくり返ったオールマイトは思わず声を上げてしまう。

「な、ナンセンス界……」

オールマイトはデクの戸惑った姿にに今度は嘆息すると、一つの助言を口にした。

「常にトップを狙う者とそうでない者……その僅かな気持ちは社会に出てから大きく響くぞ?」

気持ちわかるし私の都合だ・・・強制はしない。

ただ、今年は事情が大きく違ってきている、何か分かるかい、緑谷少年？」

助言を飲みこんでいくうちに質問が来て突然の事に詰まったデクだったが、すぐに答えは導き出せた。

アメリカからの来訪者。

悪名高く鮮烈で苛烈なヒーローにして警察官――、

「加減君：プロヒーローにしてノンストップヒーロー、グッドスピードがいる」

その答えに、オールマイトは痩せ細った身体に鞭打って、全身をしならせるように飛び上がる。

「そう、現役プロヒーローが体育祭に参加するという事態、しかもアメリカじゃトップの知名度を誇る彼がいる事だ!!

既にマスメディアも新聞の記事は決めているだろう!!

圧倒的パフォーマンスを見せる加減少年――グッドスピードにね!!

そして彼にかかれば1年ステージなんてお茶の子さいさい・・・これこそ赤子の手を捻るかのようなワンサイドゲームにしかないだろう!!」

それは容易に想像できて、プロヒーローだから当然とデクは思っていたが、オールマイトは違っていた。

「彼は素晴らしいヒーローだ、どんなに血塗られた道だろうと走破するという覚悟。」

いまだその手の内を見せない底知れない智謀、それを巡らせるセンス。

そして何よりも・・・圧倒的な戦闘力。

ビッグ3と呼ばれる英雄高校が誇るトップクラスの生徒なんて目じゃない、プロヒーローと比べても飛びぬけて優秀なヒーローだ」

「オールマイト・・・」

デクは分かっていた、オールマイトが彼を絶賛するだろうことは。同年代よりも遥かに高みにいる彼はこれまで見たヒーローの中で、

ある意味オールマイトすらも強烈な個性を持った少年だ。

オールマイトの後継者は、元から無個性だった自分よりも才能の塊、まるで神が丹精込めて作り上げた芸術品のような彼にこそ相応しい物ではないかという不安が過る。

「緑谷少年——たとえば先に加減少年と会ったとしても、私は彼を後継者には指名しなかっただろう」

諭すようにオールマイトはデクにアクトが自らの後継者として指名することはないと断言した。

加えて理由を告げようとした時、相談室の扉が勢いよく開かれる。

「——次代の象徴にしてもアメリカの二の舞になるということが分かっているからだ。」

そうだろう、オールマイト?」

完全な不意打ち、絶対に知られてはいけない密談の場に現れたアクトにオールマイトとデクは驚愕して開いた口が塞がらなかつた。

相談室の扉の鍵を閉めていないオールマイトの不備といえなくもないが、そもそもどうしてこの密談の場が分かつたのか、そして何よりもどこまでの事情を知られているのか、不明なことに、オールマイトは不健康な表情をさらに蒼白にさせる。

そんな様子をお構いなしに、相談室へと侵入を果たしたアクトはいえデクの隣に座ると彼のポケットからあるものを取り出した。

「前から二人の仲が怪しいと思っただけだ。」

少しばかり張らせてもらった」

「は、発信機?」

そんな、いつから……」

「やられたね……」

一生徒がヒーロー界の英雄、オールマイトに食事を誘われる。

そんな奇異な場面を見てしまったのは、怪しいと思わないのは無理があった。

これまでもオールマイトはクラスの授業に時折顔を出したり、隠れて授業風景を眺めていたことを思い出し、アクトはこのクラスの中にオールマイトと密接な関係を持った生徒がいるのではと推測してい

た。

穴だらけの推測だが、可能性が皆無ではないと判断したアクトは一部の生徒の衣類に発信機を潜り込ませて監視していたのだ。

そしてこの状況に居合わせたのである。

完全な違法捜査であることは明白だ。

このことを警察へ報告して立場を悪くすることも可能だが、おそらくは一時的なもので弱味だけが掴まれてしまうだけの状況になってしまう。

何よりも彼はアメリカからやってきたヒーローだ、自分という存在が世間で認知されている以上に不安定な存在であることを他国のヒーローに知られてしまうのはよろしくないというのは賢くない自分の頭でも分かった。

それは避けたい、オールマイトは思わず厳しい目でアクトを睨んでしまう。

「怖いな、天下のオールマイトにそんな目で睨まれるとは。

心配しなくてもこのことを本国へ報告する気はない。^{アメリカ}

この場に来たのは、ただの捜査の一環だ」

その天下の英雄に睨まれたアクトは飄々とした様子を崩そうとはせず、苦笑しただけで話を進めていく。

「デクにはあまり関係のない話だが・・・後継者となれば知っておいても損はない話といえるか？」

・・・いや、能力的にはまだ足手纏いの枠から抜け出せていないし、イレギュラー要素は無くしておいた方がいいか。

オールマイト、デクは話から外してもらってもいいか？」

明け透けにアクトはこの会話にデクを加えるデメリットを考え、席から外れてもらうことにしてオールマイトに声を掛ける。

オールマイトとしても、どんな話題かは知らないが少なくとも現状のデクに話せる話題ではないと気付いて、苦々しい表情をデクへと向けた。

「緑谷少年、すまないが・・・」

「わ、わかりました。」

僕は席を外しておきますね・・・」

「すまないなデクよ、この件の埋め合わせはまた今度させてもらおう」
「う、うん・・・」

アクトはデクに謝罪の言葉を口にして、デクも浮かない顔をして相談室から去っていった。

それからの話をデクは知らない。

話の内容を知ったのは、それから随分先の話であった。

『どうせてめーらアレだろうこいつらだろう!!?』

『ヴィランの襲撃を受けたにも拘らず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!』

『ヒーロー科!!! 1年!!! A組だろおお!!?』

プレゼントマイクの声が入場口から聞こえてきて、A組の生徒たちは入場したと同時に爆音に襲われた。

1年の部を見に来た観客たちの歓迎の拍手を浴びて、デクは目を回しかけ、一部を除いて圧倒されていた。

観客席は見渡す限り一席も見られず、生徒の家族、プロヒーロー、そしてメディア関係者でごった返しになっている。

「わああああ・・・人がすんごいっばいだあ・・・」

デクの言葉の通り、どこを向いても人、人、人が自分たちを見ている。

これまで何度も雄英体育祭を見てきた自分が見られる側に立っていられようとは去年まで考えていなかったデクの心境は嬉しさと不安が緋い交ぜに混ざり合い、汗になってシャツをじわりと濡らした。

「大人数に見られながら最大のパフォーマンスを発揮できるか・・・!!
これもまたヒーローとなる素養を身につける一環なんだな」

「めっちゃ持ち上げられてんな・・・なんか緊張すんな・・・なあ爆豪!!」

「しねえよ、ただただアガるわ」

続けてヒーロー科B組、普通科、サポート科、経営科と入場していき、主審の教師が朝礼台に上がる。

校長の根津は毎年3年の主審をしている為この場には現れず、18禁ヒーロー・ミッドナイトが今年は主審を務める事となっていた。

上下の白タイツに改造ボンテージに着てアイマスクという扇情的な姿に加え、手にはムチという昼間のお茶の間的に完全アウトなヒーローが現れ常闇が『18禁なのに高校に居ていいのか』と呟いていた。

実はこのヒーロー現在のコスチューム以前は更に過激な姿で活動をしており、一時期社会現象（おもにエロス方面）を起こしたその筋では有名なヒーローである。

煩惱塗れの峰田としては大歓迎で予選が始まってもないのに興奮しきっていた。

『静かになさい!!! 選手代表!!!』

『学年首席 加減アクト!!!』

ミッドナイトの言葉にある普通科の女生徒は最初、『ヒーロー科入試の選手代表だろう』と聞いていたが、ふと我に返りミッドナイトが言った言葉を心の中で反芻した。

すなわち――、

「――この度は日本とアメリカの国際交流も兼ねた体育祭となり、その第一例に名を刻む荣誉に深く感謝するとともに、アメリカプロヒーローとしてその名に恥じない戦いをすることを誓います」

普段から毒を吐くことを日課にしているような存在が何食わぬ顔でネットで拾ってきた^{ひんしゅく}響感を買わない程度の適当な選手宣誓をアクトは行っていた。

平坦な、特に強い感情移入のない薄っぺらい選手宣誓だと相澤はため息をついていたし、主審のミッドナイトも『青くないわー』と期待外れの宣誓に詰まらなさそうに見ていた。

学年最優秀生徒だけが呼ばれるその称号を海を越えてやってきた^{アクト}留学生が搔つ攫っていった事に気付いた生徒たちは驚愕の声を上げたが、お茶の間の視聴者たちにはわからなかったが彼をよく知る部下たちはそれぞれ複雑な表情を浮かべていた。

「そして個人的な宣言だが——言い訳作りに余念のない諸君、『僕は頑張ったけど相手はあのプロヒーローグッドスピードだからダメだったよ』という練習はしっかりしてきたか？」

先程の感情の籠っていない平坦な声から一転、相手を遥か高みから見下ろしていますと言わんばかりの感情を込めた発言が降ってきた瞬間、ヒーロー科を含めた全て学科の生徒の殆どが爆発した。

「調子乗んなよA組オラアアアア!!」

「何故品位を貶めることをするんだ!!」

「マッドスピードマジマッド!!」

「そつちこそ恥かく覚悟してきたかコラアアア!!」

聞けば聞くほど鬱憤の溜まっていた生徒たちからの罵詈雑言が飛んでくるがどこ吹く風の表情の元凶は飄々^{アクト}と受け止めていた。

ここでもA組は纏めて標的にされてたまったものではなかったが、爆豪だけは気にせずアクトを射殺さんばかりの目で睨みつけていた。

「クハハハハ、結構結構。」

俺はこれでもプロヒーローだからな、それなりの技術や戦闘力を持っている以上、アマチュア以下の輩に本気を出すような大人げないことはしない。

精々慢心している俺ののど元にその刃、突き立ててみる!!

命懸けならその鈍ら、この身に届くやもしれんからな・・・フハハハハハ!!」

後半から完全に悪役のセリフなのだが、似合ってしまったのはヒーローとしてはどうなのかというレベルでお茶の間に映っているアクトは『ヴィランっぽいヒーローランキング』上位入賞間違いなしの一幕だ。

「どんだけ自信過剰だよ!!」

「この俺が潰したるわ!!!」

「その傲慢、打ち砕いてみせましょう・・・」

「ブッコロス!!」

そして更にヘイトが溜まっていく、大よそヒーローがしてはいけないう目つきになってしまいう生徒が若干名出てきているのを察して、ミツ

ドナイトが予選の説明を始めた。

「さて、それじゃあさつそく第一種目行きましようか!!

毎年ここで多くの者が涙を飲ティアドリンクむわ!!

今年の第一種目は・・・!!」

ミッドナイトが指差した先——巨大な液晶ディスプレイが第一種目『障害物競走』と映し出した。

「計一クラスでの総当たりレースよ!

コースはこのスタジアムの外周約4キロ!」

ミッドナイトが妖しく笑う。

入場位置が液晶ディスプレイに映し出され、入場門が開かれています。

「ウフフフフ・・・我が校は自由さが売り文句!

コースさえ守れば、何をしたって構わないわ!」

それはすなわち、雄英高校入試でアンチヒーロー的な行為が禁止されていた時と違い、明確な妨害をコースを守りさえすれば許可するという、主審からのお墨付きであった。

それを聞いた生徒たちの視線がある方向へと向かう。

視線の先には不敵に笑うアクトがいた。

「そして特別ルール!!

今回参加している中で唯一のプロヒーローである加減くんにはハッデが課せられるわ!!

1つ、手足に10キロの重りを付けること!!

2つ、最後の選手がスタートゲートを抜けて5分後に開始すること

!!

3つ、相手選手に直接触れないこと!!

以上のルールよ!!

もちろん他の生徒たちにはコースを守る以外のルールはないわ!!」
アクトの写真がディスプレイに映し出され、次いで特別ルールがその横に点灯されていく。

写真写りの悪さからさながら指名手配犯の写真とその特徴を映し

た光景に見えて、部下が大爆笑しているのが聞こえた。アクトは保護者席にいるヴァーリを睨むアクトだった。

アクトとしても、これくらいの手土産がなければまともな戦いにならないのは知っていた為、拒否的になることもなく受け入れた。

ミッドナイトが選手たちをスタートゲート前に集まるよう伝え、予選開始1分を切ったところで、ミッドナイトがアクトに近付いてきた。

「プレゼントマイクからあなたについて預かってきたわ」

「これは・・・マイクとイヤホン？」

「特別ルールという訳じゃないけど、貴方にも特別実況として加わってほしいのだから、嫌なら持って帰るわよ？」

「いや、開始まで愉しくなるだろうからな、受け取っておこう」

アクトとしては暇潰しの一環になればと思い受け取ることにしたが、これがその後ラジオ番組を運営する会社からオフアーを受け『グッドスピードの一刀両断相談室』あなたのお悩みをサクサクざっくり最速で解決します」という一部のマニアから大歓迎のラジオ番組が出来るとは、今のアクトの予想の範疇外のことだった。

予選開始のランプが1つ、2つと赤くなる。

「さあ、俺を楽しませてくれよ、諸君」

——スタート!!

予選開始と同時に、スタートそっちのけでアクトに襲い掛かる生徒たちがいちがいた。

第016話 予選

開始直後、アクトは選手たちに奇襲を受けた。

襲撃した選手の大半は普通科や経営科、サポート科といったヒーロー科以外が同盟を組んで体育祭そっちのけで2週間前にさんざん扱き下ろしてくれた怨敵アクトを討ち取らんと反撃を一切許さない波状攻撃でアクトを足止めせんとしていたのだ。

今回体育祭で設けられた特別ルール、アクトに課せられたハンデを十分に利用すべく、一秒でも長くゴールを潜り抜けまいと必死の抵抗をみせていた。

集中砲火を浴びるアクトといえればゼロファイールドを展開したまま襲撃してくる選手たちの個性による弾幕を停止させて盾にし、あるいは軌道をずらして消極的な自衛をしていた。

『第一種目は障害物競走!! この特設スタジアムの外周を1周してのゴールだぜ!! ルールは簡単、コースアウトさえしなければ何でもありの残虐チキンレースだ!! 各所に設置されたカメラロボが興奮をお届けするぜ!!』

『おい、実況こに俺れいらないだろ』

『解説はこの俺プレゼントマイク& a m p ;ミイラマン!! そしてそして特別ゲストとして参加選手の1人にしてプロヒーロー——』
『——グッドスピードだ、よろしくお茶の間の諸君。本日はなるべく血生臭いシーンは一切無しのクリアな映像をお届けさせて頂こう』

『よろしくうっ!! ところでグッドスピード、開始と同時にお前レースそっちのけで選手たちに襲われてるけど、めっちゃ冷静だな!!』

『人気者はつらいな、どんな反撃ファンサービスをしようか考え中だ』

『視聴者リスナーが卒倒するような刺激的なシーンは勘弁してくれよ!』

『大丈夫だ、問題ない』

『問題しかないぞこの実況・・・』

相澤の不安をよそに、先頭は轟を筆頭に第一関門を少しずつだが着実に突破していく。

第一関門、雄英入試にも現れたヴィランロボ、その筆頭——0ポイントに該当していた超巨大ロボット、通称ロボ・インフェルノが選手たちに立ち塞がる。

A組は実戦経験を積んだ成果が早くも表れているのか、他クラスよりも一歩早く突破する生徒が多く突破していく。

所変わってアクトは未だスタートゲートを潜り抜けず攻撃してくる選手の対処に追われていた。

特別ルール上、アクトは直接選手に触れる訳にはいかず、現状スタートを潜り抜ける事すら出来ていない状況だ。

本気を出せば5秒と掛からず攻撃してくる選手——およそ100名を殺戮することも可能だが、ここはアメリカではない、おおっぴらに潜在犯を殺戮するような選択肢は最初から除外される。

相手の体力の限界まで相手にするのを待つのが狙い目であるかもしれないが、襲撃に参加している選手の中にもヒーロー科に落ちた者もいてそれなりに鍛えている者も多く、最低でも10分も持ち堪えられるとアクトのプロヒーローとしての実力を疑問視される懸念も低い確率だが出て来ると考え、この案も除外した。

残された選択はただ一つ、

「——ゼロフィールド、領域最大展開!!」

「ちくしょう、体が動かかねえ!?!」

「あああつ、コースアウトしていつっちゃう!!」

「まだ戦えるのにいいいいいい!?!」

ルール違反をせず、生徒たちに退場してもらおう事だった。

直接接触してルール違反をさせようとする接近する選手を皮切りに、フィールドに触れた者を領域制御下においてスタジアムの選手席に向けて適当に放り込んでいく。

少しでも領域内で走りでもすれば後はこちらのもので、コツを掴み

始めると更に処理速度を上げていくアクトにプレゼントマイクの実況が響いた。

『おおっと!!? なんてこった!! ついにグッドスピードの反撃が始まったぜ!! 瞬きする間に1人2人と選手席に放り込まれてコースアウトしていくう!! 明らかに軌道とかおかしいんだがそれでも選手はコースアウトしていく、直接触れられないという特別ルールの穴をついた頭脳プレイが炸裂だぜ!!?』

『頭脳プレイとはあまり言えないな、正直この程度アメリカ本土のカリキュラムより楽だぞ』

『答えられる範囲で教えて欲しいんだが、アメリカのシビュラシステムの出される試験はどのくらいの難易度なんだ?』

『そうだな、日本で例えると・・・自衛隊の特殊部隊クラスの戦闘能力を持ったドローン1個中隊と時間制限つきで全機破壊する戦闘訓練とか、無人島に道具を現地調達して1ヶ月生活するサバイバル訓練があるな。ちなみに俺は全て最高評価だ・・・こういう時、『ドヤ顔』とさえいいと部下が言っていたのだが、ドヤ顔とはなんだ?』

『シビュラシステムこっわ!!?!! ヒーローというよりバトルマシーン作ってるぜ!! ヒーローの本場が世紀末だなんてシビュラー!!?!!』

『アメリカは人口の割にヒーローの数が限られている分シビュラシステムが管理している戦闘用ドローンも配備されているからな。その戦闘用ドローンに不測の事態が起きても対処できる人材育成の為に想像を絶する訓練を課しているんだろう。参考になるか分からんが、そのうち学校のカリキュラムの参考になる課題がないか聞いてみたいものだな、あとドヤ顔についてはネットで検索しろ』

「こうなりや一秒でも長く時間稼ぎを・・・!!」

「距離を取れ、フィールドから離れて更なる時間稼ぎを!!」

「全てはグッドスピードに赤っ恥を掻かせるためにいつ!!」

自分たちは努力したがそれでも目の前のアクトには敵わない。

彼我の実力差を最初から気付いていた選手たちだがそれでもやめ

なかったのは意地があつたからだ。

この場に残つた彼女らの殆どが中学受験時、ヒーローには向かない中途半端な個性だからとヒーロー科を受験せず箱付けも兼ねた英雄の普通科や経営科を受けたという引け目があつた。

それを知つてか知らずか、アクトは『それは間違つている、勝手に諦めて逃げ出したお前たちが悪い』と言葉を選ばない物言いは悔しさと、かつての夢を思い出すきっかけとなつた。

幼い頃の自分は無邪気に将来自分はヒーローになつて家族を、友人を、そして見知らぬ人たちを助けるんだという夢があつたことを。

たつた2週間で劇的な変化が起きるなど寝ぼけていない。

だけど、せっかくの機会を最初から諦めて逃げ出すなんて無様を、自分の人生にこれ以上重ね塗りしない為に全力で立ち向かうと決めたのだ。

一部努力の方向性を間違えた者もいたが、激しい抵抗を続ける選手たちも次第に数を減らしていき、そして――、

『スタートゲートを抜けてないグッドスピード以外の最後の選手がコースアウト!! 特別ルールにあつた全ての選手がゲートを超えて5分後に出発の条件を誰にも触れることなくクリアしたぜ!! 現在スタートして4分を過ぎたところだが・・・1位の轟は既にコースを半分超えて第二関門に到着!! ここから5分後となると予選通過は厳しいかもしれないがそこはどうだいグッドスピード!』

『クハハハハッ!! 十分なハンデだ、お茶の間の視聴者に怒涛の展開をお届け出来そうで演出にも手が抜けないな!!』

『全く意に介さず!! この男追い詰められている筈なのになんだこの傲慢さは!! ちなみに俺はこの状況下だと絶対に予選落ちしちまうな、ミイラマンどう思うよ!』

『グッドスピードの個性は早さに由来した個性だからな、体力次第じゃ4 km程度の距離を難なく突破出来るだろう。ただTV的には恐らく残像がギリギリ映るか土煙しか映らない面白くないシーンにしかならないだろうがな』

全ての選手を場外送りさせたアクトは真つ新にしたスタートゲ

トからモニターを優雅に眺め、スタートまでの5分間を待つことにした。

勿論プレゼントマイクとの実況も忘れない。

参加選手にも拘らず、レースの実況をモニター越しにしているアクトは爆豪の言葉を借りると『舐めプ』としかとられない状況だ。

距離は見る見る離されていく、先頭にいる轟、そして徐々に距離を詰めていく爆豪、そして3位集団をしり目にアクトは呑気に実況をしていた。

『1位の轟選手はやはり個性の使いどころが上手いな、第二関門がまるで意味を成していない。自分を十全に活かせる環境、舞台を作り出すのもまたヒーローに必要な要素だ。それを追いつかんとペースを上げている爆豪、彼もまた爆風を活かしながら空を滑空するというのは並大抵の練習量では実現できなかっただろう、空中戦というのは数あるアドバンテージの中でも最上位に位置する要素だ。それをあの年で実用レベルに持ってきているというのは日本のヒーローの卵は粒ぞろいだな。3位集団もそれぞれ自分のペースを保って予選を勝ち抜かんとゴールを目指しているようだ、それぞれ自分の個性を活かしてペース配分にも気を使っているように見える、大変結構だ。4位集団は・・・ほう、なるほどな?』

『賞賛の嵐!! 丁寧なコメントと俺の言いたいことほぼ全部言われていることねえ畜生!! ちなみにヒーローにおいての環境設定とかについてグッドスピードはアメリカではどうだったんだ?』

『無論出来ていた、個性の応用で空中戦も可能な俺は街への被害を最小限に潜在犯——日本でいうところのヴィランだ——を逮捕等していた。俺の個性は極めれば汎用性は増していくからな、戦闘、救助、災害対応と俺の活躍の場は留まるところを知らんだ、ドヤア』
『——おい、予選中にネット検索するのはよせ、あと使い方間違っているぞドヤ顔』

相澤に指摘されて仕方なしにネット検索をやめて思索を続ける。

轟焦凍——現在1位を走る少年の個性の汎用性の分析だ。

1年次において頭2つは抜きん出た逸材、少々雑さも見られるもの

の、特大の原石であることはまず間違いない。

——サイコパスの濁りさえなければ、是非ともアメリカにスカウトしたい人材なのだが。

渡米する前から知っていたが改めて情報収集して詳細に調べて分かった事だが、轟にはエンデヴァーというヒーロー界トップクラスの父親を持つがいて、その下で虐待としか見られない訓練を個性が発現した頃から続けてきていたらしい。

その常軌を逸した訓練に母は夫を諫めるも効果はなく、次第にその母も心を病んでいき自らの子供——轟に煮え湯を浴びせたという。

左目周辺の痣がその証拠で、それがきっかけで母は精神病院で現在まで入院している。

優しくかった母からの仕打ちに幼かった轟はその頃から歪んでいった。

分別の付く頃になってきたと同時期の仕打ちと周囲の噂——父親が母親の個性目当てで結婚して最強のヒーローを生み出そうとしている、いわゆる個性婚と呼ばれる倫理観が欠落した行為によって生み出されたのが自分たちだという言い表しようのない憎悪が生まれた瞬間だった。

父親の炎は使われない、母親の氷で頂点に立つ。

歪んだ願望が生まれてからは父親とは没交渉、ある程度の性能水準を満たしたからか、父親もそこまで干渉はしなくなっていた。

報告書を読み終えてからアクトが思ったのは『度し難いほどに狭大な視野を持ったバカの反抗期』だった。

多角的な視野を持たない、証拠足り得るものが全て他者から与えられたものしかないという悲劇以下の茶番なのだからどうしようもないというべきか。

この件がきっかけで彼のサイコパスが常時ワインレッドという攻撃的で自分の世界に閉じ籠ってしまいう傾向の強い精神状態に陥ってしまっているのだろう。

少なくとも、アクトの知った真相をわざわざ轟に伝える気は今のところないし、そもそも伝えたところで現状の本人の心に届くとは思っ

ていない。

訳知り顔で真実を伝えたところで、ぽつと出のアクトの言葉をプロヒーローだからとバカ正直に信じられるほどの余裕が今の焦凍にはない。

ただ、彼の父であるエンデヴァーに心から同情しただけだった。

「・・・まったく、愛されていないながらそれが見えていないとは度し難いアホウが」

マイクを切った状態でアクトは呟いた。

そして——条件が整った瞬間である。

『さあさあさあ!! 遂にやって来たぜこの瞬間が!! プロヒーローグッドスピードの超速逆転劇が始まるぜえっ!! リスナー、瞬きせず——』

『——さあ、刻限だ。死に物狂いではしゃいでみせろ、有精卵ども

!!

×

×
アクトの宣言と共に、スピーカーからアクトがスタートしたと予選中の選手たちに知れ渡る。

先頭を走っていた轟の表情に緊張が走った。

『第一関門・・・は一瞬か、見えたか?』

『何とか見えたぜ!! グッドスピードは向かい来る巨大ロボに一切触れずに通り過ぎていきやがった!!! これじゃあ足場が悪い程度の100メートル走だぜ!!』

現在自分が走っているのは第3エリア『怒りのアフガン』と呼ばれるエリアで走り難い砂場を走破するという自分の個性であれば何の障害にもならないエリアだが、一つだけ難点があった。

それは砂場の中に地雷が仕掛けられていて、それを踏んでしまうと凄まじい音と衝撃を周囲に撒き散らすのである。

地雷自体はよく観察すれば避けることも可能とプレゼントマイクは言っていた。

踏むことにより生じる衝撃は氷で防げるが、音に関して防ぐことは可能だが後続の道を作ってしまうという懸念が頭に過ぎり決断する

事が出来ずにいた。

だが事態は一変し、最初に宣戦布告した緑谷よりも更に上位にいる加減アクトがスタートしたという。

単純な速さを見たのは体力テストの時のバカげた速度、50メートルを1秒と掛からずに走破したあの個性だ。

あれが全力なのか測り切れていない自分では、最悪を想定するしかない。

既に残りの距離を1キロを切っているが、アクトは自分がゴールに辿り着くよりも早く背後に追いつかれる可能性がある。

しかもスタートと殆ど同時に第一関門をクリアしている、猶予はない。

轟は決断する、例え後続に道を作ってしまうことになろうと一刻も早くゴールに辿り着くことを。

右足から氷を生成、砂場に氷の足場を連続して生成することで移動しこのエリアの突破を図った。

後背には空中を滑空する爆豪が迫ってきていて油断している場合ではない。

加速し始めようとした時、第3エリアの後方から通常よりも大きな爆発音がしたことに思わず振り返ってしまった轟は思わず舌打ちしてしまう。

「・・・緑谷っ!!」

「アクトだっ!!?」

自分が宣戦布告をしたクラスメイト。

実力的には確実に自分が上だがそれでも目で追ってしまう程に気になる個性を持った男。

緑谷出久が空を飛んで一気に先頭にまで躍り出たのだ。

否、自分を超え、首位になった。

『A組緑谷爆発で猛追——・・・っつか!!! 抜いたああああ

ああっ!!!』

「アクトあっ!!!」

俺の前をいくんじゃねえっ!!」

「あれこれ悩んでる場合じゃねえか!!」

爆豪が更に加速していく、彼の声音も緊張が孕んでいて余裕がないのが分かる焦りようだ。

氷に乗ってデクに追い付かんと轟が加速していく。

デクがやったことに轟が予測すると砂場にある地雷を一か所に集め、ワザと起動させることで発生した爆発の衝撃で飛んできたということ。

となるとあれは飛行というよりもジャンプと見ればわかりやすい。つまり、跳ねた後は落ちるだけ、着地した時の衝撃はかなりのものとなる。

立て直すよりも早く抜き去れば二度目はない。

だが、轟の予測は思わぬところで外れることになる。

デクは轟と爆豪が己を抜かした瞬間、着地するより前に盾代わりにしていた鉄板を砂場に叩きつけた。

いくつかの地雷に鉄板が当たったのか、爆発が連鎖して衝撃が不意打ちの形で抜き去った2人の背後に襲い掛かった。

デクはその衝撃を一度目と同様利用して2人を追い越す。

突風が起きて砂場エリアに一時的な砂嵐が起きたこともデクに運が味方したのか、2人の立て直しに時間がかかっていた。

後はただ一直線、何の障害も見られない距離約100メートルを走り抜けば誰もが予想していなかったデクの予選1位通過が決定する。

『緑谷間髪入れず連続妨害!!! なんと地雷エリア即クリア!!! イレイザーヘッドお前のクラスすげえな!! どういう教育してるんだ!!!?』

『俺は何もしてねえ、奴らが勝手に火イ付け合ってた...ろつてオイ、マジか』

『さあさあ序盤の展開から誰が予想できた!? 今一番に...つて、なんだよイレイザー今いいところ』

『画面よく見ろ、有り得ないもんが見えるから』

『はあ? 画面って...え? はあああああ!!!? おいおいおい

おいどうなってやがる!!!? 俺たち幻でも見てんのか!!!』

『GPSに不備はない!...つてことは、幻覚じゃあないんだろ?』

実況をしているプレゼントマイクとイレイザーヘッドの困惑した声スピーカーから聞こえてきて、走っていたデクが訝しんだ。

今は自分が1位だとデクは思っていた。
自分の前には誰もいない。

爆発に巻き込まれた轟と爆豪が立て直して追いかけてくる以外、不安などないはずだ。

ゴールゲートが見えてきて、潜り抜ければそれで終わりだ。

変わった着ぐるみが白いゴールテープを持っていてゴールゲートの真下に待っていた。

走って、走って、考えるよりも前に体を動かしてゴールゲートを潜り抜ける。

ゴールテープが切れた瞬間、プレゼントマイクの声がスピーカーから響き渡った。

『~~~~~ル!! さあさあ序盤の展開から誰が予想できた!? 俺は予想していなかったぜ、まさかこんな展開があるだなんてな!!! 今、緑谷出久が。。。』

プレゼントマイクがデクに称賛の言葉を向けていた。

観客たちもデクに歓迎の拍手を向けている。

だが、デクは偶然だが気付いてしまった。

歓迎の拍手の中、デクに向けた視線に若干の『哀れみ』が含まれていたことに。

『緑谷出久が。。。2位でゴオオオオオオオオオオ!! 続けて3位轟、爆豪は4位だああああああ!!!』

2位という言葉に驚いたデクはプレゼントマイクの言い間違いと思った。

自分の前には誰もいなかった。

ゴールゲートにもいなかった。

いたのは二頭身の着ぐるみだけで、他にはいない。

混乱しているとゴールテープを持っていた着ぐるみがデクの前にやってきていた。

丸い、雪だるまに手足を付けたようなキャラクターだ。

ジャケットシャツにネクタイまで黒という格好で胸元に光るバツジが一際デクの目に留まった。

『お疲れ様だったなデク、2位入賞おめでとう。』

いや、まだ予選なのに2位で入賞というのは使うのが早すぎたか？』

バツジには原色の青、アメリカ国旗を背景に中央に天秤とアスクレピオスが描かれており、アメリカのヒーローを調べるときに見たロサンゼルス警察の物とそっくりだった。

そして着ぐるみの口調、それだけで中にいる人間が誰か判ってしまった。

「・・・あ・・・」

『ん？』

ああすまないな、ホロコスをしていたら誰か分からないか。

今解除しよう』

腕時計型の携帯端末に着ぐるみが触れると着ぐるみが消えて、代わりに1人の少年が現れた。

立体映像を着込んだ着ぐるみだったのかとどこか抜けた考えをしていたが、次第に状況も理解してきてデクは苦笑いするしかないのか、乾いた笑みが零れた。

「加減くん・・・いつの間にゴールしてたの？」

どういう訳か、第3エリアではまだ第1エリアを抜けたばかりだった筈の加減アクトがそこにいた。

「ついさっきだ、20秒ほど前だったか？」

お前たち3人が混線した時に抜いてな、爆発で見えなかったのだから。

俺が1位になるのは当然として、2位の奴は頑張った褒美としてゴールテープを勝手に用意して待っていたのだ。

クハハハハハ!!

たかだか4キロ程度、俺の速さがあればハンデにもならなかったということだな!!」

「どこから突っ込めばいいんだろう・・・」

「すまないな、こういう時、どういった顔をしたらよいかわからなくてな……」

「……笑えばいいんじゃないかな？」

「そうか？」

ではそうするでしょうか、クハハハハ!!!」

適当に返すことにしたデクは予選を突破した疲れと目の前にある^{理不尽}アクトに表情が沈んでいく。

予選とはいえ、2位になった人間の表情ではなかった。

『審査が終わったぜ!! リスナー驚け!! 俺も驚いたぜ!! 第1位の発表だ!! ついさつきまで第1エリアを走っていたプロヒーロー、グッドスピードがいつの間にかゴールしてやがった!! え、何を言ってるかだつて!? 俺もそう思うさ!! だろうと思つて編集さんに急いでもらつて証拠画像を用意してもらつたのがこれだ!!』

会場のディスプレイに映像と写真が半分ずつ現れた。

第1エリアを抜けた辺りにあるカメラの前で何故かポーズングしたアクトが腕時計型の端末に表示された時間とカメラの時間が大きくクロズアップされ、ズルをして近道をしてゴールした訳ではないという証拠が約50ほど現れた。

しかもこの証拠の映像、場面が全て違つていふ非常識な写真である。

ちなみに、コースに配置されたカメラロボットは全部で100台あるという。

その半分のカメラの前で一々違うポーズングをしながらコースを進んでいったという事実をプレゼントマイクが説明し終える頃には予選を突破した殆どの選手が到着していて、アクトの奇行を見ていた者も何人かいたのか証言していた。

とはいえ、アクトの奇行に大して驚いていない者もいた。

「アクト、何やってんの？」

「響香か、俺の速さを理解できない人間に分かりやすい証拠として携帯端末の時間とカメラの時間の誤魔化しが出来ないように見せたこと、別々のポーズングをして合成写真でないように見せていたのだ」

「あの写真見たけど数秒ごとに違うカメラにポーズとってから消えるって・・・なにお化けみたいなことしてるのさ」

「いや、暇潰しも兼ねていた」

「・・・どこから突っ込めばいいんだろう」

「笑えばいいらしいぞ?」

「笑えるか!!」

こうして、予選会は終わり、本選43名が決まったのだった。

第017話 悲惨散々第2種目

予選突破者の最後の1人がゴールするが出来ていない生徒たちはリタイアする者、最後までゴールを目指す者で分かれた。

体育祭の運営上放送される事はないが、予選落ちしながらもゴールしていく者たちの中には転科を志す生徒もいた。

誰一人として声をかける者はいない、声も上げず悔し涙を流し、ただ黙々と生徒側の観客席へと戻っていく彼らの背中をアクトはただ黙って眺めていた。

表情で見て取れた、彼らは確かに短期間の訓練をしてきたが、その想いだけは本物だったと。

勝者であるアクトが敗者に声を掛けたところで、傷心の彼らの殆どは更に傷つくだけだ。

ヒーロー科以外の生徒もそれぞれの努力をした。

予選の内容が自らの個性と合わなかったという理由もあるだろう。体育祭当日に限って体調不良で万全の状態で臨む羽目になったという理由もあるだろう。

しかし、現実是非情である。

後出しの言葉など言い訳に過ぎず、予選突破に至るだけの結果に繋がらなかった。

冷たい言い方になるがそれ以上でもそれ以下でもない。

ヒーローは国内では人気の職業とあって競争率が非常に高い。

当時人気だったヒーローも1年も経たない内に後からやってきた後続に追い抜かれてしまう、そんな人気商売なのだ。

そう、商売。

誰よりも上に、と貪欲な精神を持ったヒーローが人々をあらゆる障害を守り、助けていく商売だ。

元々あった『ヒーロー』という正義の味方からかけ離れているとアクトは日本のヒーローを見て常々感じているが、目の前にいる生徒たちの思いは果たして将来の現実を見てどう思うのか。

「まあ、死体蹴りは勘弁しておいてやろうか」

「泣いている連中にそれしたらアクトホント襲われるよ?」

響香は予選落ちした彼らを眺めるアクトに声を掛ける気はなかったのだが、アクトの不穏な言葉が聞こえてきて思わず突っ込みを入れてしまうのだった。

「予選順位は43名!!」

残念だけど予選落ちした生徒は安心なさい、まだ見せ場は用意されているわよ!!」

予選落ちした最後の生徒がゴールしてから10分ほど経った頃、18禁ヒーロー・ミッドナイトがそれぞれの順位を発表していく。

43位から順に伝えられていき、そして1位のアクトの番となった。

アクトとしては当然の順位だと思っていた為、特に感じるものはない。

少し離れた距離から熱い視線を向けている轟と爆豪が鬱陶しい以外は特に思うところはなかった。

「そして次は本選……第二種目!!」

何かしらねくく私には知っているけど!!」

「変な振りをする女だなミッドナイト……」

「そこ、聞こえているわよ!!?」

……第二種目は、コレよ!!」

巨大モニターから次の種目が発表される。

その内容は——『騎馬戦』だった。

直後にアクトは自分が1人で動くことになることを察した。

「参加者は2〜4人チームを自由に組んで騎馬を作ってもらおう!!」

基本は普通の騎馬戦同じルールだけど1つだけ違うのは先ほどの順位に従い、各自にポイントが振り分けられているわ!!」

最下位から5ポイントずつと上がっていき、2位の210ポイントが発表される。

アクトとしては215ポイントをどう守り通し、相手チームからどうやってポイント奪取を行うかこれから伝えられるだろう

特別ルール^{ハッデン}を考慮しながら対策を練り始める。

「1位のポイントは——1ポイント!!」

だが、説明が続いているミッドナイトの1位のポイントのあまりの低さに一瞬だが思考が停止した。

再起動して思ったのは『雄英の連中この前の腹いせに理不尽なルールを押し付けすぎだろう』だった。

仮に当たっていたとしても、これまでのアクトの所業を考えればこの程度軽いもののだが、自覚が薄いのかアクトは理不尽さを感じていた。

「……………ん？」

今『いち』と聞こえたのだが……………聞き間違いか？

最下位よりも酷くないか？」

「——さあ、ここでやってきたわよ、特別ルール!!」

第二種目におけるグッドスピードのハンディキャップは以下の4つよ!!」

「響香、無視したぞあの年増ヒーロー」

「アクト、黙っていいようねー?」

「さあ全員ディスプレイに注目、しっかり頭に叩き込みなさい!!」

1つ、手足に20キロの重りを付けること!!

2つ、開始して10分間は舞台中央から動かないこと!!

3つ、相手選手に直接触れないこと!!

4つ、1人で戦うこと!!

以上のルールよ!!

もちろん他の生徒たちにはコースを守る以外のルールはないわ!!

あとその予選1位、レディにそんな口を聞いたら主審権限で特別ルール増やすわよ!」

「レディ(笑)」

アクトの写真がディスプレイに映し出され、次いで特別ルールがその横に点灯されていく。

写真写りの悪さからヴィラン顔負けの写真を映したディスプレイ

に、部下が大爆笑しているのが聞こえたアクトは保護者席にいるヴァーリを睨むアクトは無言で空気の弾丸をお見舞いしたのだった。直撃したヴァーリは席からひっくり返ると、リンジーとともにその場を離れて行く。

雄英側に依頼されて、巡回を依頼されているからだ。

ギーノ1人に任せていたが、離れて行ったのを見ると応援を呼ばれたのだろうと思いつながら特別ルールの対策を考えるのでった。

「ふむ、騎馬なしで騎手をしろと？」

なるほど、トンチだなこれは!!」

「飛べるアクトからしたらトンチでも何でもないんだよなあ……」

ぼやく響香は誰とチームを組むかを見定め始めていた。

隣にいるアクトはルール上誰とも組むことはない。

となると制限時間15分内のラスト5分に猛攻を仕掛けてくることは容易に想像できたし、このルールの裏をついてくるかもしれないと頑丈な仲間が必要かとシミュレートしていく。

「さあ——チームを組むのに15分間の交渉タイムのスタートよ!!」

生徒たちは自分が次のステージへ上がる為に、互いの個性を打ち明けメリットをプレゼンしていく。

勝算が高ければ受け入れられ、低ければ断られる。

アクトはクラスメイトたちが将来行っていくだろう生存競争の一幕をただ悠然と眺めているだけだった。

「じゃあアクト、また後で」

「じゃあ響香、また後で」

たったそれだけの声掛けだったが、それ以上何も話さず2人は分かれた。

アクトは舞台中央へ、響香は交渉をしているクラスメイトたちへ向かっていく。

——そして15分後、

「さあ上げてけ鬨の声!!」

血で血を洗う雄英の合戦が今!!

狼煙を上げる!!」

第二種目、騎馬戦が始まった。

第二種目が始まった頃、警備をしていたヒーローたちが休憩所で観戦がてら休憩を取っていた。

「この雄英体育祭って——ヒーローとしての気構えって言うより、『ヒーロー社会に出てからの生存競争をシミュレーションしているよな?』」

ヒーロー名デステゴロと呼ばれる巨漢の男がタバコを吹かせながらモニターを眺めていた。

向かいにはMt.レディと呼ばれる最近知名度を上げてきているヒーローが煙たそうに向かってくる煙を払っている。

「ヒーロー事務所が犇ひしめいている中で俺たちはおまんま食っていかにやあいけねえ。

時に他のヒーローを蹴落としても活躍して見せなきや何ねーつてのが障害物競走選だろ?」

「煙けむいです、止めてくださいセンパイ。

……あれ心苦しいんですよ、悪気はないんですけど」

「貴様……デビュー当日のあれは新人に花を添えたということをお忘れなよ?」

Mt.レディの隣で低い声音でねめつけているのは汎用性の高い個性を活かし活躍するヒーロー・シンリンカムイ。

つい最近の話ではあるが、デビューを果たしたMt.レディに手柄を目の前で搔かつ攫とわれた思いをしたヒーローである。

一見間の抜けたと見られている一件であったが、シンリンカムイの実力は若手でもトップクラスの实力派ヒーローだ。

「おっと、悪いな今消すぜ……つと。

まあ、その一方で商売敵といえど協力してなくちやあならねえ事案案つてえのも腐るほどある」

デステゴロが灰皿にタバコを押し付けて消した。

実況を眺めながらばやく姿はヒーローになってからの苦勞が滲み

出した声が多分に混じっており、シンリンカムイやMt.レディもうなずいた。

「ああつ、騎馬戦がまさにそれですよね!!」

そっか、自分の勝利がチームの勝利になっちゃうもん。

相性やら他人の『個性』の把握やらを持ちつ持たれつ、それにサイドキックとの連携」

「——他事務所との合同『個性』訓練。

個を高めることも必要だが、それだけではやっていけないヒーロー業界か」

灰皿を遠い場所へ置いたデステゴロは第二種目の観戦をしながら代わりに持ってきた煎餅をバリバリと食べている。

「プロになれば当たり前前の生きる道を子供が今からやっているとはなあ……」

「大変ですねえ……1枚もらいますねー」

「それにしても——今回は粒揃いの筈なんだが、どうもヤツの所為でいまいち褪せてしまうな……カメラワークも露骨というか」

シンリンカムイの一言で、2人の表情が若干だが曇った。

「あー、それってやっぱりあの子の事ですよね？」

アメリカからの刺客、グッドスピード!!

あの子ヤバイですよ、この前あの子のチームが捕り物しているの見たんですけど、相手のヴィラン半殺しで凄かったんですから!!

思わずヴィランが可哀想って思っちゃいましたよ……アメリカのヴィランもあんな目に遭ってるんだろうなあって思うとぞつとしますね」

体育祭1週間前の夜の出来事である。

銀行強盗をしたヴィランが逃走に失敗して付近にいた民間人を人質に建物に立て籠もった案件だった。

この手のヴィランのセオリーなのか、逃走用の足の用意、ヴィラン個人の追加要求——このヴィランは1か月分の食料を逃走用の車に入れて準備しろと要求した——を警察へと要求した。

当然だが要求を全て呑む筈もなく、交渉に時間をかけてヴィランの

個性に対抗したヒーローの救援要請をした時、アクトたちが呼び出されたのだ。

犯人、人質は共に5人いて、それぞれ複数の箇所であぐらをかき、場所もまだ全て把握し切れていない状況下で、アクトたちのチームは突入を開始した。

ブリーフィングもなし、迅速果敢というよりも無謀な突入と思われる。その選択は人質は無事に保護・救出され、ヴィランたち5人も逮捕された。

ヴィランたちは全員両手両足がそれぞれ大火傷、氷結、ミイラ化、銃創、粉砕と容赦のない処理をされておられ、命に別状はないが今後の生活に障害が残るだろう重傷を負っていたのだという。

Mt.レディが到着した頃には既に捕り物は完了しており、ヴィランたちは護送車ではなく救急車で警察病院へ運ばれていく様子をただ見るだけだったという顛末だった。

「いや、刺客じゃねえだろ？」

ヒーローネットワークで偶然知ったんだが、どうやらアメリカから逃げてきたヴィランを追ってはるばるアメリカからやってきたんだそうだけ。

「どうして雄英に留学してきたかは知らねえが」

アクトの流した情報に辿り着く辺り、肉体労働専門に見えるデステゴロの情報収集力の高さはそれだけではないと示していた。

「……恐らくは彼が未成年であることがヒーロー委員会でも問題になったのでは？」

アメリカでは個性使用免許を持っていても日本では飛び級制度が未だ無い。

あとは日本政府もグッドスピードの所業を知って彼が暴走しないよう幾重もの枷をする為に雄英に入れたのではないだろうか？」

個人の凶悪性、行動範囲、個性使用、国内ライセンス不所持などを理由に殆ど無理矢理だがアクトの国内での活動を制限する動きが日本政府の要望もあったのか、その器として選ばれたのが雄英高校ではないかとシンリンカムイは推測した。

選ばれた雄英側としてはヴィランを誘き寄せる狩猟場にされて堪ったものではない。

とはいっても、既にその手の情報は既にヒーローネットで出回っている為、全て彼が考えたものでもなかったが。

「——失礼、東側の巡回警備が完了したわ。」

置き引きが2件ほど発生していたから詰め所クに引張ってきたのだけど、ここに連れてくれば良かったのかしら?」

冷めた印象を窺わせる女性の声音が詰め所の入り口に響き、それに気付いたヒーローたちが声のした方へと視線を向ける。

金髪の女性——ハウンド2のコードネームを持つリンジーが詰め所の入り口に立っていた。

不機嫌な表情だが、これが彼女のいつもの表情だ。

少し後方には両手両足がまるでミイラのように水分が飛ばされているチンピラが這い蹲っていて、彼女の個性が原因なのか、悲惨な状況が一瞬にして見て取れた。

これではどちらがヴィランか分からないという状況に気の抜けた、明るく弾んだ男の声が聞こえてくる。

「ちーっス!!」

南側の巡回ケービ終わったぜえつ。

なんか設置されてる設備パクろうとしてるアホが5人と隠しカメラとか盗聴器仕掛けてるメディア関係者がいたからしつかり捕まえてきたぜ……って、ナニコレ?」

ヴァーリはまるで世界の時間が止まったような待機所に拍子抜けしたのか、砂で拘束していた窃盗犯ヴィランの拘束が緩んでしまった。

既に気絶しているため、逃走する恐れはなかったが、待機所を一瞥すると納得する。

「ははあん?」

ナルホドナルホド?

リンジーが日本のヒーロー様にご迷惑をかけたってことなんだな、俺納得」

(((いや、お前もだからなっつ???)
!!!???)

ヒーローたちの心は一つとなってヴァーリに心の中でツツコミを入れた。

捉えた砂からは血が滲み出していて、たとえ砂が緩んでいても逃走は難しい、あるいは不可能と知っていたから砂が緩んだのか。

結果は不明だが、あんな風にはなりたくないとのヒーローたちは思った。

空気を読まない、無邪気に見える彼の目つきがまるで猛禽のごとく鋭いと気づいたしまったヒーローはあの無邪気さが彼の擬態であると解ってしまった。

一瞬だが値踏みをするような視線が向けられるヒーローたちだったが、その意図までは読めなかった。

「鏡見て見なさい、あんたのバカもドン引きされているわよ？」

そんな彼ら彼女らの目が物語っていたのを悟ってか、リンジーがヴァーリに冷水をかける。

「まっさかあつ………え、フオローがヒーローからこねえんだけど？」

おどけているヴァーリだったが、お通夜ムードの待機所からは何の声もかからなかった。

「ちえつ、なんだよせつかくヴィランを引っ張ってきたつのに。」

俺そんなに滑ってるかなあ……？」

「滑ってるのよ」

つれないリンジーの一言にヴァーリはうなだれるも意識を切り替えたのか、ヴィランの引き取りをヒーローにするように声をかけた。

「おーい、その木目調の……シンリンカムイ？」

こいつら受け取ってくれねえ？

俺たちこれ終わったら観客席でアクトちゃん雄姿を観戦しねえといけねえっていう大事な使命があるんだ」

突然よばれたシンリンカムイは何故自分が呼ばれたのかと疑問を覚えるが、拘束力に定評のある自分の個性のことを知っていたからと思うことにして、ヴァーリの元へと向かって行く。

「あ、ああ、すぐいく。」

「じゃあ2人とも、俺はこの辺で」

「お疲れ様です」

「ああ、いってこいよ、ご指名だぜ」

シンリンカムイはヴィランズを受け取ると、どこかへと連絡し始めた。

恐らくは護送車の呼び出しなのだろう、必要台数を伝えながらヴァーリとリンジーからも状況を聞いていく。

大雑把にしか伝えないヴァーリと事細かに伝えるリンジーの対照的な2人に苦慮しながら、時間が過ぎて行く。

そして警察も呼び出されると予想していたのか、5分と立たずに護送車が複数やってきて、ヴィランズを手際良く拘束し連行して行く。

手慣れた作業姿に、ヴァーリはさすがヴィラン受取り係と呼ばれているだけあるなど内心で皮肉っていた。

護送車が雄英を出たところを確認して、執行官の2人は観客席へと戻って行く。

シンリンカムイは観客席への最短ルートを教えてから巡回へと戻って行った。

※ ※ ※

コンクリート製の舞台中央で、アクトは宙を浮いて目の前の状況を眺めていた。

見渡す限り死屍累々（比喻表現）の光景にどうしたものかと呟いた。

原型を保てていないコンクリート製の舞台は余すことなく破壊し尽くされていて、多くの個性が使用された痕跡が残っていた。

舞台に残っている生徒は少ない、殆どの生徒はアクトの時間制限が取り払われた瞬間に舞台から弾き出された。

運が良かったのか悪かったのか、残った生徒は洗礼とも言えなくもないアクトの一撃を耐えた優秀な「戦闘カン」のある優秀な生徒だ。

響香は他チームを盾にしたおかげで耐えていたが、二撃目は絶対に耐えられないと分かると回避に専念していた。

「死人はゼロだな、いやはや何の罪もない一般人を殺さなくて本当に良かった」

「死んでないのが不思議なくらいの天変地異が起きていたんだけどね……」

舞台外から這い上がってきたミッドナイトはコスチュームが破れてはいないもののポロポロでアクトは念入りに吹き飛ばしていた彼女が思いの外早く帰ってきたのに対し、身体能力の高さにわずかばかりだが驚いた。

騎馬戦が始まって直後、アクトはゼロフィールドを展開して回避に専念していた。

幸いアクトを狙ったのは牽制目的の轟だけだったが、視界を氷に塞がれた以外の結果は齎さなかった。

実況をしようにも視界は360度氷で塞がれている為プレゼントマイクの実況に返せるコメントを返すだけというお茶の間の視聴者もどう反応すれば良いのか分からずに見守っていた。

そして時間がやってくると、アクトは轟が放った氷をいとも簡単に破壊しそのまま武器に転じて全方位に散弾銃のごとく放ったのである。

氷塊の大きさにもよるが、大概が自身の体格と同等のものばかりで直撃を避けられたチームは他チームを盾にした響香と空にいた緑谷チームくらいのものだ。

たった一撃、それだけで舞台にいた殆どのチームが場外行きとなり、残ったチームは残り時間を回避に専念しようとしたが2分と持たず全員が失格となる。

結果、1ポイントしか所持していないアクトが結果的に勝者となり本戦を待たずして優勝が決まってしまう形になるのだが、流石に本線も待たず終了というのは雄英側としても待ったがかかり、VTRを確認して最後までアクトの一撃目を耐えられた4チームが本戦決定となった。

とは言え、アクト以外の体力が息も絶え絶えの状態で反骨心と傲慢の塊である爆豪も暴言を吐けるほどの余力もなく、自分の個性をまさか武器になって返ってくると思っていなかった轟は呆然として仰向けの状態でただ大空を眺めているだけだった。

デクは一撃目を運良く空中にいて難を逃れていたが、それ以降はアクトが放った複数の竜巻を避け切れずにバランスを崩し墜落。

命に別状はなかったが、碌な抵抗も出来ず一方的な展開でやられてしまい呆然としてしまっていた。

「こ、こいつあしヴィー——!?!」

予選以上にシヨツキングな映像がお茶の間に流れちまつてるよなあこれえっ!?

おいおいおいグッドスピード!?

会場が凍りついてるぜっ!?

お茶の間も確実に凍りついてるYO、氷河期突入だ!!」

「アメリカ基準にしたのが間違っていたな、これくらいうちの執行官なら一時間くらい余裕なんだがな?」

『スケールがでかすぎるぜアメリカ!!』

なに、なんなの!?

アメリカは人の形をしている戦略兵器を作るのが趣味なんですかあシビュラシステムはあっ!?!』

「失礼な、シビュラシステムは生涯にわたって利用者の人生をサポートをする『福祉システム』だ」

『物騒なシステムもあつたもんだな……いや、使い方次第でこうなつたということなんだろうな……』

プレゼントマイクが絶叫しレイザーヘッドはシビュラシステムがアクトに施した合理的なプランから導き出された効率的な訓練の末に生まれたアクトという存在に改めて静かに戦慄するのだった。

第2種目騎馬戦の結果は蓋を開ければアクトの蹂躞劇となつてしまった。

感想文を書くとすれば『グッドスピードがみんなを虐めた、酷いと思つた』といったことをメインにしたものにしかならないだろう、酷いものである。

休憩時間は当初予定していた時間を大幅に取るという変更が為され、その間はレクリエーションの時間を取ることになるのだった。

「酷いものだな……」

「アンタが言うなっ!？」

「アクト……流石にフオローできないよ……」

ミッドナイトがアクトのぼやきにツツコミを入れ、ようやく立ち上がる事ができるほど回復した響香が力なく笑うのだった。

第2種目終了

勝者———加減アクト、以下4チーム計17人進出

閑話 それぞれの敗北

コンクリートの舞台上で、爆豪勝己は呆然として倒れていた。

騎馬戦が始まって15分が経った頃、クソ眼帯野郎——グッドス
ピードが半分野郎——轟が放った氷の包囲壁を粉碎してそれを
ショットガンのように放って舞台上を砲撃した。

即座に反応して特に大きかった氷塊を爆破跳躍によって避ける事
には成功したが、馬になっていた3人は避ける事が出来ずに場外へ弾
かれてしまった。

この時点で既に絶体絶命の事態に陥った彼は更に飛び上がり周囲
を俯瞰できる上空にまで上がった。

初撃を避けられた生徒は一握りで、その後の対処は一刻の猶予もな
い。

だが——そこまでだった。

「——がはっ!?!」

突如として襲った身体の異常、勝手に落下しようとする速度に抗え
ずそのまま墜落した。

解っていたのは、これが通常の落下速度ではなく『拘束した上で地
面に降ろす』という明らかに手加減舐めされた攻撃であることだ。

軌道修正する為に強引な爆破を何度もするが、軌道が変わることは
なく、手こずる様子も無くアクトは爆豪を蹂躪した。

意識もはつきりしていて、身体も大怪我をしている訳でもない、個
性も良い具合に温まって来て全力の一撃も使える、すぐに起き上がる
ことも可能だ。

だが、立ち上がる様子はない。

立ち上がるよりも先に、脳裏に溢れ出した事実の処理が優先されて
いたのだ。

——俺がああのクソ眼帯野郎に負ける筈がない。

——あんな一方的にこの俺が負けるなんてありえない。

大雑把に纏めると、プライドエベレスト級の彼にとって、人生でこ

ここまで圧倒的な敗北を経験したことがなかった爆豪勝己の人生において、初めての『言い訳しようのない敗北』を味わった目の覆いたくなるような記念日を受け入れられずにいた。

現実逃避と否定を繰り返していき、ふと自分の現状を振り返ると起き上がるより先に固まってしまおう、というループを地面に背を付けてからずっと続けていたのだ。

プライドに見合った才能と努力を16歳という若さで実現し、彼の中学時代に口にしたトッピーヒーローとなり長者番付に載るという大言も決して誇大妄想というわけではない。

それだけの才能が彼にはあり、それを実現する為の努力を続けていき雄英高校へアクトがいなければ主席合格を果たしていた。

雄英高校ヴィラン襲撃事件において彼はその類まれな戦闘センスを遺憾なく発揮した。

それに比例して性格が歪んでいて小さな面もちらりと見え隠れしてはいるが、それでも彼には自負があった。

——トップになれるだけの個性が俺にはある。

それが、こんな碌な抵抗も出来ず蹂躪される等生まれてこの16年間で初めての出来事を受け入れる事が出来ないうでいた。

少し離れて普段から馬鹿にしていたデク——緑谷出久も倒れている。

別の方向には半分野郎——轟焦凍も同様に倒れている。

誰一人として、アクトの前に立っている者はいなかった。

——認めねえ、こんなクソみてえな結果が認められるわけがねえ

!!

アナウンスが響く、緊急会議が開かれ、1年の部の本選出場者の名前が挙げられて自分の名前が呼ばれた時、彼は起き上がり、その瞳には闘志の炎が宿っていた。

——また一方的にやられた。

——自分の中で何かにヒビ割れる音がした。

轟焦凍は生まれついでサラブレットと様々な陰口を叩かれた事は多かった。

個性婚で生まれてきた子供、生まれなんて選べる訳でもないのに子供の彼に謂れのない言葉を投げてくる連中を、当時の幼かった少年の感情は表現できない『何か』で埋め尽くされていた。

表現出来ない感情は不安と言う形になり、よく泣いていた彼を守っていたのはヒーローである父親——No2ヒーロー・エンデヴァー——ではなく母親だった。

優しい人だった、昔話をせがんだ時も困り顔だけでも話してくれて、だけでも嬉しそうに語る母の横顔を見て幼少期の彼は育った。

幼かった彼にとって、父親は痛い事ばかりしてくる酷い人で、母親はいつも自分を守ってくれていた、そういう感覚で育ってきていた。

だが、何時しか母親は外と中の圧力に精神を病んでしまい、幼かった我が子に煮え湯を浴びせた。

守ってくれる母親がいなくなつて、家に帰ると酷い事ばかりしてくる父親の理不尽さに幼かった彼に怒りや憎しみが芽生えたのは自然の成り行きだったのだろう。

兄や姉はいたが父が恐ろしくて近付けない、ただ遠目から眺めているだけで話すことは幼少期は殆どなかった。

訓練という名の虐待が一通り落ち着いてからは話すことは若干だが増えてきてはいるが、過去の事もあり会話が弾むことは限りなくゼロに近い。

淡々とした感情の乏しい話し振りでは、弾む会話もないだろうが。

——俺とグツドスピードの差は何なんだ？

同じ個性婚と言う人倫無視の間で生まれてきたモノ同士、個性も複合個性の強個性。

育ってきた環境が、価値観が、辿ってきた軌跡が。

何が自分と相手を隔てた絶壁を形成しているのか。

開始と共に周囲を氷の壁を作つて拘束して全方位からの圧殺を

狙った一撃に手応えは無かったが攻防一体の状況を作り出した以上、何かあればすぐに感知できると他の生徒に向かった。

アクトが行動を開始するアナウンスが放送されたと同時に自分が放った氷塊が返ってくるとは終ぞ思わずに。

同じ質量の氷をぶつけければ防げると出遅れてしまったが放った氷塊はあつけなく砲弾と化してやってきた氷塊にぶつかりあつけなくは介されそのまま自分たちに衝突。

衝撃は幾分か軽減されていたお陰か舞台の場外には出なかったが背が地面に触れたと同時に掲示板に自分のチームの失格が点灯された。

たった一撃で一蹴されたという信じられない事実には、これまでの自分の努力はなんだったのかと答えの出ない迷宮に入り込んでしまった彼は動きが固まってしまっていた。

無理をすれば起き上がることは出来るだろう、ただ、心は別の方向に向いたまま動くまでに時間がかかりそうだった。

—— 答えが出ない。

—— 答えが出ない。

—— 答えが出ない。

—— 答えが出ない。

—— 答えが……出ない。

これでは駄目だと、もう1つの個性である炎—— 父親から受け継いだ忌まわしい個性を使えば事態を攻略出来るのではと考えてしまいついそうになるが即座に考えるのを止め、出口の無い答えを求めた。

いつの間にか立っていた者はいなくなり、結果として優勝がこの段階で決まってしまった。

証明出来ていないのに、父親を否定する為に努力してきた力を知らしめていないのに、終わってしまった。

「——う……あ……」

言葉にならない呻き声上がる。

全体アナウンスが掛かり、本選出場者に名前を挙げられるが、当の本人にその声は届く様子は無く、強制的に起こされない限り、気付く

ことはなかった。

一番有利な状況で何をされたのか解っていないながら、碌な対策も立てられずに終わった自分は『無様』以外の何者でもないだろうと、緑谷出久は舞台の上で嗚咽する。

騎馬戦が始まったと同時に他チームからの攻撃から逃げる為にサポートアイテムを使つて舞台上空へと逃げた。

作戦としては空中戦に対応できたのは爆豪と轟の2人以外におらず、一番の警戒対象であるプロヒーロー、グッドスピードの攻撃を如何にして回避するのか考える時間に当てられたのは各チームを比べると絶大なアドバンテージといえよう。

轟の放った氷塊は瞬く間にグッドスピードを包囲して本人が視界から消えていく。

氷塊で舞台が狭まった所為で戦闘が更に激しさを増したのは仕方ないとはいえ、慎重に行動すれば本選出場はチーム合計点数を見れば範囲内と計算し、グッドスピードが動き出す瞬間を見守つた。

——まさか、轟君の氷を適度に割断して即席の砲弾にするなんて。

サポートアイテムに被弾して墜落してしまう懸念はあったが、まさかここまで全方位に放たれるという想定外の事態に——常闇の個性であるダークシャドウは防御性能に優れてはいるが数と質量に圧倒され——全てを捌き切ることが出来ず、墜落しながら打開策を捻り出そうと全身に力を薄く広く流した。

——ワン・フォー・オール O F A —— 8%スマッシュ!!

襲撃事件から暫くして、全身へOFAを流す発想を得たデクは前身への負荷を軽減させることに成功した。

とはいえ、発動時間は数秒が限界の未熟なものでしかなく、腕を振るって落下の衝撃を相殺するので精一杯だった。

サポートアイテムが破損して空中への移動手段が無くなると守り

易い角へと逃げるよう指示を、デクは出すが、それを許すほどアクト——グッドスピードは甘くなかった。

アクトが腕を振るうと彼を中心に竜巻を複数発生させるという埒外の力を振るったのだ。

まだ舞台上に残っていた一部の氷塊をも巻き込んだ竜巻はいつそう凶悪さを増していく。

正面の騎馬である常闇のダークシャドウは竜巻を真つ先に防ぐ役割になってしまいが、凶悪な竜巻を目の当たりにして『ヤダヤダコワイ』と誰もが同意する泣き言を上げていた。

再度OFAを全身に流して拳を放って衝撃が竜巻に激突する。

だが、氷塊が邪魔をして一瞬竜巻が揺れはするが破壊するまでに至らず、個性が上手く発動できていなかった反動なのか解除されてしまった。

目前には勢いを取り戻した竜巻が迫っていて——個性OFAを発動する時間を与えずデクのチームは容赦なく竜巻に飲み込まれ、巻き上げられた。

天変地異さえも生み出す『個性』という枠を大きく超えた災害にもはや為す術は無かった。

満足に抵抗出来ず、何とか麗日の個性で衝撃を軽減するがデクが騎馬から崩れて地面に顔面から落ちてしまった時点で失格が確定してしまった。

——負けちゃった。

——個性も通じなかったし……オールマイトに申し訳が立たない。

師であるオールマイトに自らの存在を知らしめるといふ課題をこれでは達成できたとはいえない、デクはそう考えた。

明らかに個性の出力に天と地ほどの差がある。

グッドスピードの本領は高速機動による空中戦闘の筈が、これだけのハンデを強いておきながら結果は圧倒的な敗北という形に終わってしまった。

周りを見てみると、憎らしくも尊敬の対象であるかつちゃん——

爆豪が呆然と倒れている。

他には自らに宣戦布告をしてきて、グッドスピードに牽制の氷塊をぶつけた轟も同様に倒れていた。

あの竜巻の試練を乗り越えられた者はいなかった。

その後、プレゼントマイクから協議の結果グッドスピードの初撃を耐え抜いた4チームの

本戦出場が決定したが、誰1人として喜ぶ者はいなかった。

本戦は1対1の戦い。

それはつまり、この惨状を生み出したグッドスピードと戦わないといけないということ。

この騎馬戦で戦闘意欲が減退しなかった本戦出場者を除いてリベンジに臨めると意気込む者は——殆どいなかった。

グッドスピードは1人舞台を下りて退場口へと向かっていく。

少し遅れて耳郎が退場口へと向かっていったのだが、それを気にするほどデクに心の余裕は無かった。

第018話 再会、本選

雄英体育祭の喧騒が会場の至る所で響き渡っている頃、その喧騒をよそにアクトはある人物との邂逅を果たしていた。

フレイムヒーロー・エンデヴァー。

ヒーローランキング2位、事件解決数史上最多記録など輝かしい功績を打ち立ててきた実力派ヒーローの1人だ。

応接室でずっと待っていたのか、エンデヴァーはやつと来たアクトに口を開く。

「・・・久しぶりだな、アクト。」

アメリカでは随分と活躍していると聞いた、流石だな」

「さあな、久闊を叙する仲間でもない俺たちにそんな世間話はいいだろう？」

厳めしい面持ちでアクトを見下ろすエンデヴァーはアクトをヒーロー名でなく名前呼びかけたが、アクトはそっけない態度でエンデヴァーを見上げていた。

「そうだな・・・お前にとって俺は両親の仇だ、探るような物言いで尚更か」

その言葉にアクトはエンデヴァーを睨み付ける。

かつてあった事件で、アクトは両親を失っていた。

エンデヴァーがアクトの両親を殺した、という訳ではない。

エンデヴァーが事件に関わっていたのはアクトの両親が現在のヒーロー社会において表沙汰に出来ないほどの大悪党と結託して関わり、その末にエンデヴァーが終止符を打ったからだ。

本来であればアクトは『ヴィランの息子』として扱われていただろうが、緘口令を敷かれ『ヴィランに立ち向かって殉職した子供』として真逆の立場として扱われた。

真相は更に複雑で、ヴィランの息子でなくアクト自身もヴィラン側としてヒーローと敵対していたのだ。

幼かったアクトにとつて、両親が施していた洗脳と調教によって両親を害そうとするものはたとえヒーローであろうと憎むべき『ヴィラ

ン』だった。

結果、両親が口封じされるまで抵抗を続けた幼かった頃のアクトは発現して僅か数年しか鍛えていなかった個性——非人道的な訓練で年に見合わない戦闘能力を有していたが——でヒーロー側に多大な被害を齎したのである。

少なくともエンデヴァーがアクトに対して罪悪感を覚える必要性など、全く以てないのだ。

むしろ、アクトがエンデヴァーとその家族に対して謝罪しなければならぬ立場にあるといつてもいい。

アクトの両親が起こした事件の全容を発表すれば、エンデヴァーの家族が現在の状況に陥らずに済んだのかもしれないのだから、むしろ恨まれても仕方ないといえよう。

「・・・勘違いするな、あれはアンタが気に病むようなことではない。両親は・・・許されない一線を越えた、飛び越えてしまった。

選り優れた個体を生み出す為の人間を生み出そうとしてヴィランに与して数え切れないほどの命を使い捨てにして俺という存在を生み出した。

人権だの倫理だのをかなぐり捨てて出来上がった産物だ、それはもう出来はいいはずだな」

差し詰めガチャだ。

当たりが出るまで出し続ける、回し続ける。

そうして屍の上に出て上がったのがアクトという最終作にして最高傑作。

「——そんなことを続けるのであれば、いずれはヒーローに逮捕されねるべき裁きを受けることが当然だったのだ。

まあ、裁きを受ける前に結託していたヴィランに口封じされた所為でうやむやになったが。

それでも・・・アンタは俺たちを救ってくれた。

使い潰される兄妹を見続ける悪夢を、いつか姉弟たちみたいに処分されるかもしれない絶望を終わらせてくれたアンタに感謝こそすれ、恨むことなんてない。

それが全てだ」

事件解決後のアクトの消息もエンデヴァーは知っている筈で、疫病神でしかないアクトを両親の親族は頑として受け入れるものは誰一人としていなかった。

孤児院へ預けられるも人間関係の構築など生まれて初めての試みに成功することもなく、当時試験的なアメリカへの交換留学がありシビュラシステムという『人生を最大限支援して幸福へ導いてくれる』なんて、己が何者かも分からない存在にとっては渡りに船だった。

結果的にその交換留学はアクト達のみのも一回で終わった。

日本へ渡ったアメリカ人のサイコパスが残念な結果になってしまい、帰国後の収容所送りを恐れた留学生が行方不明——逃亡ともいう——という最悪な事態が起き中止になったためだ。

交換留学という外交努力はアメリカとの関係を改善をさせることもなく、アクトの帰国についても当初は帰国指示が出ていた。

しかし、本人の強い希望とアメリカからの留学延長の要望が上がり、アクトの留学は継続されその後は飛び級を経て最年少でヒーロー資格——アメリカでは異能使用許可証という——

アメリカにいても時折あの時の悪夢に魘される日がある。

悪夢などを見ればたとえ覚えておらずともサイコパスに異常が出る筈だがアクトのサイコパスは平常だったが、それでも気の滅入る夢を見せられて調子が出る事はない。

決まってそういう日は心が次第に荒んでいき、事件が起きると八つ当たりのように潜在犯を見つけては拘束、抵抗する際は苛烈になっていき最悪ドミネーターは対象を排除していった。

「——それよりも、アンタの用事は息子のことだろうか？」

何だったか・・・最高傑作、だったか？

かつてアンタが言っていた子供が焦凍あいつのことだろうか？

その割に性能の5割もパフォーマンスが発揮されていない所為で不様を現在進行形で全国ネットに曝しているがな」

それで話は終わりだと、暗い話はたくさんだと言わんばかりに気の滅入る話を打ち切ったアクトは本題だろう話題を上げた。

揶揄するようにエンデヴァーを見やるが、慥然とした表情で彼はため息をつく。

あの事件を詳細に思い出したくないのだろう、彼にとつてもあの事件は苦々しすぎて胸やけの止まらなかつた案件だったからだ。

「・・・お前と対抗すればトッププロだろうとそうなるだろう。」

『6年前』の時点で当時敵対していたヒーローの殆どを戦闘不能に追いやっていたのだぞ。

あれからアメリカでシビュラシステムに最適な個性訓練を施されて・・・今の焦凍では歯が立たんだろう。

俺でもお前を止められないかもしれないな」

6年前、アクトの両親が殉職したということとなった事件は世間ではそう発表され、週刊誌でも一時期取沙汰されていた。

ランキング入りしていたヒーローが揃って殉職したという事件は当時各新聞社の記者がその真相を血眼になって探っていたものだが、緘口令と共に流布された誤情報に喰いついたマスコミは信憑性の高い情報を鵜呑みにして記事を掻き立てた。

「俺はノンストップヒーローだからな、俺の速さは誰にも止められないのだ」

自信有り気に胸を反らすアクトに、エンデヴァーは苦々しそうな表情で口を開いた。

「・・・焦凍は、ああまで俺を憎んだのは、妻の事があつたからだ」

息子に煮え湯を浴びせ、その後心を病んだ母を父であるエンデヴァーは精神病院へ入院させた。

まるで臭い物に蓋をするようなやり方に見えてしまった焦凍はエンデヴァーにありつただけの憎悪を込めた瞳を向けたのを昨日のように思い出した彼の瞳はヒーローにあるまじき脆弱さを孕んでいた。

「聞いている、お前の所為で母さんは心が壊れたんだ・・・とかなんとか？」

実にバカバカしい子供の見方だな、世相に振り回されて現実が見えていない。

いや、子供だからこそ信じてしまったんだろうな。

お前の教育も息子の将来を考えてこそその指導だったのに・・・まあ、世間の記事を真に受けるのであれば大分指導に熱が入っていたと書いていたな」

アクトの受けた洗脳教育、調教と違い厳しくも愛情もあったエンデヴァーの指導は焦凍にとってはエンデヴァーは辛く当たる父親でしかなかった。

「嫌味か・・・いや、そういわれても仕方ないな。

俺も妻のこともあり、それとほぼ同時にお前との出会いが重なって、焦凍へどう接すればいいのか分からなくなってしまった」

そこには輝かしい経歴を持つヒーローはなく、ただ家族との接し方を悩む父親の姿があった。

熱の入っていた指導もアクトとの一件で逆効果であると気付いたが頑なになった焦凍は取りつくしまもなく家族の輪は歪んでいってしまった。

ヒーロー活動の合間に妻の見舞いに行こうとしても、その時に限って焦凍と遭遇し『お前なんか母さんは会わせない!!』と面会の機会を失った上更に焦凍から罵声を浴びせられるという悪循環。

アクトはこの場にはいない焦凍に若干の嫉妬を抱き胸のあたりがチリチリと妬けるような想いを抱いた。

己では一生手に入れられることはない家族からの愛情を向けられた焦凍に。

一方で、家族との関係に長年悩んでいる父親の不器用さに呆れもしていたが。

「・・・話せばいいだろう、腰を据えて。

アンタたち夫婦はアンタの一目惚れから始まり猛アタックの末恋愛関係になって結婚してお前たち姉弟が生まれたと。

指導に熱が入っていたのは受け継いだ個性によって日常生活さえも儘ならない不自由を送らせない為にしていたことなのだ。

最悪を既に経験しているからこそ、そんな思いをしてほしくないからだ。

妻が心を病んだのは謂れのないバッシングに耐え切れなくなつて

お前に手を上げてしまったのだと・・・

俺の事を理由にしても構わん」

謂れないバツシングは緘口令がなければ本来アクトの両親が受ける筈だったものだ。

しかし、箝口令が敷かれてしまい、世間でのアクトの両親が受けた評価は『個性婚という倫理観の欠如は見られる行動はあったがヒーローランキングトップ10入りするくらい人々を救い、最後は殉職した立派なヒーロー』という全体的に見れば高評価なのだ。

逆にエンデヴァーの現在の評価としてももちろん『ヒーローランキング2位、事件解決数史上最多記録など輝かしい功績を打ち立ててきた実力派ヒーロー』だが、それに加えて『自分はオールマイトを超えないから個性婚という倫理観に欠ける行動をとりオールマイトを超える為の子供を何人も作って超えさせようとしている』という前半は兎も角としてアクトの両親が本来背負う筈の罪科をエンデヴァーが何の因果か背負ってしまったのだ。

世間が下した評価として、これほど理不尽な巡り合わせというものも早々ないものではないだろうか。

マスコミに叩かれて轟家を今も続く負の連鎖に追い込んだのだ、これは正当なものだとアクトは語った。

むやみやたらに言いふらす性格でもなし、事の真実を伝えこれまでエンデヴァー憎しで送ってきた人生をアクト憎しに予先をずらしても一向に構わなかった。

どうせ任務が終わればアクトはアメリカへ帰る。

日本へ永住する訳でもないのだ、多少の恨みを請け負ったところでなんとでもないのだ。

「————それは出来んっ!!」

だが、エンデヴァーがアクトの提案を受ける事はしなかった。

「話をするが、それでもお前を理由にする事はしない。

お前とて被害者だ。

血が繋がった両親だといってもアレは親とは言わん。

アレは生物学上の親であって、家族という社会一般の言う『絆』の

ない関係を家族とは言わん!!

人でなしの種から生まれたというだけで、お前がその罪を背負う必要は一切ないのだ!!」

熱い男だと冷めた目でアクトは見るがそれは鬱陶しがった訳ではない。

思わず目を反らしてしまった、それが羞恥からくるものなのか、あまりにも真つすぐな言葉に既に汚れ切ってしまった罪悪感からくるのか分からない。

だが、その思いを無碍にするほど人間性を捨ててはいなかった。

「・・・言ったからには、早々に話をする事だな。」

信じなかつたら昔の写真でも見せてやれ、特にデートでもしている写真でも見せれば少しは信憑性も増すだろう」

揶揄う様にアクトはエンデヴァーに事態解決への第一歩として、夫婦の馴れ初めを教え世間で伝えられている『個性婚』というイメージの払拭と誤解を解くための証拠を焦凍にじっくりと腰を据えて話し合うように勧めたのだった。

「なっ!？」

こ、このっ、俺の半分も生きていないガキがナマ言っって・・・!!」
普段は個性で顔の下半分を燃やしている炎がブワツと燃え上がった。

揶揄い耐性の低いエンデヴァーにアクトは目の前の恩人への恩返しとして、轟家への関係改善を任務とは別に課題とすることとした。

とはいえ、勝手にアクトがしようとしていることだ。

態々エンデヴァー本人に宣言する事もせず、その内心をおくびにも見せないアクトはにやにやと笑っていた。

「クハハハハハ!!」

これもシビユラシステムから教わった『円滑に進める会話術』サマサマだな!!」

「ロクでもないシステムだっ!!」

貴様アメリカで一体何を学んでいた!？」

それから2人は休憩時間が終わるまで会話を続けた。

久々の日本での生活やアメリカ時代の生活との違いを語り、ヒーロー活動についての差分を分析し合う。

再会して僅かな時間の内にアクトにとっても、エンデヴァーにとっても実りある時間がそこには流れていた。

アクトがエンデヴァーとの対話を終え会場に戻ってみると、予選敗退者たちの為のレクリエーションも終わっていた。

そしてアクトの知らないうちに抽選も終わっており、本戦のトーナメント表が液晶に映っていたのである。

これもアクトに対しての特別ルール、抽選をせずに運営側が選んだ相手との対戦のようで他の生徒たちへの配慮も兼ねた行為なのだろうが、液晶に映った対戦相手の数と名前を見て思わず笑ってしまう。

「……………クハハハハッ!!」

3対1、しかも名前もイニシャルだけとか運営め、楽しませてくれるじゃないか」

「うっわ、雄英自由過ぎでしょこれ、アクトもご愁傷様」

「なに構わん、これくらいハードルが高い方が超え甲斐が…いや、碎き甲斐がある!!」

「待って、何で言い直したの、しかも不穏な方に!」

「目の前の壁は砕いて進むのが修羅の道なのだ!!」

エンデヴァーと談笑していた等とは言わず適当に返したのだが、それを真に受けてしまった響香は、

「さっきまで戦闘系のコミックスでも読んでたの!」

とアクトの置かれた状況に同情したものの当の本人が全く意に介しておらず、むしろその状況を茶化しながらも楽しんでさえいる見て取ったのか、これがプロヒーローの余裕なのかと驚嘆していた。

アクトの初戦の相手はイニシャルで『M& a m p : S & a m p : E』とのみ記載されており、その隣にはシードで『P & a m p : B & a m p : H』とある。

人数だけは3人だということはあるが、イニシャルだけでは対戦相手の絞り込みに手間取り、試合開始まで間に合わない可能性が非常に高い。

情報の無い3人との戦闘。

『M&P;S&P;E』と戦った後、次は『P&P;B&P;H』とも戦わないといけないのだ。

特別枠の対戦相手を計6人も相手取らなければならないという自由過ぎるルールに観客のヒーローの一部が訝しんでいたが、当のアクトが不満と受け取っていないのであればと抗議の声は挙げなかった。仮に抗議の声を上げたとして、アクトが『邪魔をするな』と逆に抗議側を怒鳴りつけていただろうが。

アクトとしてはこの日の為に雄英高校が依頼したプロヒーローか、それとも教師が相手取るのかと予測するが、前者の場合対戦相手の絞り込みは不可能で、後者であればある程度は絞り込めるだろう。

このイニシャルがヒーローネームで記載されていれば、初戦の相手は――、

「――アクト、アクト!!」

「ん、どうした響香?」

・・・そういえば何故チアの服装をしている、体操着はどうした? その格好で本戦に出るとするのは・・・お前の家族が大爆笑必至だろうな」

「こ、これは峰田と上鳴に騙されて・・・」

「ほう、詳しく?」

アクトは響香から峰田と上鳴に騙された1年A組の女子が着ていることによく気付いた。

恥ずかしいのか、響香はアクトと視線を逸らしたままそっぽを向いているがイヤホンジャックがゆらゆらと揺れ、明るめで凝った作りをしたコスチュームを着て両手にボンボンを持ったまま腕を組んでいる仕草など実に似合っていると感じを述べた。

更に茹蛸の様に真っ赤になる響香を見て楽しんでいたのだが、話を聞いていく内に雲行きが怪しくなっていく。

全員分のチアコスを本戦に進んでいる八百万が個性を使って生み出したことを聞いてアクトは目を吊り上げる。

先程までの楽しい気分が台無しになるくらいに、アクトの不快指数は上がったた。

「・・・電気、峰田、ちょっと来いお前たち!!」

急に声を上げたアクトに2人は恐る恐るやってきた。

「ど、どうしたんだよアクト!？」

「なんでそんな怒ってるわけ!？」

「な、何だよ加減!!」

お前だつてさっきまで耳郎のチアコス見て鼻の下伸ばしたじゃねえか!!

「そんなお前が怒つたつて、説得力ねえぞ!!」

上鳴はどうしてアクトが目を吊り上げて怒っているのか分かっておらず戸惑っているが、峰田に至っては嫉妬も交じってか逆ギレしていた。

「そうだな、響香が可愛らしい服装をしているのは大変結構だ、あとで写真を撮ってスマホに送ってやる」

「あ、アクト、話が脱線してるから!!」

「つていうか撮るな、絶対に撮るな!!」

「加減さんいいんです、わたくしが騙されたのが悪いんです。」

「これくらいなんともないので・・・」

アクトが自分の為に怒ってくれている事に気付いてやってきた八百万が申し訳なさそうな表情をしていたが、ことはそう簡単なことではない。

「ほらっ、八百万もいって言うてるからいいじゃん!!」

「てか加減いまさらっつと写真撮るつて言うてるし、お前だつて良い思八百万いしてんじゃねえか!!」

被害者からの弁護に息を吹き返してきた2人にアクトがぴしやりと言い放つ。

「響香と八百万は少し黙っている、バカが付け上がるだろうが。」

響香から経緯を聞いて正直呆れたぞ?」

八百万の個性を服を作るのに何人分か使わせて、いざ本選で常闇と満足に戦えなかつたらどうする責任を取る気だ!!」

「そ、それは・・・」

「だ、だって・・・」

予選時は何でもありとプレゼントマイクは言っただけだが、既に本選にまできて体力的にも精神的にもきつい状態の筈の八百万を2人が『相澤教師からの伝言』という普段の八百万であればウソと分かるだろう戯言を信じてクラスメイトのチアコスを作らされたのだ。

休憩時間中に個性を回復させる為の食事を摂っていたのに、本選前に使用してしまったのである。

騙し打ちした上に足を引つ張ったといわれても仕方ないだろう。

予選落ちした峰田はさておいて、上鳴は八百万と違うブロックとはいえ足を引つ張ったと取られても仕方ない状況だ。

『どうせアクトが優勝するだろうから構わないだろう』と投げやりになって欲望に走ったという最悪な想像をしたが、欲望に走ったものの、足を引つ張るといった悪意はなかったようだったがそれはそれの問題である。

「俺はともかくとして、お前たちはこの高校生活において3回の体育祭の実績で将来の足掛かりに行かないといけないのだろうか？」

それをチアコス姿の響香たちが見たいからと騙しやすい八百万を使っただけで補給していたにも拘らず個性を行使させるだぞ？

自分の欲望を優先して競争相手の足を引つ張るとは・・・ヒーローを目指す者として恥ずべき行いだろうが!!」

アクトにこれでもかと雷を落とされてようやく事の重大さに気付いたのか、2人揃って八百万の前に立って頭を下げた。

「や、八百万悪かった、ごめんなさい!!」

「お、オイラが悪かったよ、本選前なのに個性使わせちゃまってごめんなさい!!」

「・・・謝罪は受け取りましたわ。」

まだ時間がありますし、補給すれば本選には間に合うので大丈夫です。

加減さんも、わたくしの為にありがとうございました」

良くも悪くも素直な2人の謝罪に八百万も謝罪を受け取ると購買へと走っていった。

アクトは2人へ謝罪と合わせてお詫びも必要だろうと八百万を追いかけるように伝えると、上鳴と峰田は走っていったのだった。

状況を見守っていたクラスメイト達はようやくお説教が終わると本選開始までゆっくりと過ごしていった。

「・・・すまない加減くん、本来であれば委員長である俺が2人を叱責しなければならなかったのに!!」

八百万君へのフォローもせずこんなことに・・・本当にすまない、そしてありがとう!!」

飯田がアクトに感謝を述べていたが、アクトは飯田も先程クラスと合流したばかりで状況を把握していなかったのだから謝罪は必要ないと伝えるも納得しない飯田にアクトも長話をするつもりもないので適当に流すのだった。

そして、時間は流れていき――、

『セメントスの準備はOKなようで、色々あったがこれが最後だ!!』

やっぱこれだろっ、ガチンコ勝負!!』

本選開始の宣言がされる。

これまで培ってきた心・技・体、それに加え知識や知恵を総動員して挑む最後の種目である。

1回戦はアクト対『M&A&P;S&A&P;E』。

『1回戦っ、アメリカからやってきた現役プロヒーロー!!』

速い、強い、怖い、そして速過ぎる!!』

アメリカのシビュラシステムが生み出したシビュラの申し子、ノンストップヒーロー、グッドスピード!!』

「クハハハハハ、楽しませてもらおうか!!」

ステージに立ったアクトはプレゼントマイクの口上を聞きながら対戦手を待った。

程無くしてフードを被った3人がゆっくりとステージに向かって歩き出す。

全身をすっぽりと被っている為、男女どちらなのか分からないがアクトの表情が崩れる事はない。

『対するは特別ルールで相手は3人、フードを被って登場だ!!』

ギリギリまで情報は伏せさせてもらうぜ!!

ヒーローなら事前の情報がなくとも臨機応変に熟してこそ!!

この3人の連携をどうやって崩すのか見物だぜ!!

当然だが殺傷能力の高い攻撃はもちろんだがアウトだから、お互いに注意しろよな!!』

ここまでくるとアクトが完全に不利なのだが、運営側の容赦の無い対応に観客もドン引きしている。

観客側にいるヒーローたちも、アクトが相手をするのが日本の現役ヒーローなのだろうと推測していたが、それが3人もいてしかも連携してアクトと対するとなると思うとアクトに同情の念を禁じえなかった。

審判はミッドナイトではなくハウンドドッグが唸りながら離れた場で立っており、彼が務めるようだ。

「グルルルル、それでは、試合・・・開始いっ!!」

ウオオオオオオオオンッ!!」

第一回戦、開始。